

V 中の山古墳の調査

一 遺構

中の山古墳については、今まで周堀の形態や埴輪の使用が不明であった。

そこで、今回の調査では、この点を明らかにすべく、墳丘くびれ部には直交する第1トレンチ、後円部後方にはほぼ主軸に平行した第2トレンチ、周堀のコーナー推定位置には第3トレンチと二つの調査区を設定して調査を進めた。

(一) 第1トレンチ(第41・42・44・45図)

幅三呎、長さ三三・五呎のトレンチである。墳丘裾を検出するため、さらに幅一・五呎、長さ一・五呎の範囲を広げて調査した。このトレンチで発見された遺構は、内堀、中堤、外堀である。

内堀(SA)

内堀は、上幅一二・一呎、下幅一〇・七呎を計り、底面は、平坦であった。

堀底は、標高一七・二呎で一定していた。遺物は、第44図の第三層から第六層の間で、堀底直上の堆積土からはほとんど検出されなかった(詳細は後述)。堀底直下には一〇センチ強の厚さで、ハードロームブロックと黒褐色粘土の混合土層があり、粘性、しまり共強く、掘り方の埋め戻し版築土とみられた。

内堀墳丘より部分では、堀底が約三〇度の傾斜で立ち上がった後、緩斜面をなしていた。テラス部と推定され、ロームブロックと黒色土ブロックを含む墳丘の崩落土で覆われていた。

中堤(SB)

ローム層を削り出して成形されていた。上幅七・九呎、下幅八・七呎で、中堤中央部の標高は、一八呎を計る。

中堤上面にみられるロームブロックと黒色土ブロックを多量に含む層は、一〇センチ程の厚さで、一部は外堀に流れ込んでいた。この層は、中堤に積まれた盛土で、崩れて外堀に流れ込んでいたことを示している。

中堤内堀側の肩部では、地山と異なる幅一・六呎の暗褐色土がみられた。確認するため、補助トレンチを設定し、三〇センチ程掘り下げた結果、階段状の成形が行われた部分に盛土されていることが判明した。

中堤の平面プランは、内堀側がほぼ直線であるのに対して、外堀側は、屈曲していた。墳丘の主軸とは平行せず、若干北側に向かって開く。

中堤上の中央部で、一基の土壇(SK1)と二つのピット(P₁・P₂)が検出された。SK1は長さ一・六六呎、幅〇・五五呎の隅丸長方形の土壇である。P₁は、直径三六センチ、深さ五三センチ、P₂は、直径三四センチ、深さ三九センチである。これらの遺構の覆土は、いずれも暗褐色土で、下半は、ロームブロックを多量に含んでいた。出土遺物はなかったが、近接した外堀から平安時代の須恵器坏片が出土しており、これらの遺構は、平安時代に掘られた可能性があろう。

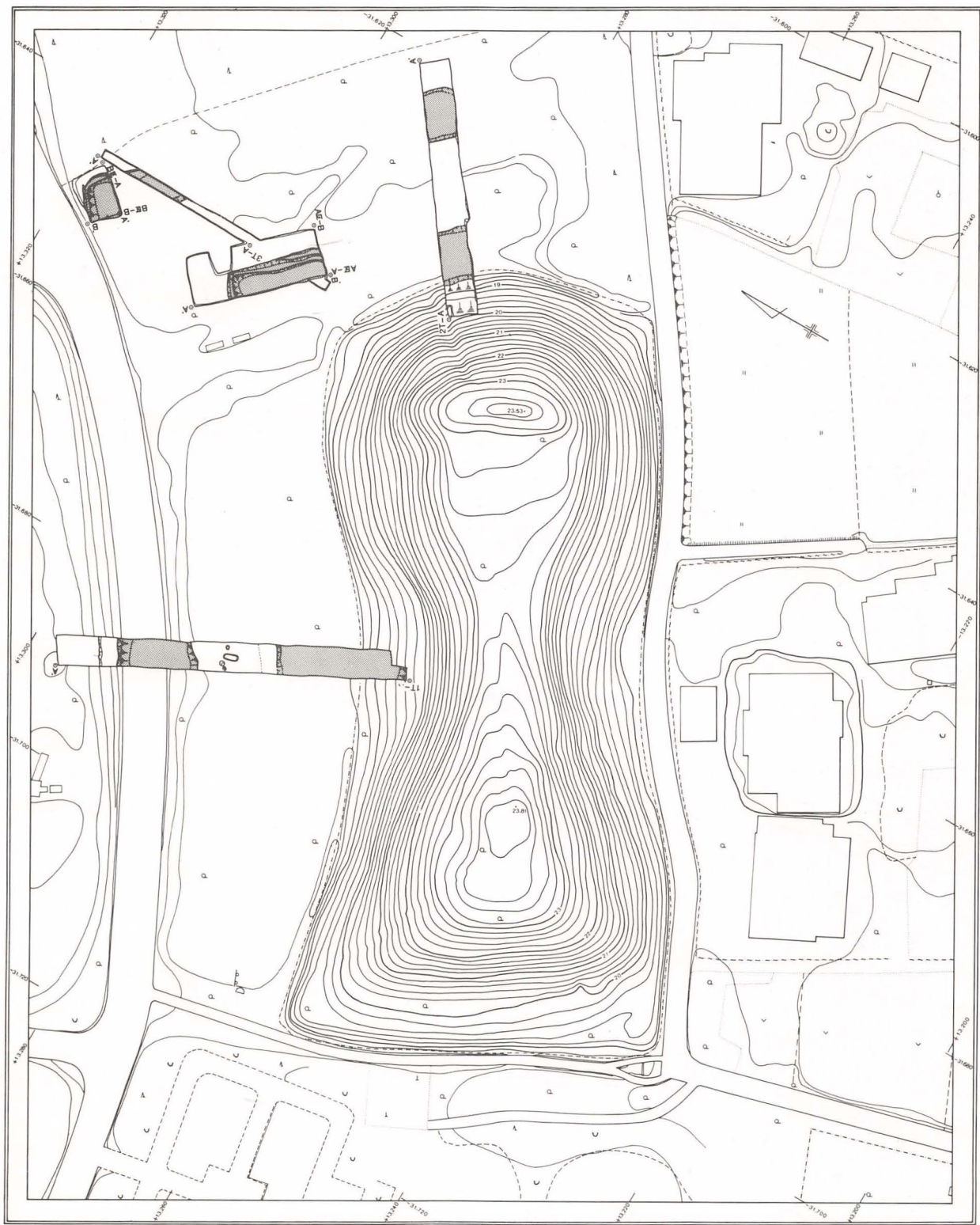
外堀(SC)

上幅八・一呎、下幅七・六呎で、底面の標高は、一七・二呎前後である。覆土の堆積は、内堀とほぼ共通し、堀の最下層からは、多数の珪藻化石が検出され、一時的に帯水状態にあったことが明らかになった(自然科学分析編参照)。中堤側及び外堤側の斜面は、ともに約六〇度の傾斜であった。

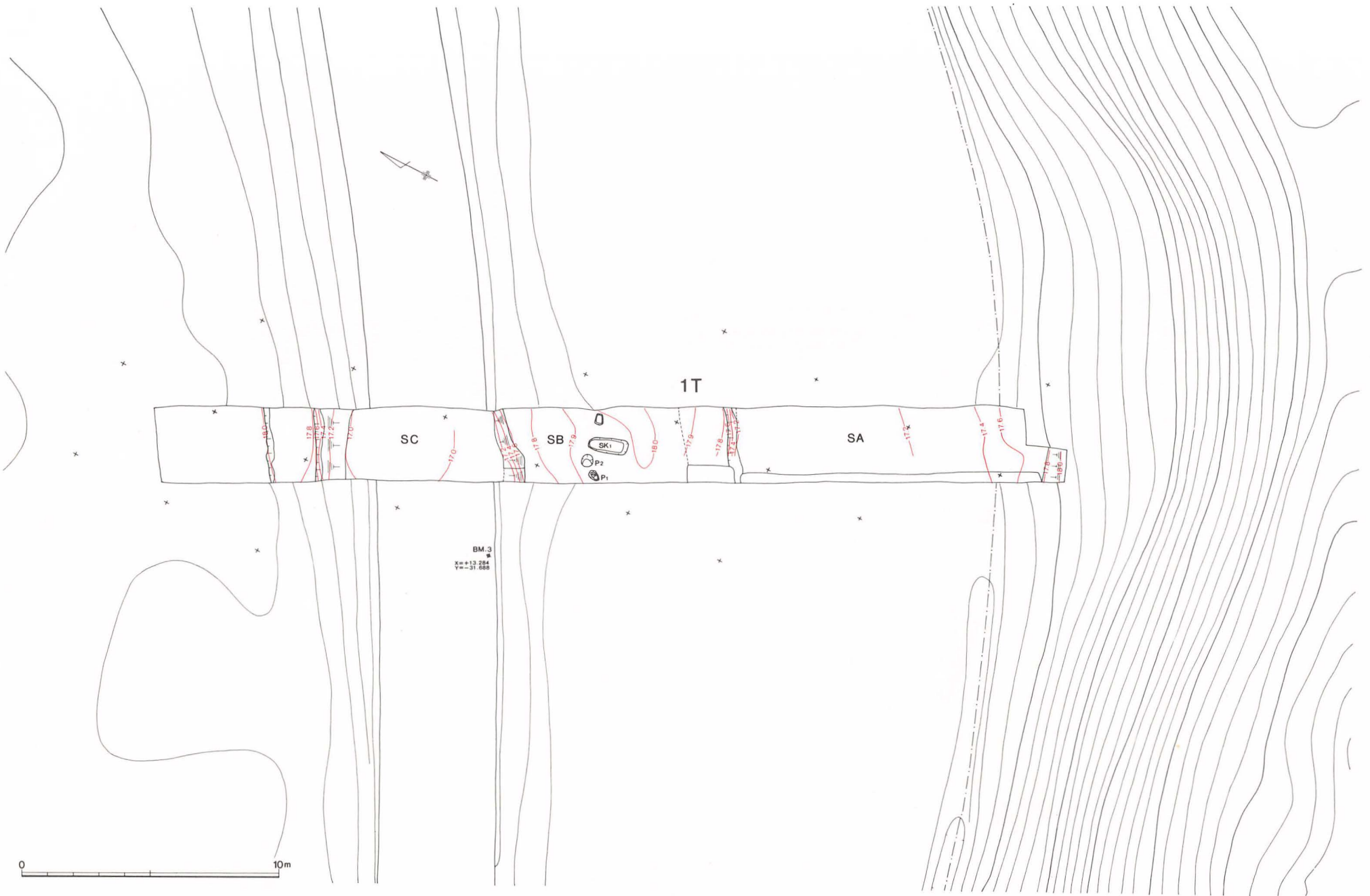
平面プランは、外堤側では、ほぼ直線であった。



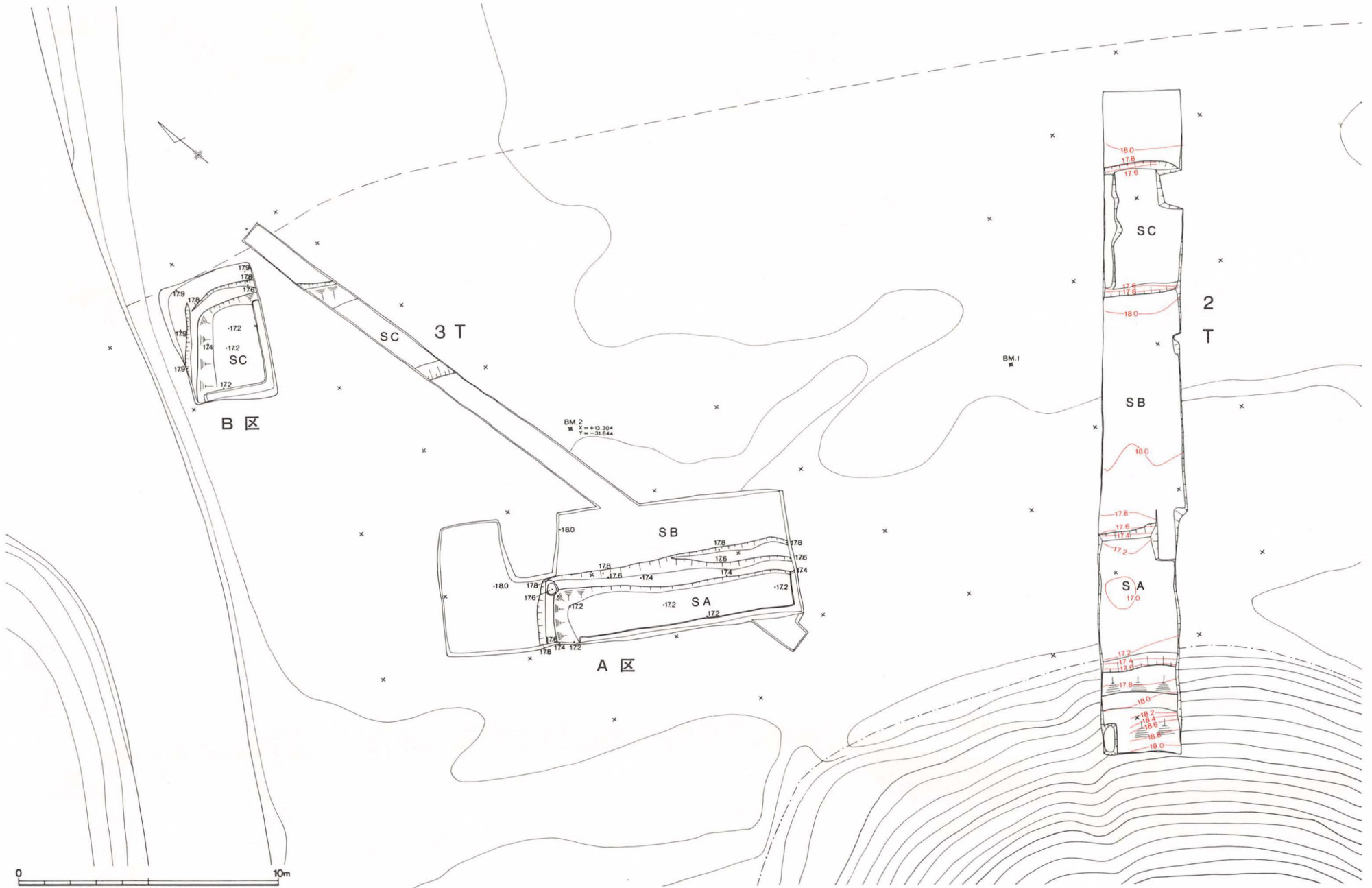
第40図 中の山古墳と埼玉古墳群南群 (1/2,000)



第41図 中の山古墳測量図及び調査区の位置（1/600 スクリーントーンは周堀部分を示す）

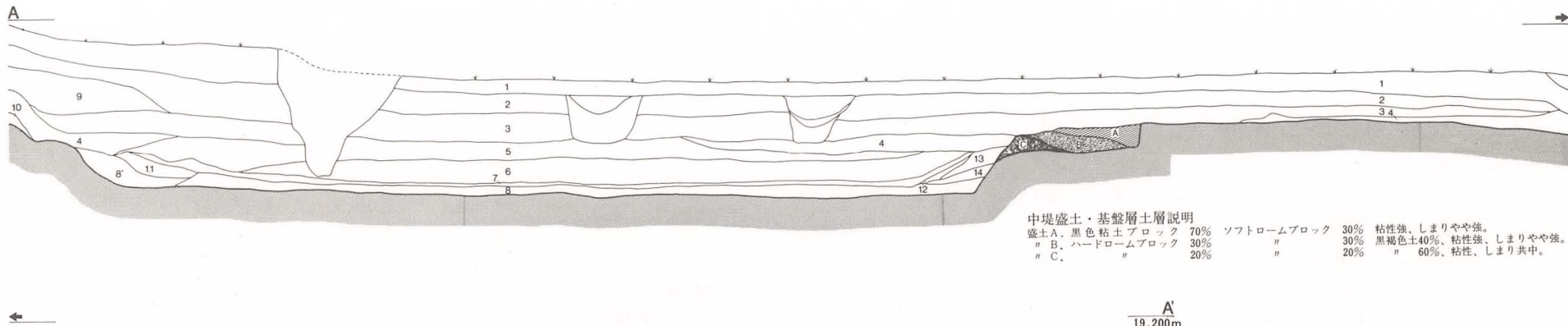


第42図 中の山古墳調査区平面図1 (1 T : 1/200)

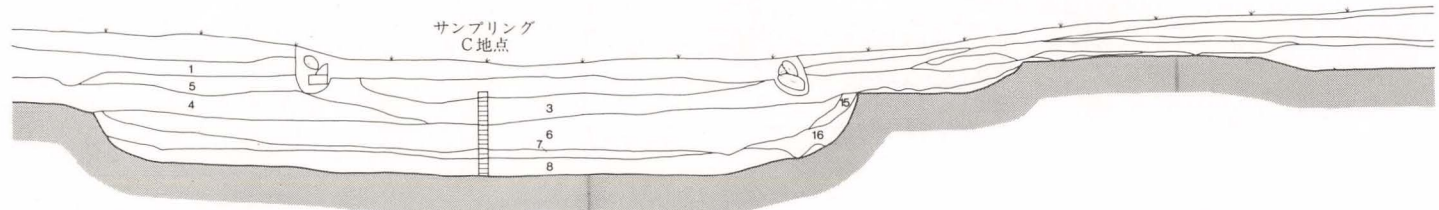


第43図 中の山古墳調査区平面図2 (2T・3T・A区・B区: 1/200)

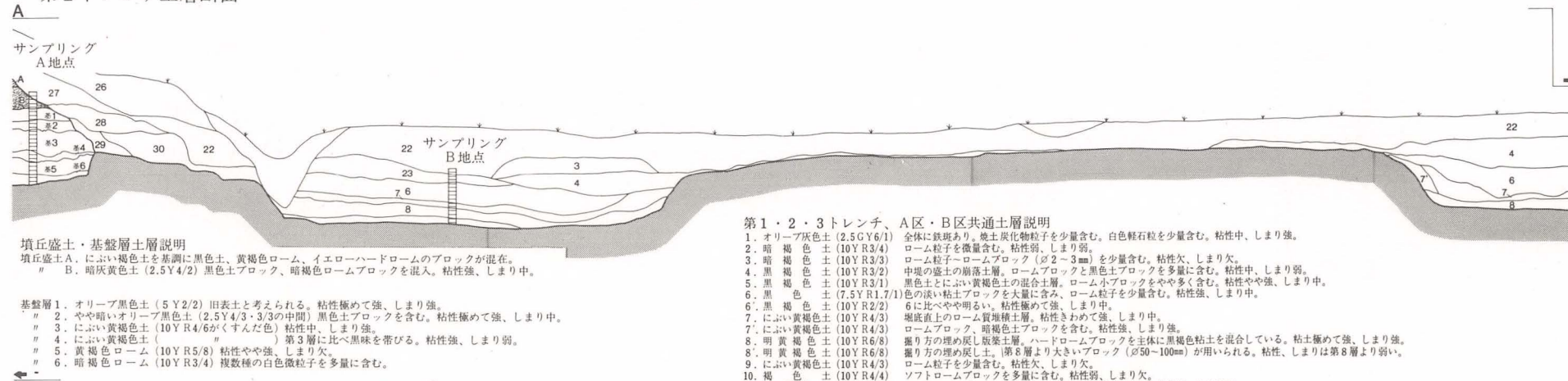
第1トレンチ土層断面



サンプリング
C地点

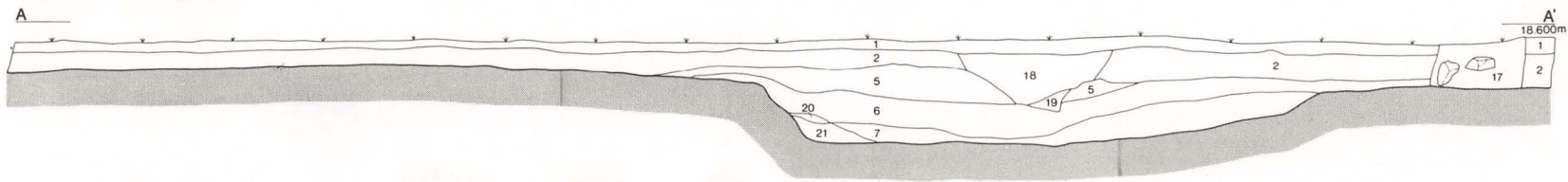


第2トレンチ土層断面

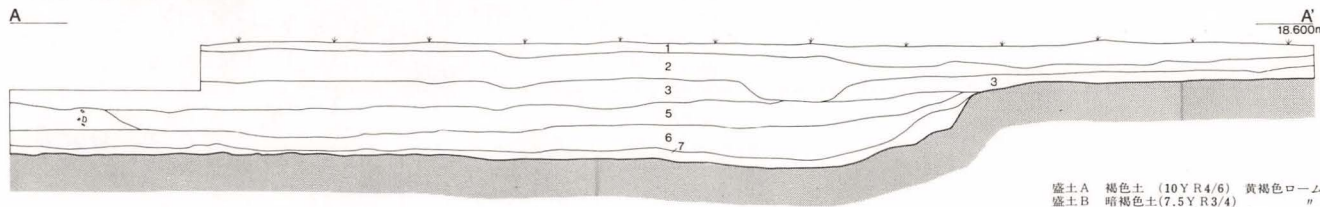


第44図 中の山古墳土層断面図1 (1T・2T:1/80)

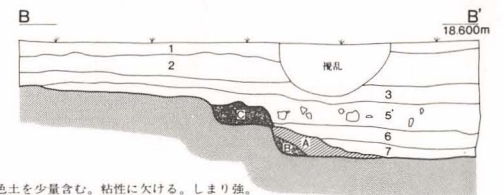
第3トレンチ土層断面



A区 南西壁 土層断面

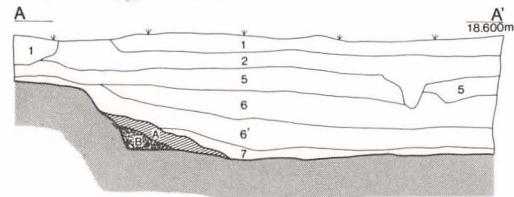


A区 南東壁 土層断面

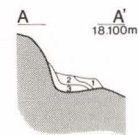


盛土A 褐色土 (10Y R4/6) 黄褐色ロームブロック・黒色土を少量含む。粘性に欠ける。しまり強。
 盛土B 暗褐色土(7.5Y R3/4) 少量・黒色土ブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまり中。
 盛土C 黒褐色土(10Y R3/2) 褐色ハードロームブロック・黄褐色のロームブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまり強。

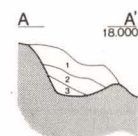
B区 東壁 土層断面



A区ピット 土層断面



B区ピット 土層断面



0 2m

A区ピット土層説明

1. 黒褐色土(10Y R3/2) 微細なローム粒子を多量に含む部分がある。粘性弱。しまり中。ロームブロックと黒褐色土ブロックを含む。1に比べローム含有量の低い分だけ暗い。やや粘性・しまり強。
2. 暗褐色土(10Y R3/4) ロームブロックを多量に含む。粘性欠。しまりは極めて強。

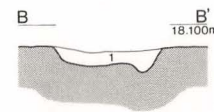
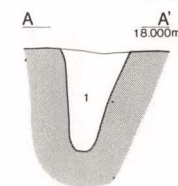
B区ピット土層説明

1. 極暗褐色土(7.5Y R2/3) 全体的にまだら状に堆積する。黒色土と径1-7mmのロームブロックが混合する。粘性欠。しまり強。
2. 暗褐色土 (10Y R3/4) 極めて微細な黒色土及びローム粒子を多量に含む。粘性弱。しまり欠。
3. 黒褐色土 (10Y R2/3) ローム粒子を多量に含む。粘性弱、しまり中。

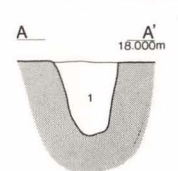
中堤上土壇断面図



中堤上ピット1 土層断面図



中堤上ピット2 土層断面図

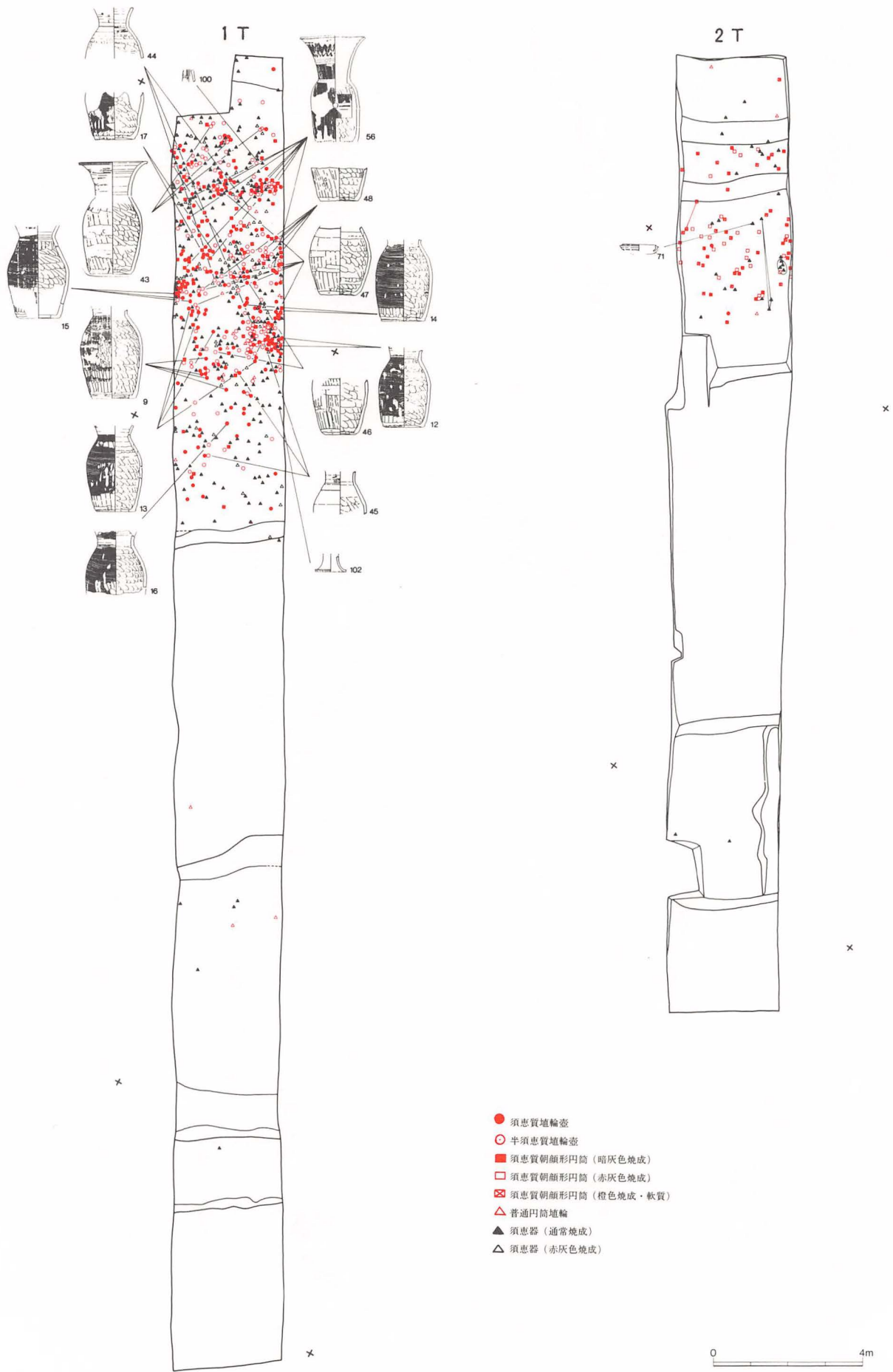


SK1 暗褐色土(10Y R3/4) 基本的には一層だが、下位ほど、ロームブロックを多量に含む。

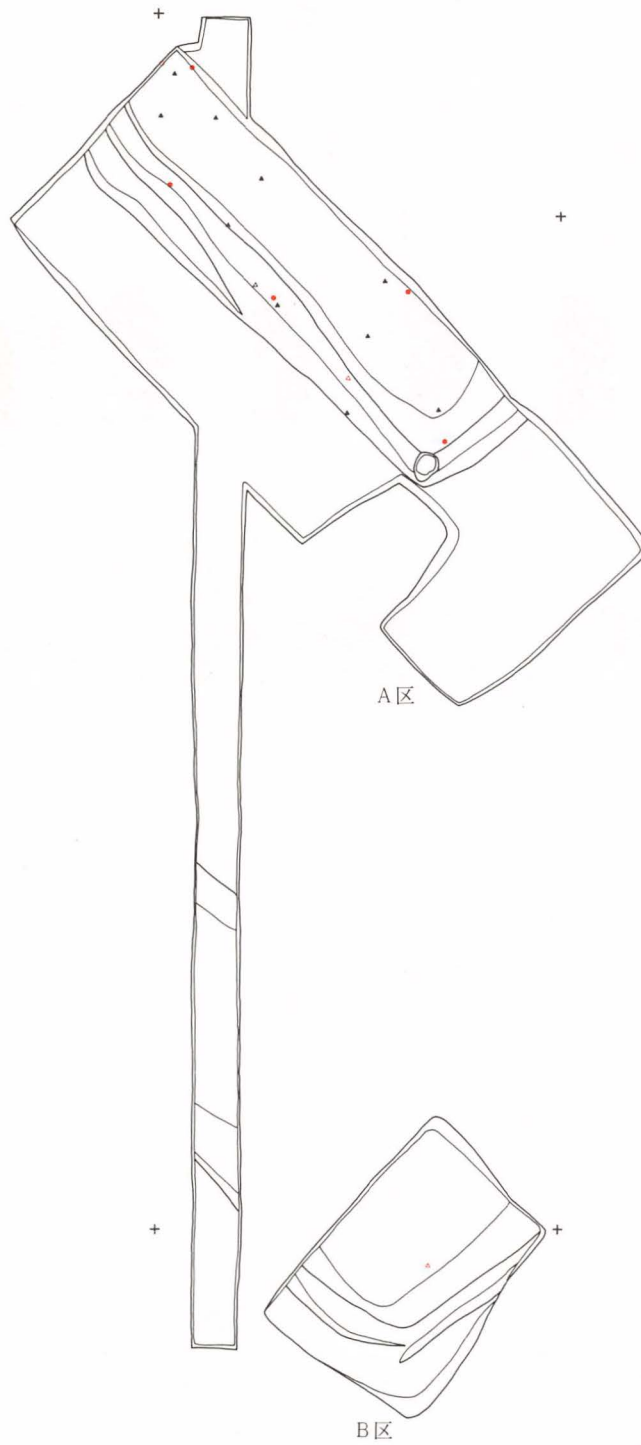
中堤上ピット1・2共通 暗褐色土(10Y R3/4) 基本的には一層だが、下位ほど、ロームブロック(径20mm±)を多量に含む。

0 1m

第45図 中の山古墳土層断面図2 (2T・3T・A区・B区: 1/80)



第46図 中の山古墳遺物出土位置図1(1T・2T)

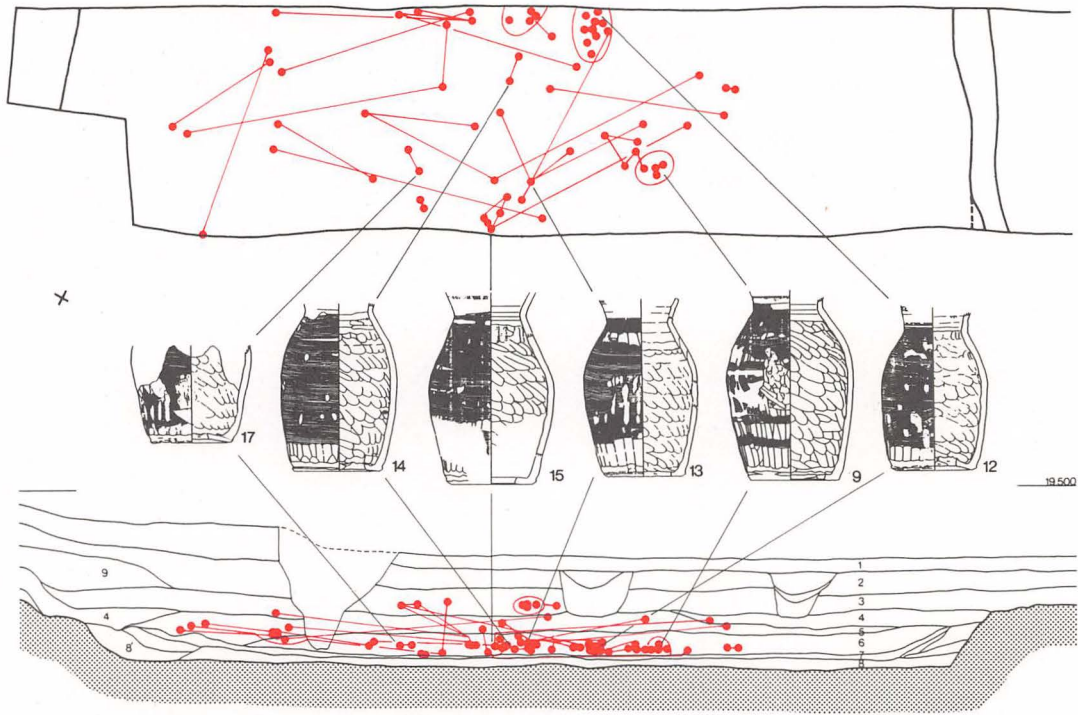


- 須恵質埴輪壺A類
- 須恵質埴輪壺B類
- 須恵質朝顔形円筒 (暗灰色焼成)
- ◇ 普通円筒埴輪
- ▲ 須恵器 (通常焼成)
- △ 須恵器 (赤灰色焼成)

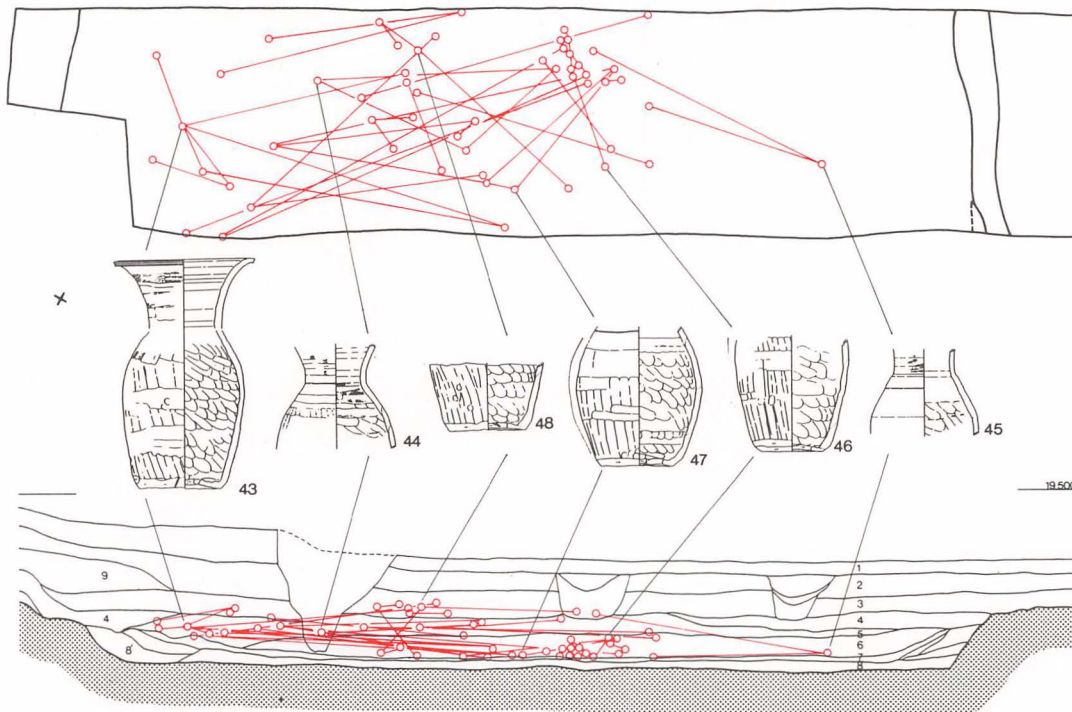
0 4m

第47図 中の山古墳遺物出土位置図2 (A区・B区: 1/150)

1 須恵質埴輪壺A類接合関係図



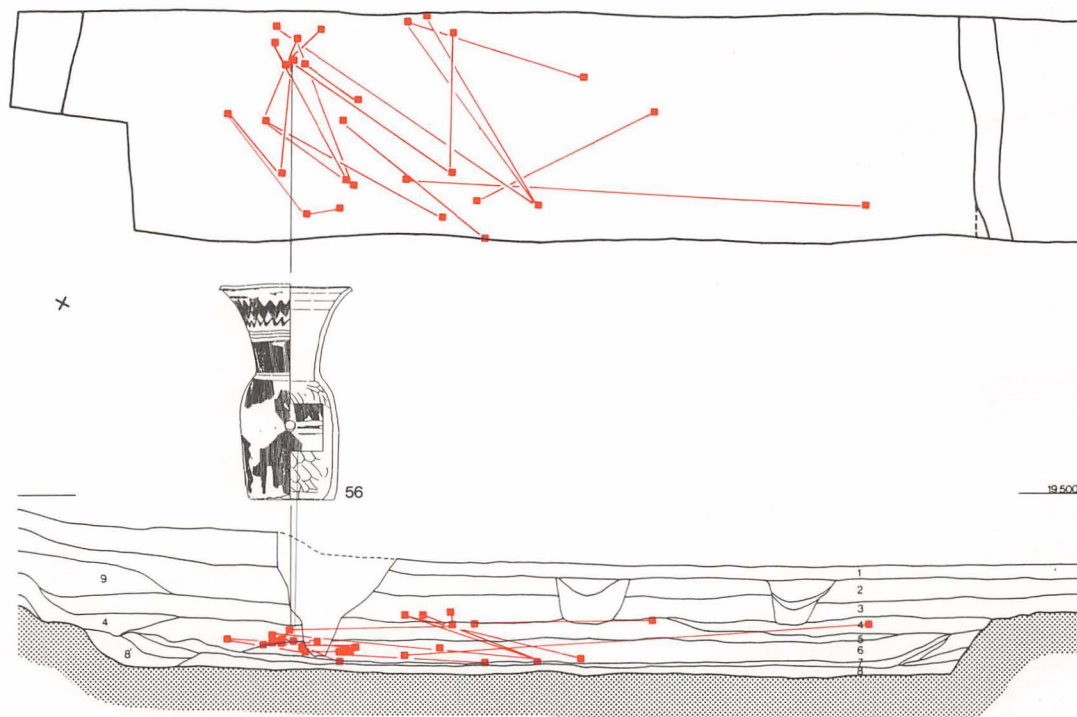
2 須恵質埴輪壺B類接合関係図



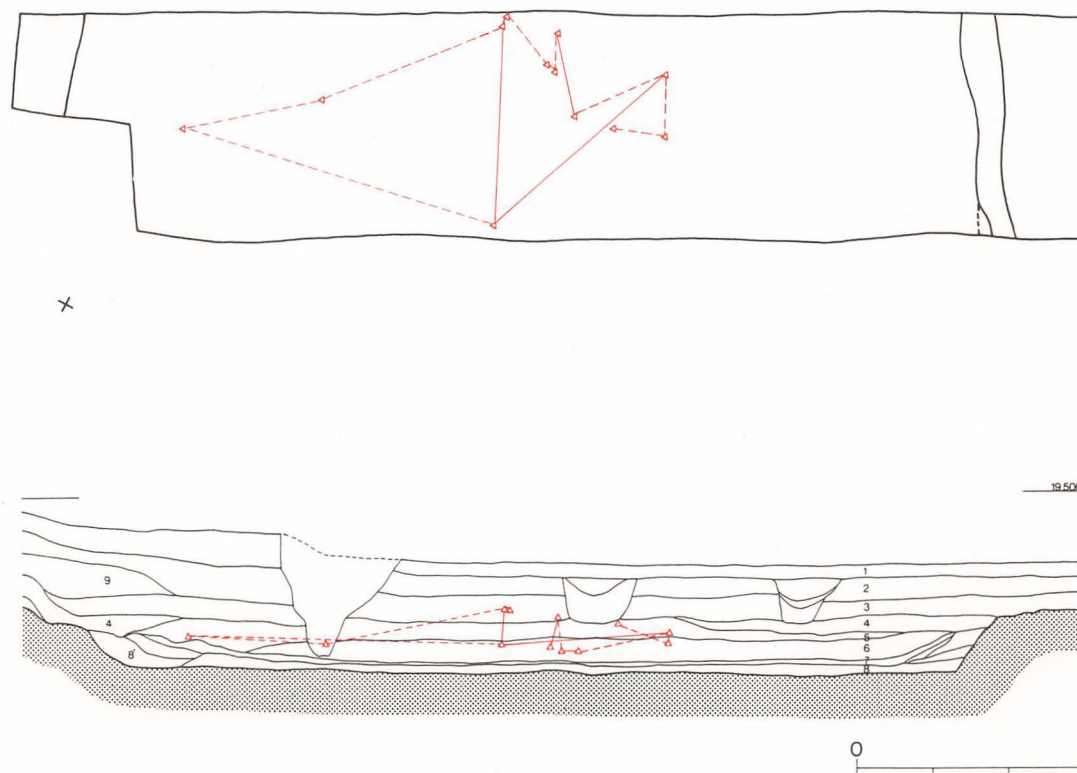
0 4m

第48図 中の山古墳1 T出土遺物接合関係図1 (1/100)

1 須恵質朝顔形円筒接合関係図

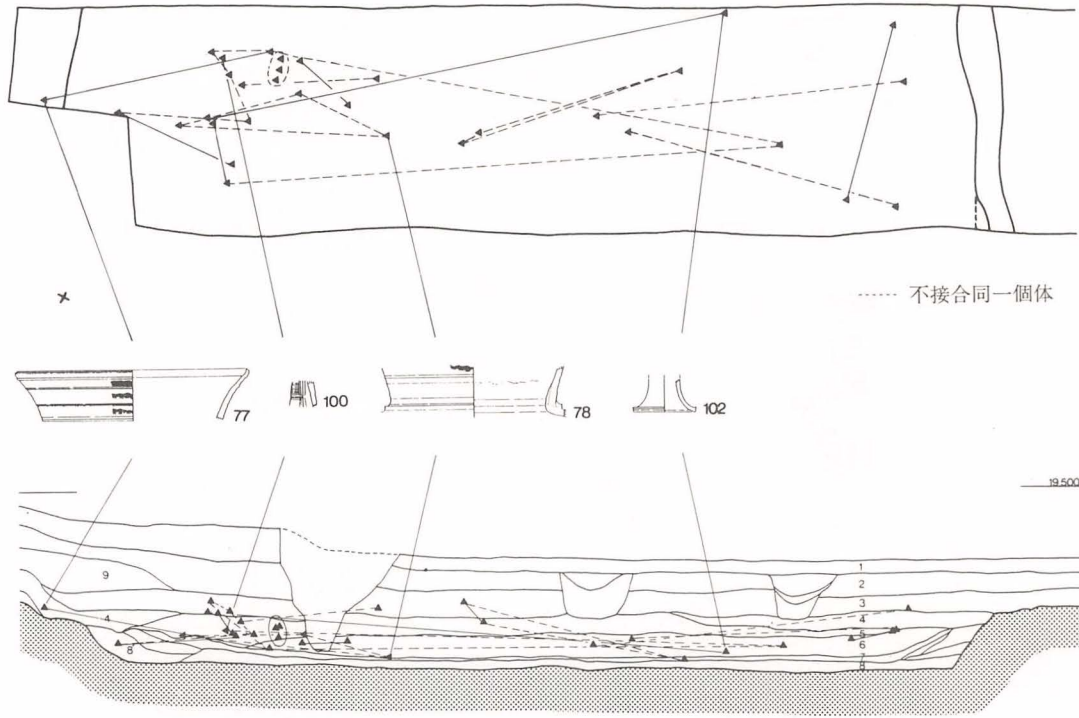


2 普通円筒埴輪接合関係図

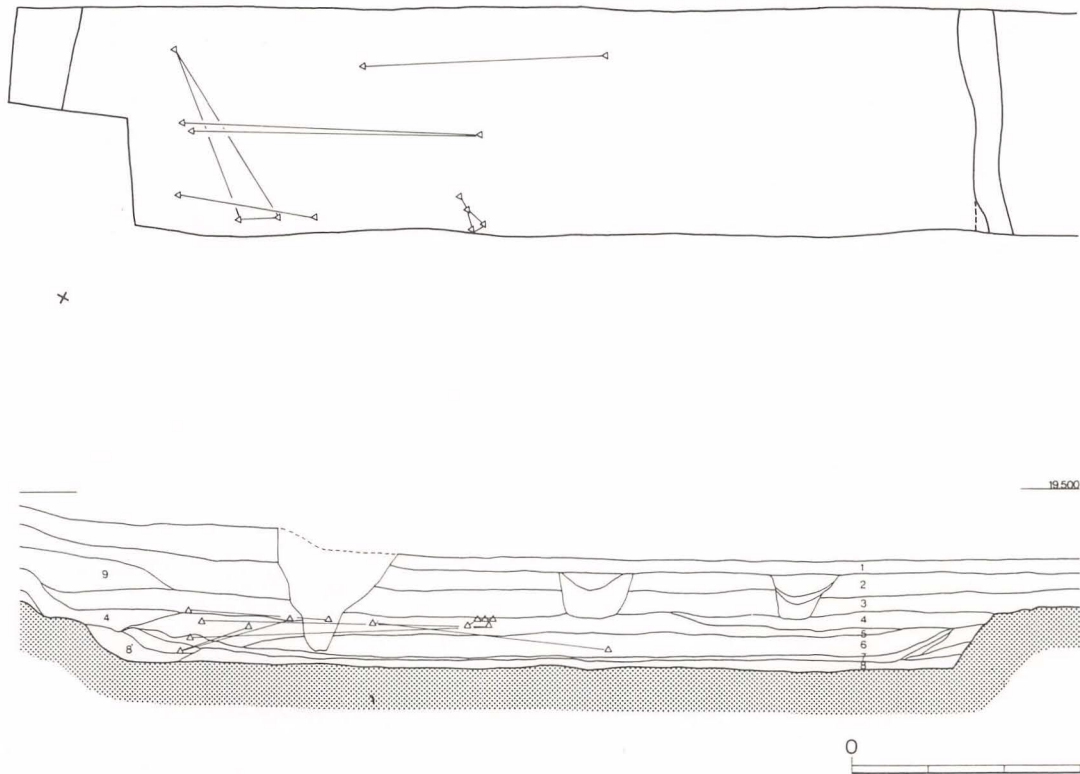


第49図 中の山古墳1 T出土遺物接合関係図2 (1/100)

1 須恵器（通常焼成）接合関係図



2 須恵器（赤灰色焼成）接合関係図



第50図 中の山古墳1 T出土遺物接合関係図3 (1/100)

外堀の外側は、幅一・二層ほどの平坦面を造り、さらに高さ約三〇センチ、幅二・五層の一段高いテラス面がみられた。その位置や断面の形態から外堀の外側にめぐっていた外堤かもしれない。

(二) 第2トレンチ(第41・43・44図)

後円部後方に設けた幅三層、長さ二五・五層のトレンチである。墳丘の立ち上がり部、テラス面、内堀(SA)、中堤(SB)、外堀(SC)が明らかになった。

墳丘及びテラス面

墳丘裾に堆積した崩落土を除去すると、墳丘が四〇度の傾斜で立ち上がっていた。ロームブロックと黒色土を混在した盛土の下には、旧表土と考えられる黒色土が約三〇センチ堆積していた。この層から薄い火山灰層が検出され、分析したところ、榛名山二ツ岳噴出火山灰(FA)であることが確認された(自然科学分析編参照)。なお、旧表土上面の標高は、一八・六四層である。

墳丘と内堀の間からは、ローム層を削って成形されたテラス面が検出された。テラス面は、一〇度前後の緩い傾斜で堀に向かって下がる。幅は、二・一層である。テラス面の覆土からは、須恵器や須恵質朝顔形円筒片が出土したが、据え付けるための掘り方は、発見できなかった。

内堀(SA)

内堀は、上幅五・五層、下幅四・八層である。堀底は、二〇センチほどの埋め戻しされた版築層がある。覆土の堆積は基本的に第1トレンチと共通し、最下層では帯水性の珪藻化石が検出されている。

中堤(SB)

上幅九・〇層、標高一八・〇層で、ローム層を削り出して成形されていた。

ローム層の上には、ロームブロックに黒色土ブロックを多量に含む土層がわずかに残っていた。堆積状態から中堤上の盛土層と思われる。

外堀(SC)

上幅六・五層、下幅四・一層で、覆土の堆積は、内堀と基本的に同じである。外堀の外側は幅一・三層の平坦面があり、さらに、階段状になって一五センチほど高くなり、幅一・六層(調査範囲内)のテラスとなる。

(三) 第3トレンチ及びA区・B区(第41・43・45図)

第3トレンチは幅一層、長さ二六・三層のトレンチである。内堀(SA)、中堤(SB)、外堀(SC)が検出された。このトレンチでは外堀部分だけを完掘した。上幅は、四・五層(斜距離の修正値)である。覆土は、他地点と同様である。堀底の標高は一七・三層前後であった。A区は内堀、B区は外堀の隅部を確認するために設定された調査区である。

A区

幅五層、長さ一三・五層の調査区で、内堀隅角部と中堤の一部が検出された。隅角部から伸びる両辺は、直線的で、ほぼ九〇度で交わる。掘り方は、下段が緩く、上段は、六〇度で立ち上がる。調査区南東部の内堀の一部には、階段状の掘り方がみられた。深さは、中堤のローム面からでは〇・八層を計る。なお、隅角部からは直径五〇センチ、深さ二〇センチのピットが検出された。

B区

ほぼ幅三・五層、長さ五層の調査区である。外堀外側隅角部が検出された。この調査区でも両辺は、直線的である。内堀と同様、階段状の掘り方で、下部には貼り土が行われていた。隅角部には直径九〇センチ、深さ五〇センチのピットが検出された。

(若松 良一)

遺物の出土状況（第46～50図）

第46・47図に示した各調査区における遺物の出土状況には、顕著な偏在傾向が認められる。すなわち、第1・第2トレンチでは内堀において集中的な分布を見せるのに対し、中堤・外堀での分布は希薄である。第3トレンチ・A区・B区ではA区内堀に多少の分布を見るものの、第1・第2トレンチほどの集中傾向は認められず、それ以外ではほとんど遺物は見られない。

そこで総重量に占める遺物重量の割合を見ると、第1トレンチ内堀90%、第2トレンチ内堀7%、第1トレンチ外堀、A区内堀それぞれ1%となり、他は1%に満たない。遺物の集中傾向が見られた第1・第2トレンチ内堀で、総重量の97%に達し、とりわけ第1トレンチ内堀での出土量が群を抜いている。単位面積当たりの出土遺物の重量を示すと、第1トレンチ内堀 $2.9 \text{ kg}/\text{m}^2$ 、第2トレンチ内堀 $0.4 \text{ kg}/\text{m}^2$ で、他は全て $0.1 \text{ kg}/\text{m}^2$ に満たない。

調査区ごとの出土状況は、第1トレンチでは墳裾から内堀中央までの間に特に濃密な分布が見られ、内堀でも中堤寄りには密度が落ちる。中堤から外堀、外堤にかけてはさらに少なく、いずれも小片となっている。

器種別では単純重量比で須恵質埴輪壺54%、半須恵質埴輪壺20%、須恵質朝顔形円筒6%であり、三者の合計は総重量の八割に及ぶ。須恵器は通常焼成品16%、赤灰色焼成品4%、円筒埴輪は1%である。

器種別の分布状況（第48図1～第50図2）では、須恵質埴輪壺、半須恵質埴輪壺が内堀中央で個体ごとに集中して出土する傾向が観察され、比較的原形を保ったまま内堀に転落した状況が知られる。これに対し須恵器は個体としてのまとまりを見せず、全体の形状が知られる資料は少ない。

接合関係では、同一個体が最高七層以上離れて存在しており、全体に遺物

の移動は激しい。周堀掘削後さほどの時間を経ずに堆積したと考えられる第7層にほとんど遺物を含まず、大部分が第6層以上第3層までの間で検出されている。このうち須恵質埴輪壺、半須恵質埴輪壺の個体がまとまって検出されるのは第6層中である。また、内堀中央では、須恵質埴輪壺、半須恵質埴輪壺、須恵質朝顔形円筒の三器種は、第4層に薄く、第3・6層に集中して分布する傾向が見られる。垂直方向の接合関係では異なった土層間での接合が認められる。この状況は各器種に共通している。

第2トレンチにおいても分布傾向はほぼ第1トレンチと同様であり、墳裾から内堀中央までの間に集中している。これに対し中堤、外堤には全く遺物は認められず、外堀での分布も極めてわずかである。

器種別では単純重量比で須恵質埴輪壺10%、須恵質朝顔形円筒36%、通常焼成品須恵器31%、赤灰色焼成品須恵器21%、円筒埴輪2%である。これを第1トレンチと比較すると須恵器の占有率が50%を越え、須恵質埴輪壺、須恵質朝顔形円筒の合計重量を上回っている。須恵器の中では赤灰色焼成品が四割を占める。また、半須恵質埴輪壺は全く見られず、須恵質埴輪壺、須恵質朝顔形円筒の重量比も逆転している。さらに須恵質朝顔形円筒の焼成にも多様性が認められ、通常焼成48%、赤灰色焼成38%、橙色焼成14%の重量構成を示す。このうち赤灰色焼成及び橙色焼成品は第1トレンチには見られない。

層位的には第1トレンチ同様第7層に遺物は見られず第6層以上第3層までに集中的に分布しているが、接合関係の判明する個体は少ない。

その他の調査区では出土遺物が少なく、有意なデータは得られなかった。円筒埴輪は各調査区に少量ながらも存在し、他の遺物と混在していた。

（若松 良一）

二 遺 物

中の山古墳の調査では、多数の底部穿孔土器と、各種の須恵器片、若干の円筒埴輪片等が出土した。以下にその概要を述べるが、一点ごとの詳細については観察表を作成してある。なお、遺物出土位置図・遺物接合関係図(第46~50図)及び写真図版の遺物に付した番号は、実測図の番号と共通である。

須恵質埴輪壺(第51図~61図上部)

長胴の体部に外反しながら開く口縁部の付く壺形土器は、すべてが、焼成前に、底部穿孔されていた。これらは出土状態及び同形のものが多い出土したことからみて、円筒埴輪的性格をもつものとみられるが、製作技法や形態において、円筒埴輪とは相違点が多い。このような理由から、これらの遺物を須恵質埴輪壺と呼称することにした。製作技法及び形態の違いから二類に分けて、説明を進めていくことにしたい。

A類(5~17・19~20・22~23・25~31・33~35・38~42)

胴部の完存するものが数個体あるが、口縁部が直接、接合するものはなかった。11は、同一個体と認定した口縁部から推定復原したものである。

復原器高は四六・八センチを計る。平底で長胴の体部は、肩部に最大径をもち、倒卵形に近い器形を呈する。撫で肩状の肩部から頸部に至った後、口縁部は緩やかに外反しながら開く。復原口径は三一・六センチである。

成形は、円盤状の底部に接続して、粘土紐を巻き上げている。調整は、胴部外面では、タテヘラナデ(断面が凹面となるので、先の丸いヘラを使用し(たらしい)後、カキメ調整を施している。カキメ調整は底部付近では省略され、上部でも、一次調整のタテヘラナデが残る部分がある。胴部の内面は強

い斜め方向のナデが断続的に施されている。口縁部の外面は、タテヘケ調整後、回転ヨコナデを加え、さらに、カキメ調整で仕上げている。また、口縁部端面には凹線が巡っている。

底部は、焼成前に不整円形状に穿孔されている。外面からの穿孔であり、倒立して行ったものとみられる。底部直上の外面には幅一センチ足らずの凹線が一巡しており、回転台への固定痕と推定される。

胎土中には、溶解した長石等の砂礫を多量に含み、微細な雲母を少量含んでいる。須恵器と異ならない焼き上がりで、灰色(N4/0)を呈する。

他に体部の遺存状態の良いもの(9~10・12~17・40)が九点と、底部の大形破片が二点(19~20)あり、A類の個体数は少くみても一二個体となる。

これらは、製作技法と器形が11と共通し、いずれも還元焼成で灰色(N4/0~5/0)ないし青灰色(5B6/1)を呈し、堅緻に焼き上がっている。

体部外面の調整技法は、共通して、タテヘラナデの後、カキメ調整を行っているが、15は、肩部のカキメ調整下に、平行叩き目が観察された。叩き目のある胴部は、破片を含めた全出土資料中、唯一の例である。

これらの底部は、上げ底状になっているものがあり、12では特に著しい。

また、穿孔は不整円形で、大きさは一定していない。外面の下端部は、粘土が、とび出しており、その直上がくぼむことを特徴としているが、多くの場合、この部分に指でヨコナデが加えられている。また、9・12・15では、下端部を、倒立時にヘラでヨコケズリしている。底面には、篠状の圧痕や、わら状の圧痕が認められ、これらの上に置かれたものと推定される。

5~8と22~23・25~31・33はA類の口縁部である。復原図(5~8)では、法量に若干の幅があることが知られる。

いずれも、ラップ状に、大きく外反しながら開き、外面はカキメ調整されている。カキメの下には、タテハケが部分的に観察できるものと、そうでないものがあるが、大多数は、前述の11と同じく、タテハケ調整後に回転ヨコナデを加え、さらにカキメ調整で仕上げている。口縁端部はヨコナデ調整で、四角く整えられ、端面は平坦なもの(7・22・25)と、浅い凹線の巡るもの(8・23)とがある。26は、倒立時に接地した部分がつぶれている。

B類(1~3・18・21・24・32・36~37・43~52)

43は残存も良く、ほぼ完形に復原できた。胴部の器形はA類と共通しているが、口頸部の形態に相違が認められる。頸部は直立気味に立ち上がった後、かなり上方で、外反度を強め、端部は水平に開いている。口縁部端面にはシャープな沈線が巡っている。成形法はA類と共通し、上げ底状の底部に接続して、粘土紐を巻きあげている。しかし、外面の調整技法はA類と異なる。タテハラナデ後、上半部を中心に回転ヨコナデを加えており、カキメ調整は施していない。内面調整は、A類と共通し、ナナムユビナデである。口縁部外面はタテハケ調整後、回転ヨコナデを施しており、内面も全面的に回転ヨコナデされている。

最後に倒立して、底部を外面からヘラ状のもので穿孔しており、その際に、底部縁辺部を幅広く、面取り状にヨコケズリしている。このヨコケズリの幅が広い点と、その直上部に凹線が認められない点もA類との相違点である。法量は器高四八・〇(セリヤ、口径三〇・〇(セリヤ、底径一七・二(セリヤ)を計る。

外面は、にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、堅緻に焼き上がっている。表面は若干、還元されており、灰白色(5Y8/2)を呈する部分もある。

胎土中には、長石のとけたらしい白色の砂礫を多量に含むほか、チャート

礫、酸化鉄粒、輝石、白色バミス等を含んでいる。

44~48は頸部及び胴部の残存の良いものを復原実測したものである。これらは、48が完全な土師質であるほかは、還元度の低い、赤灰色や灰白色を呈するものである。成形及び調整技法は前述の43と共通している。法量的には若干の幅があり、44~46は43より一まわり小さい。底部は、いずれも上げ底状になっている。底部の穿孔は47のように大きく開けられるもの(直径一〇・四(セリヤ)と、43のようになんまり小さいもの(直径六・五(セリヤ)とがある。

18は底部付近だけの残存だが、外縁部のヨコケズリの特徴からB類と判断した。還元が十分で、暗灰色を呈し、須恵器と異なる焼上がりである。1~3・21・24・32・49~50は口縁部である。3は50%と残存率が高い。器形及び法量が前述の43に酷似しており、端面に沈線の巡る点も共通している。暗青灰色を呈し、須恵器と異なる焼上がりである。

1は端部が水平に開かず、3や43とは器形が異なる。しかし、端面に、鋭い凹線の巡る点に共通性を見出しうる。暗茶灰色を呈し、焼成は良好である。21・24・32は完全な還元焼成品で、暗青灰色ないし青黒色を呈している。

一方、49と50は還元度が低く、49は、にぶい赤褐色、50は褐灰色を呈している。これらは共通して口縁端面に鋭い凹線が巡っている。

B類の個体数は、赤味を帯び、遺存のよい43~48と、還元度の高い1~3からと、最低九個体を数える。なお、4はカキメを用いない点ではB類と共通しているが、外面整形に叩きの用いられる例で、器形が異なり、頸部が細くなることから、別の類型と考えたほうがよからう。

須恵質朝顔形円筒(53~66・69~70)

56はほぼ完形に復原できた。形態及び製作技法に朝顔形円筒埴輪との関連

性が認められるので、須恵質朝顔形円筒と呼称することにした。

器形は円筒形の胴部から撫で肩の肩部をへて、くびれ、直立気味の長い頸部をへて、口縁部で、緩やかに外反して開くものである。法量は、器高四五・二センチ、口径二七・五センチ、底径一九・〇センチを計る。

成形は、基底部から粘土紐の巻き上げによって行われており、器壁の凹凸が顕著である。頸部には、いったん、ヨコナデ調整を施して、乾燥の進んだ段階で口頸部を接合している。底部は内側に向かって、厚くなっている。

調整は、胴部外面では、上から下へタテハケを施すが、肩部だけは、平行叩き（原体は木目に直交した刻みをもつ）を用いている。胴部の中ほどには直径二センチ程の小円孔が対向して一对、穿孔されている。また、この部分には、二条のユビナデ凹線が巡っている。口頸部外面はタテハケの後、上半部を回転ヨコナデで擦り消している。中ほどの位置には、三条のヨコナデ凹線が巡っている。この凹線の上には、振幅の大きい波状文が施文されている。

体部内面は、全面に強いナメナデ調整が行われている。強く、かつ、短い単位のもので、削ったかのような凹みとなっている。頸部内面は雑な縦方向のナデ、口縁部内面は丁寧に、回転ヨコナデされている。口縁端部はヨコナデによって、内外の角が尖り、端面には凹線が巡っている。

焼成は完全な還元炎によるもので、暗灰色（N3/0）を呈し、極めて堅緻である。表面は降灰によって黒色の光沢を帯びている。

胎土は精選されていて、砂粒をほとんど含んでいない。

54～55・57～60は口縁部の破片である。いずれも、前述の56と共通した器形をもち、端部の形状も、類似性が高い。外面には、振幅の大きい波状文が施されるが、内面調整は、56と異なり、カキメが施されている。胎土は、精

選されており、白色バミス、酸化鉄粒、雲母が微かに含まれている点で共通している。焼成程度や色調には差があり、54・55・57・59は暗灰色（N3/0）ないし青黒色（5PG2/1）を呈し、堅緻に焼き上がっているが、58は瓦質の焼き上がり、60は灰赤色を呈するが、良好な焼き上がりである。

53・61～66・69～70は体部の破片である。肩部から胴上半部（61～65）には56と共通する平行叩きが施されている。胴部中ほどの部位（53・62～63）には、推定直径三・五センチの小円孔が穿孔されている。69は胴部で、中ほどに二条のユビナデ凹線が巡る。70は底部で、基底部は内側に厚くなっている。なお、66と70の胎土中には、いわゆる白色針状物質が観察された。

須恵器（71～72・74～115）

71は蓋坯の身である。小片からの復原実測であるが、口径は一四センチ前後となる。立ち上がり部は短く、内傾している。比較的丁寧な製作だが、シャープさを欠いている。また、現存部にはヘラケズリは認められない。体部外面に自然釉がかかり、黒色の光沢面となっている。胎土は精良である。

100は長脚二段二方透しの高坯脚部である。節帯の上部はカキメ調整が施されている。軟質で、外面は暗青灰色、器肉は明赤褐色を呈している。胎土には砂礫をやや多く含んでおり、長石、石英、雲母、白色バミスが観察される。101は器台の脚部とみられる。外面はカキメ調整が施され、長方形（台形に近い）透が穿孔されている。三方に開くものと推定される。焼成は良好で青灰色を呈している。胎土中には砂礫をやや多く含んでいる。

102は高坯の脚部と推定したが、現存部に透孔は認められない。円筒状の脚柱部をもち、裾部はラップ状に開く。脚端部には明瞭な凹線が巡っている。内外の調整が雑で、器表に粘土しわが残る。底径は一三・二センチを計る。焼

成は良好で、灰色を呈する。胎土には砂礫をやや多く含み、溶解した長石と雲母が観察される。

77は復原口径四九センチを計る大甕の口縁部で、口唇部は内彎し、先端が鋭く尖る。四本の凸帯間には振幅の小さい波状文が巡っている。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は長石等の砂礫をやや多く含む。

78は復原頸部径三七・〇センチを計る大甕の頸部で、断面三角形の補強凸帯が巡っている。外面は褐灰色、器肉はにぶい赤褐色を呈し、還元度の低い焼成である。胎土には礫を少量含み、長石、石英、雲母が観察される。

72は別個体の頸部補強凸帯甕片で、緑灰色を呈し、焼成は良好である。

79と81と83は同一個体の大甕胴部片で、復原径は一拵近い。外面は目の粗い平行叩きが施され、内面には同心円状の当て具痕が残されている。

75と76は第2トレンチ出土の同一個体片で、復原胴部径は一拵近い。焼成は良好だが、還元度は低く、外面はオリブ灰色、器肉は橙色を呈する。

103と112には甕の口縁部の内、特徴的なものを掲載した。103と107には細かい波状文が簾状文のように止めながらリズムカルに施文されている。

104と105は口唇部の沈線の下に、緩やかで、整った波状文が施文されている。104の復原口径は三九・六センチである。共に胎土には砂礫を多く含む。

106は頸部の復原径が一六センチを計る小型甕の口縁部である。振幅の小さい波状文が、外面のほか、内面にも施文されている。胎土中に粗砂を含む。

108の復原口径は三二センチを計る。口縁端部が四角く収められている点特徴的である。波状文はリズムカルに施文されている。内外面とも平滑で、丁寧な製作である。色調は黒色に近く、極めて堅緻である。胎土は精良。

109は、外面に三段にわたって櫛歯刺突文が施文されている。胎土は精良で、

焼成も良く、灰色を呈し、降灰による黒色光沢部分がある。

111は沈線にはさまれる部分に、木口状工具による刺突文が施文される例である。胎土中に細砂を含み、焼成は極めて堅緻で、灰白色を呈する。

85と93・95と98は中型の甕の胴部破片である。いずれも外面には平行叩き目文、内面には当て具の同心円文が残る。このうち、85と87と95と98には、カキメ調整が施されている。88と92は細かい木目に直交した刻み目をもつ特徴的な工具によって叩き整形したものである。焼成が良く、表面に降灰による自然釉の付着するものが多い点と、胎土が精選されている点で共通している。このうち、88と92の胎土中には、いわゆる白色針状物質が確認された。

93は外面に焼台の溶着した例である。須恵器環蓋の天井部には回転ヘラケズリが認められる。本体の胎土には長石礫と雲母を多量に含んでいる。

99は小型の球形胴をもつ壺の破片である。焼成は極めて良好で、緑黒色を呈し、厚く自然釉がおおっている。フラスコ形土器の可能性が有る。

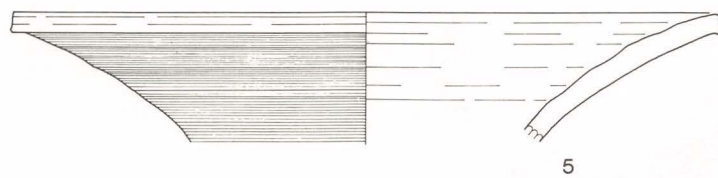
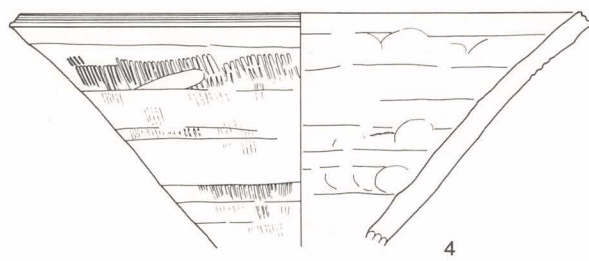
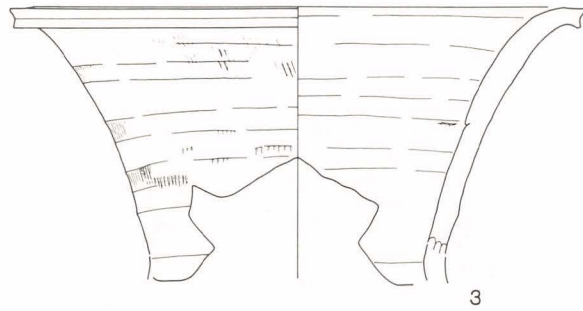
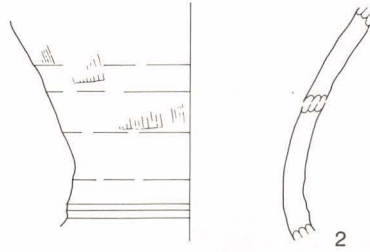
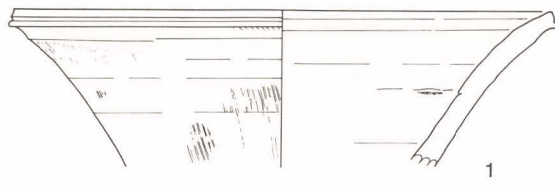
円筒埴輪 (68・116と126)

いずれも土師質の焼成で、橙色を呈するものが多い。外面調整はタテハケである。極めて低平なM字形凸帯をもつもの(68・117・118・119・121・124と)、台形に近い凸帯をもつもの(120・122)、三角形の凸帯をもつもの(123)がある。透孔は117が円形、120は水平に切られており、長方形の可能性が有る。122と126の胎土中には、いわゆる白色針状物質が確認された。

形象埴輪 (67)

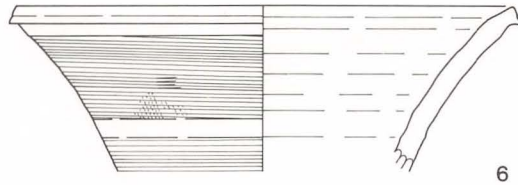
円筒部に粘土板を貼り付けており、器財形埴輪の一部と推定される。明赤褐色を呈し、胎土中には、チャート、長石、結晶片岩などの砂礫を多量に含んでいる。

(若松 良一)

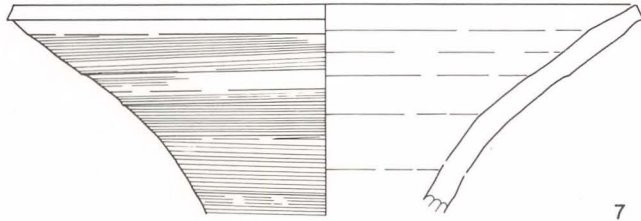


0 10cm

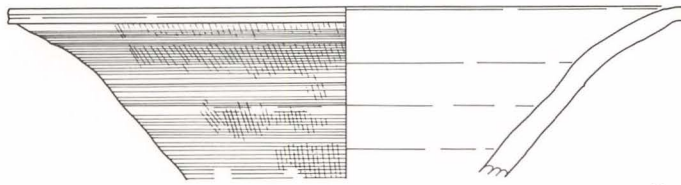
第51図 中の山古墳出土遺物1 (1~4:須恵質埴輪B類 5:同A類)



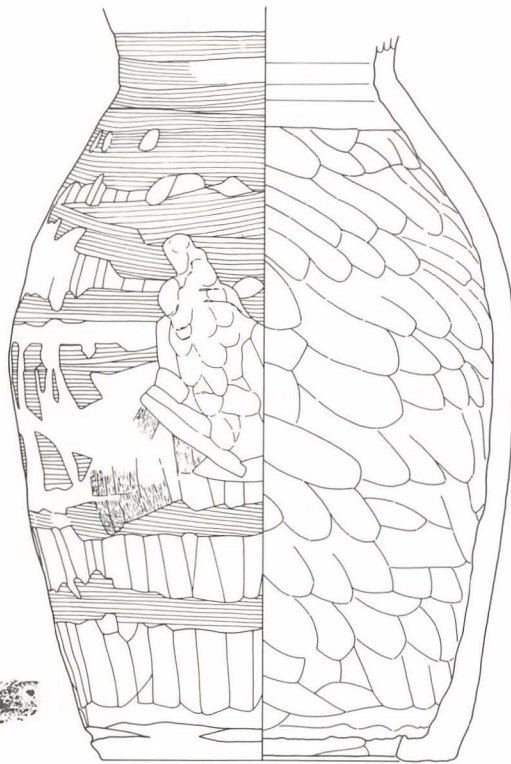
6



7



8

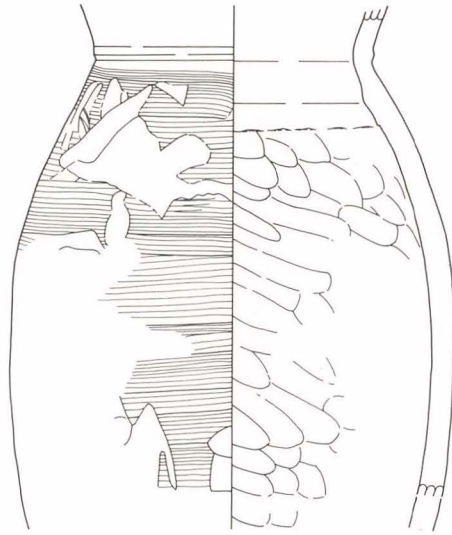


9

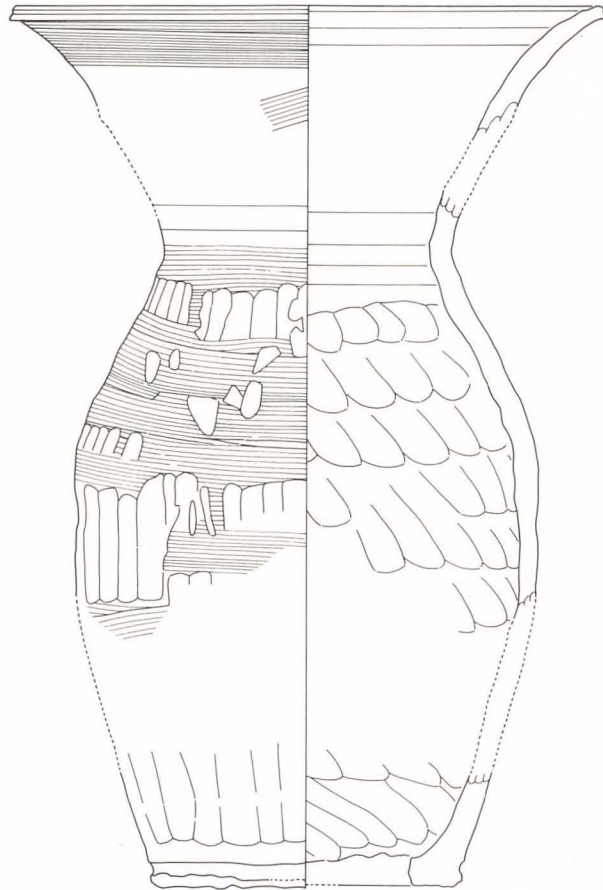


0 10cm

第52図 中の山古墳出土遺物2 (6~9:須恵質埴輪壺A類)



10

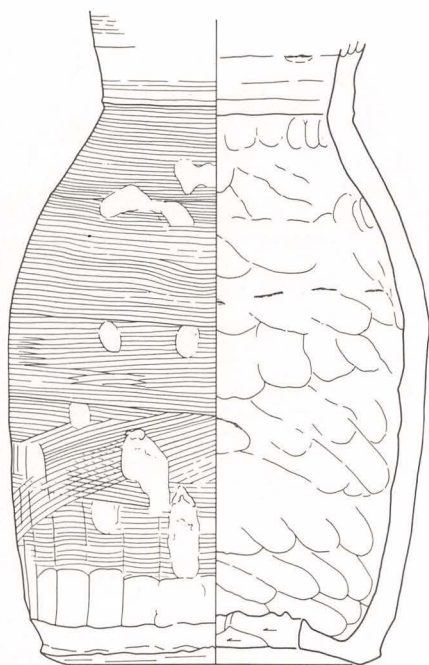


11

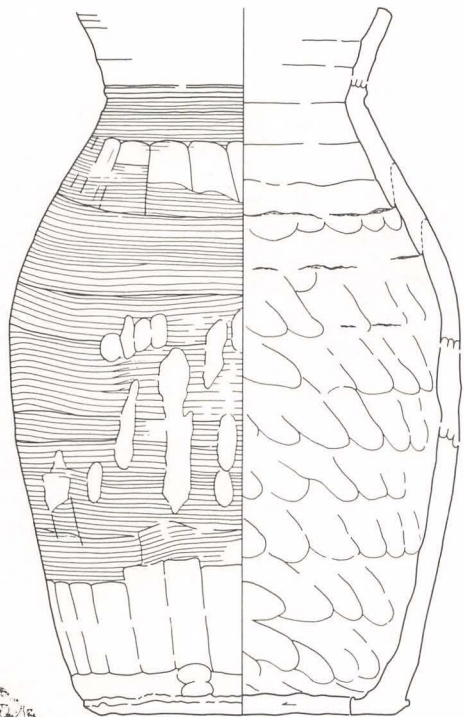


0 10cm

第53図 中の山古墳出土遺物3 (10~11: 須恵質埴輪壺A類)



12

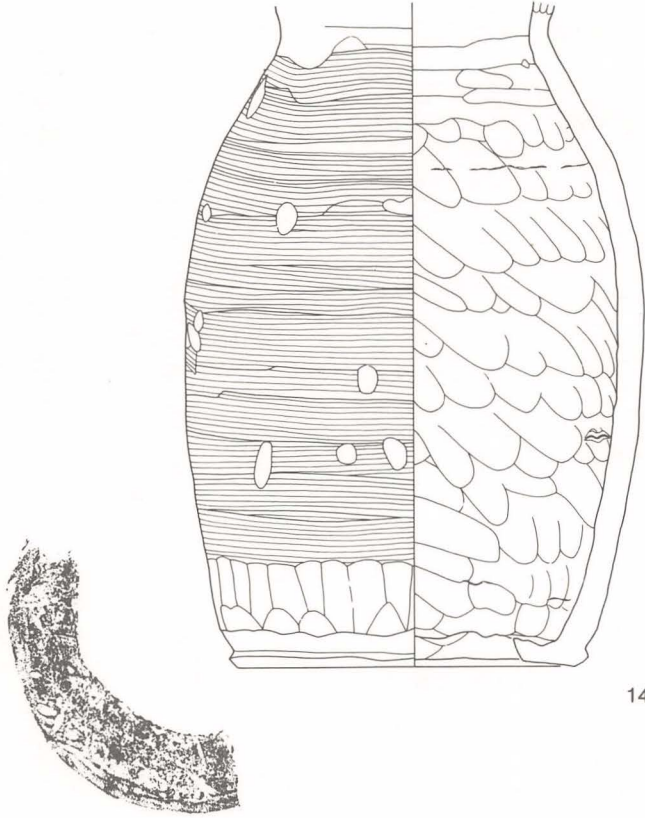


13

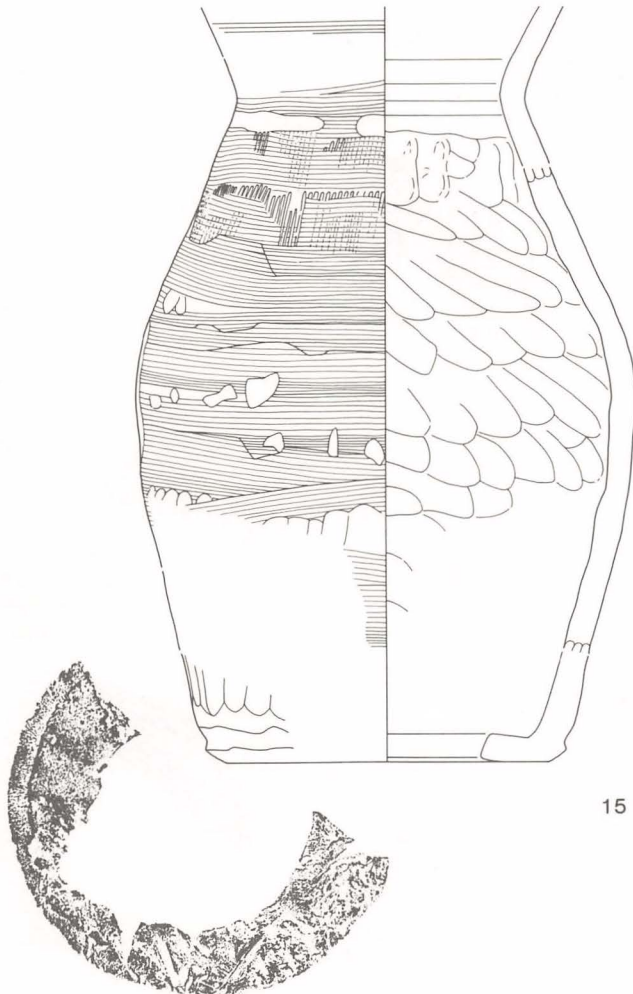


0 10cm

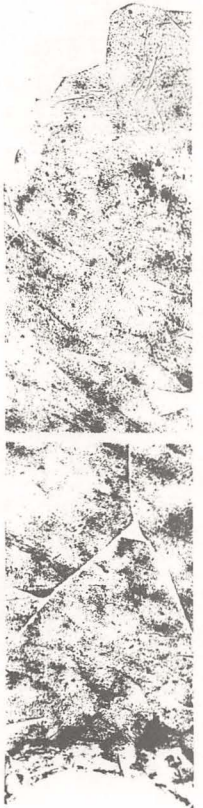
第54図 中の山古墳出土遺物4 (12~13: 須恵質埴輪壺A類)



14

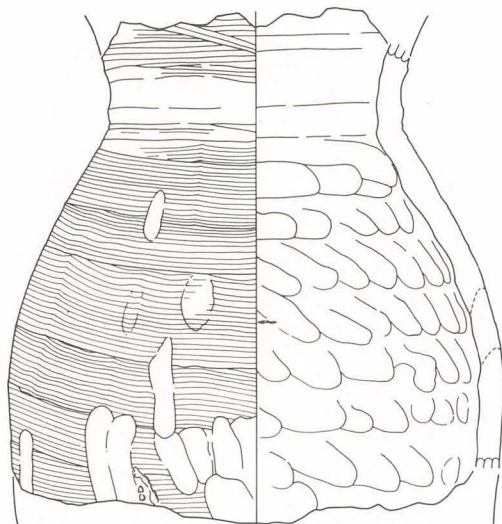


15

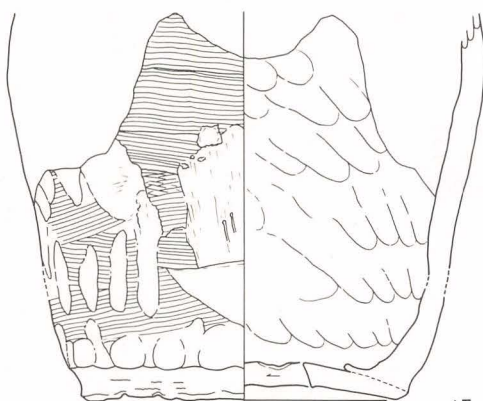


0 10cm

第55図 中の山古墳出土遺物5 (14~15: 須恵質埴輪壺A類)



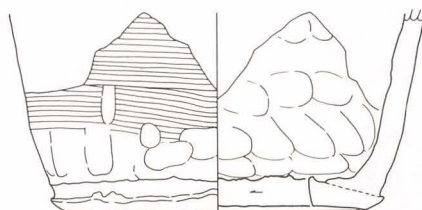
16



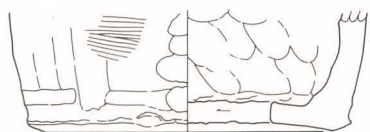
17



18



20

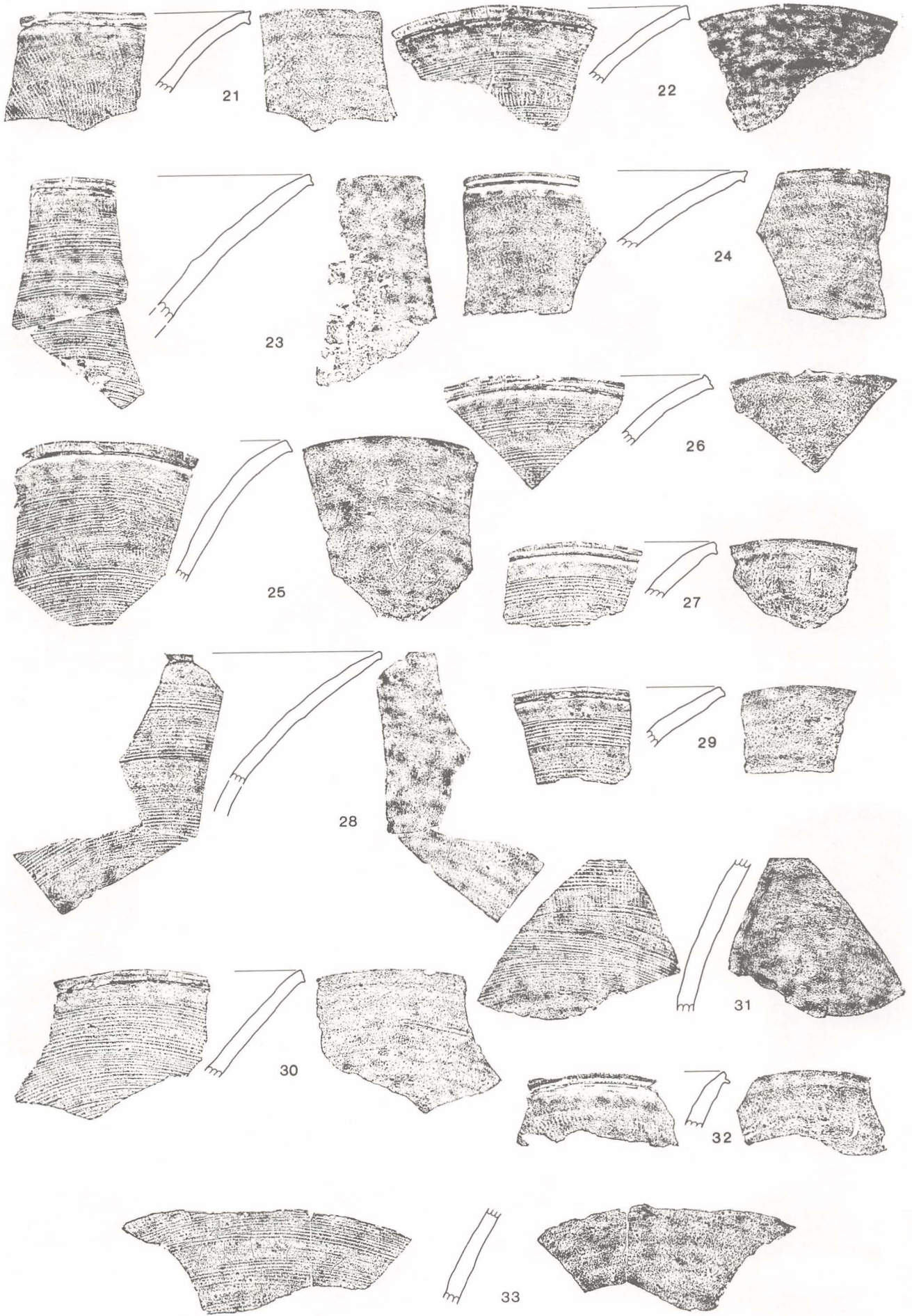


19

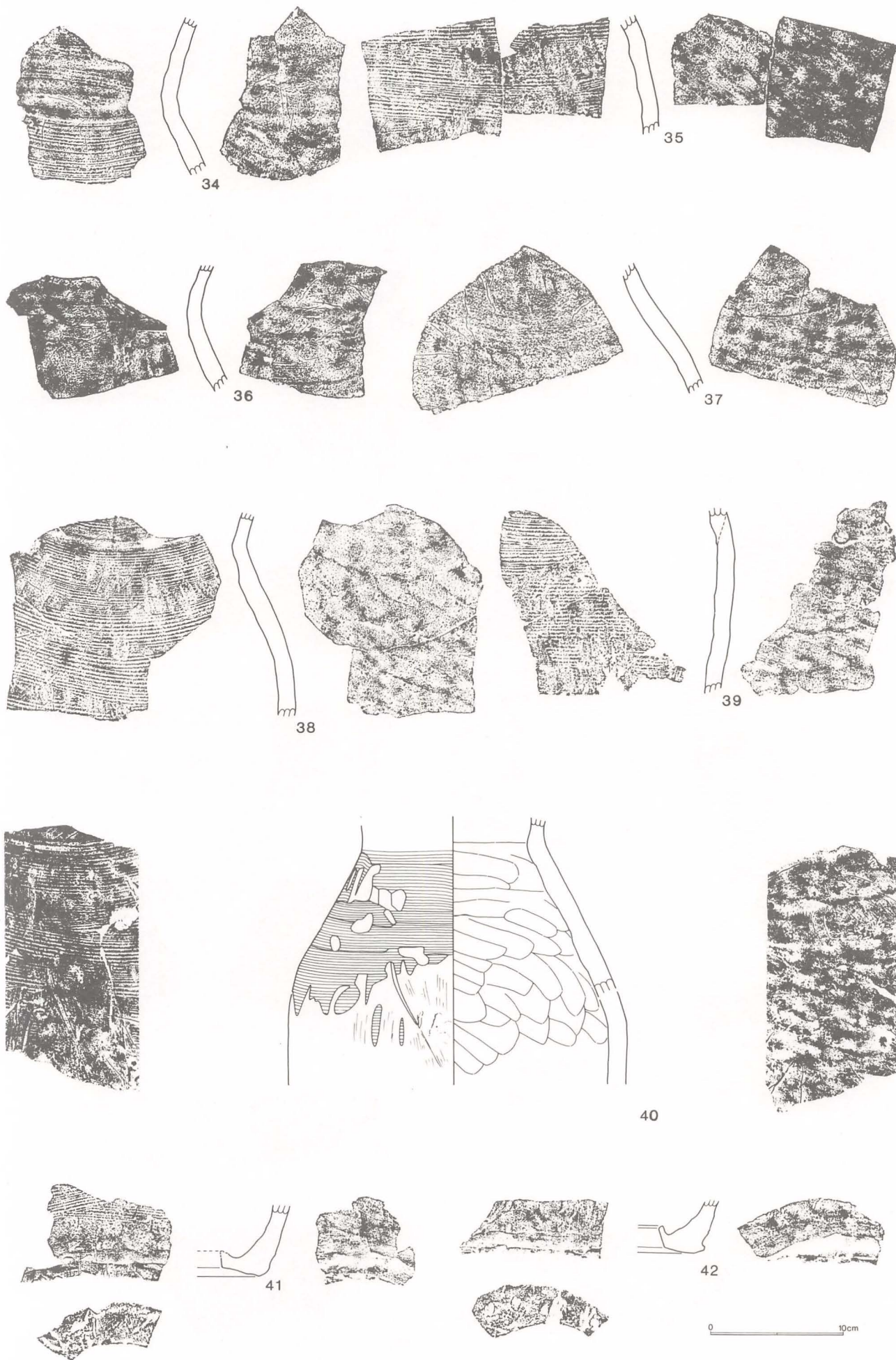


0 10cm

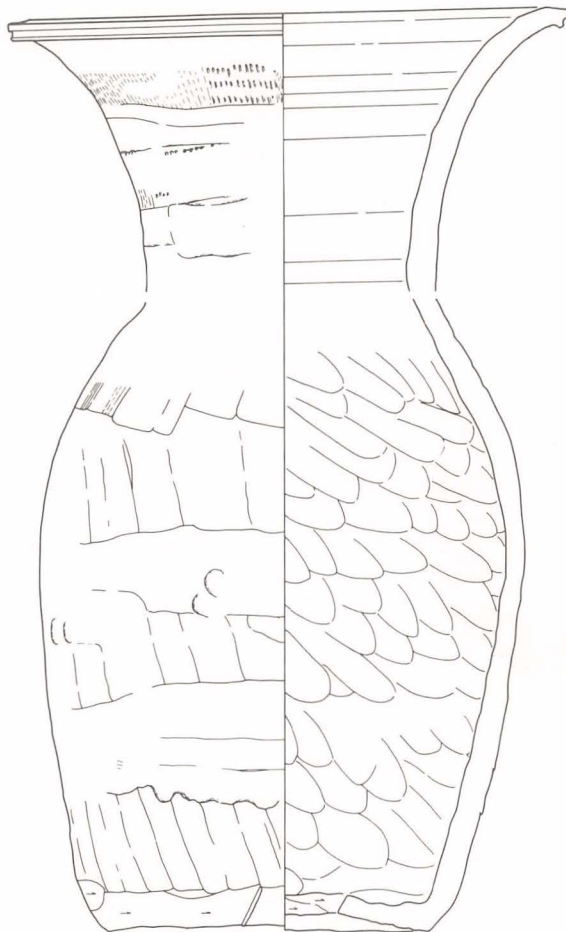
第56図 中の山古墳出土遺物6 (16~17、19~20: 須恵質埴輪壺A類 18: 同B類)



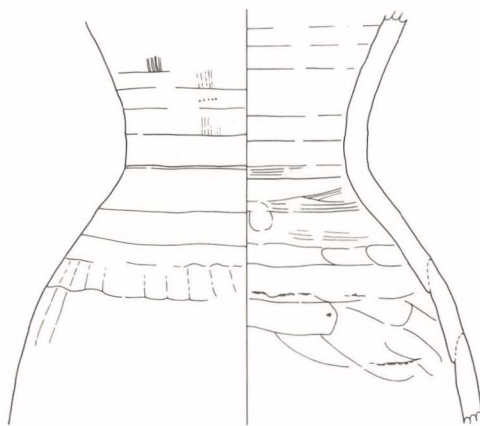
第57図 中の山古墳出土遺物7 (22~23、25~31、33：須恵質埴輪壺A類 21、24、32：同B類)



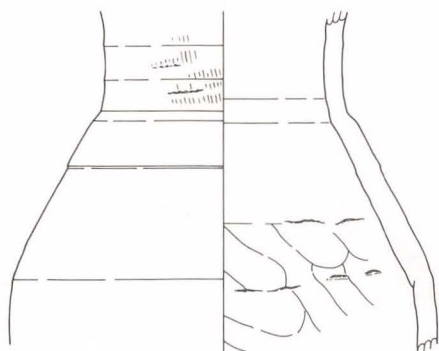
第58図 中の山古墳出土遺物 8 (34~35、38~42: 須恵質埴輪壺 A類 36~37: 同B類)



43



44

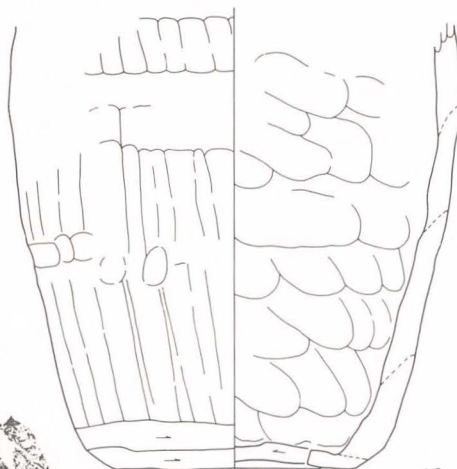


45



0 10cm

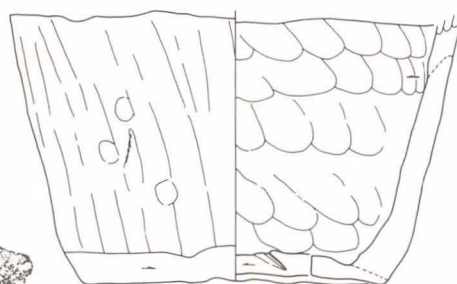
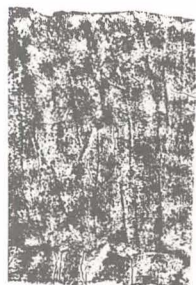
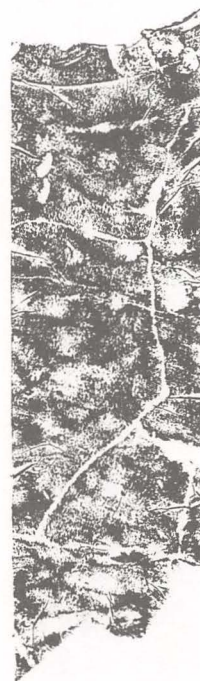
第59図 中の山古墳出土遺物9 (43~45: 須恵質埴輪壺B類)



46



47

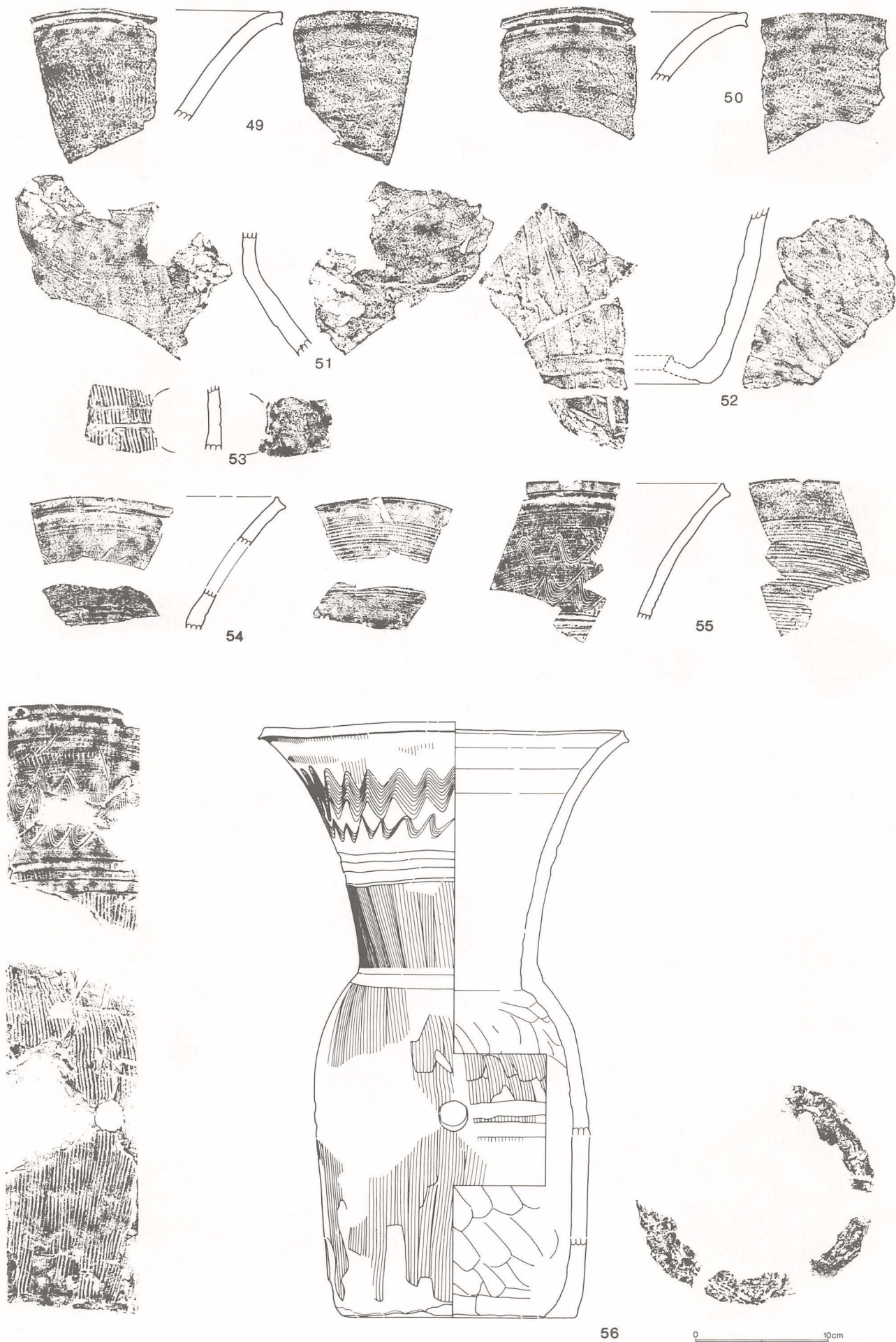


48

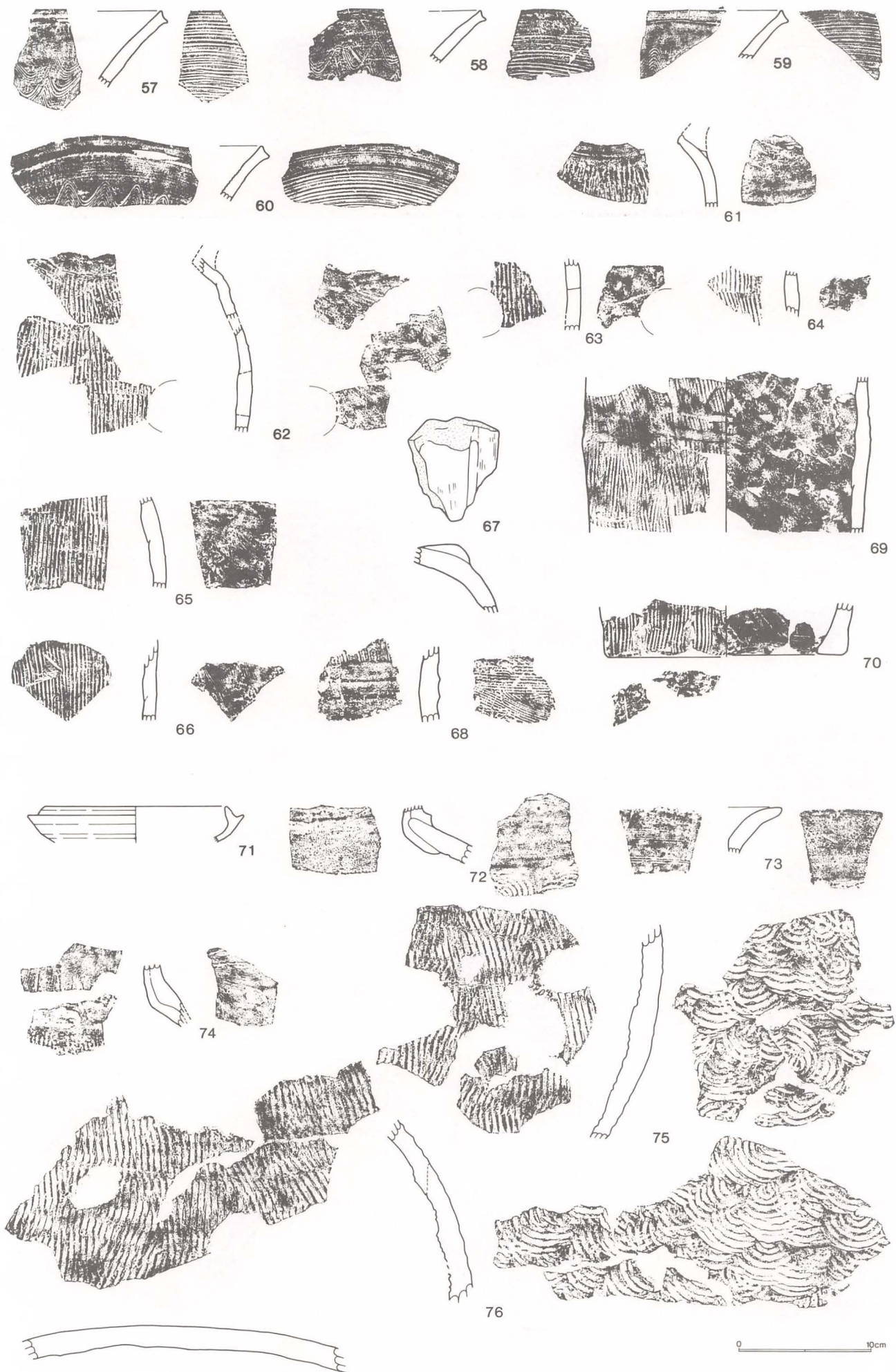


0 10cm

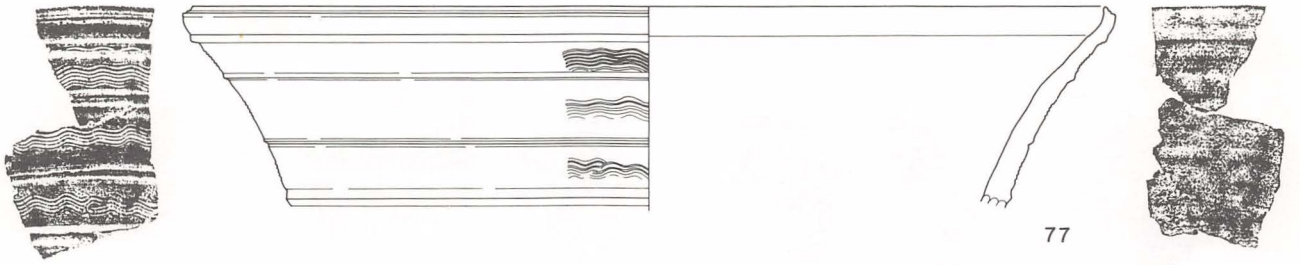
第60図 中の山古墳出土遺物10 (46~48: 須恵質埴輪壺B類)



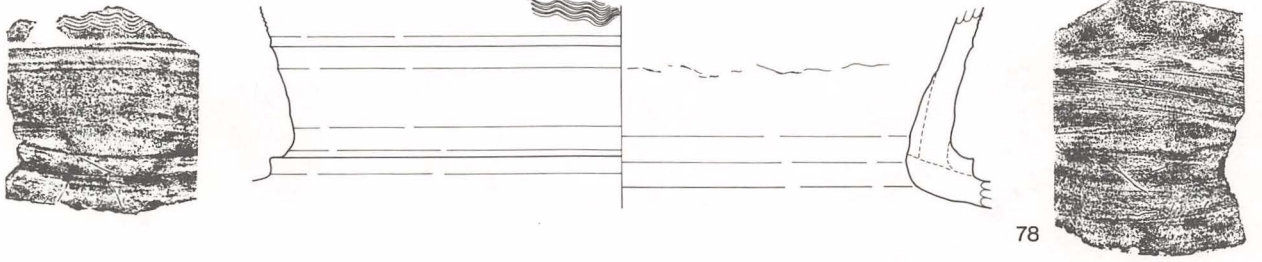
第61図 中の山古墳出土遺物11 (49~52: 須恵質埴輪壺B類 53~56: 須恵質朝顔形円筒)



第62図 中の山古墳出土遺物12 (57~76: 2 T出土遺物)



77



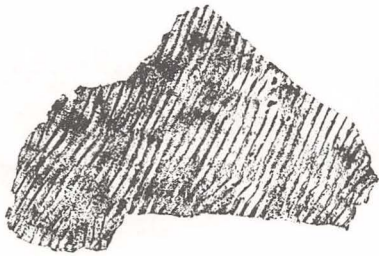
78



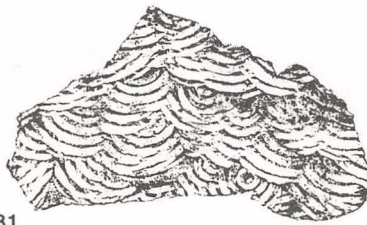
79



80



81



82



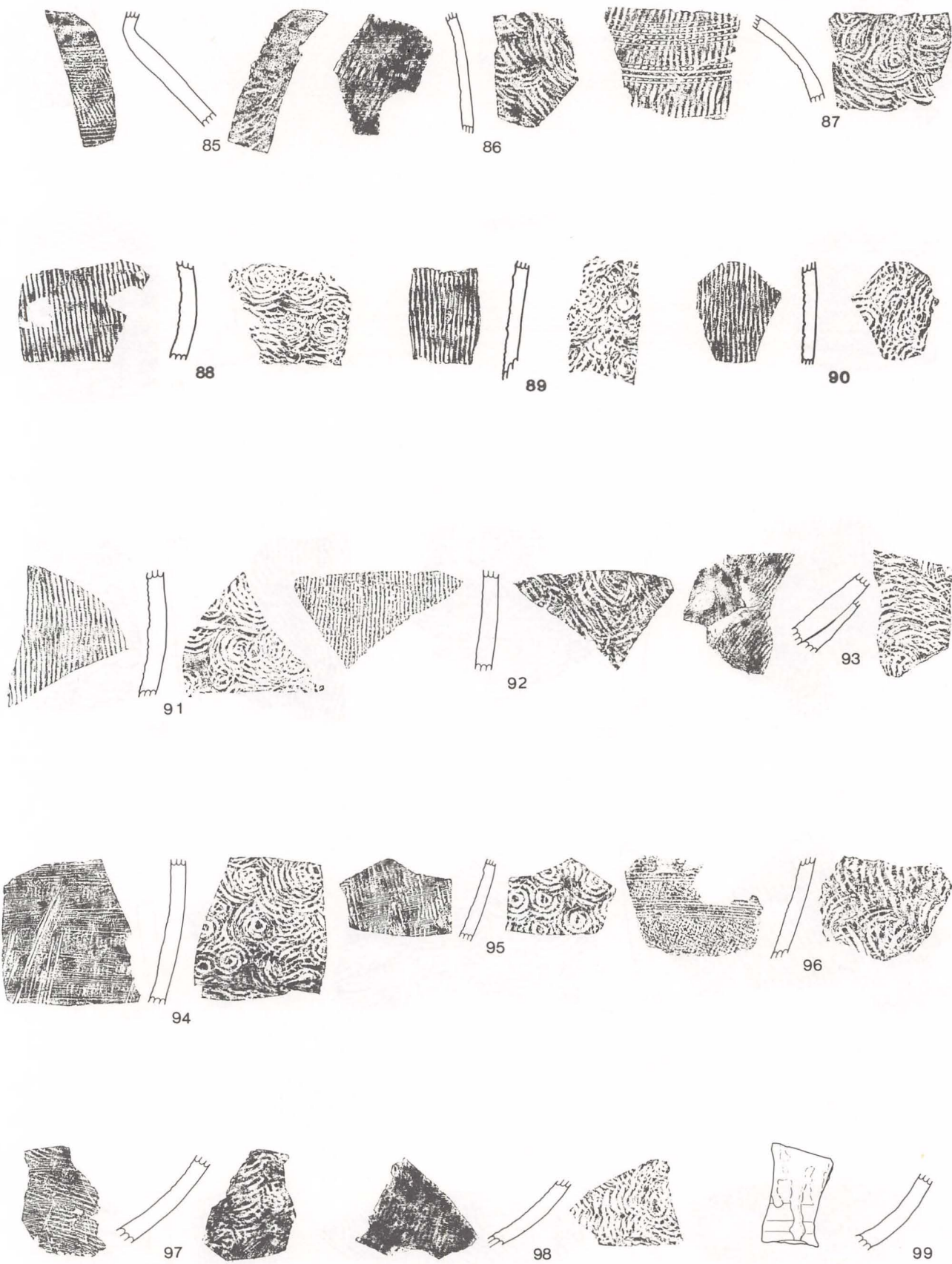
83



84

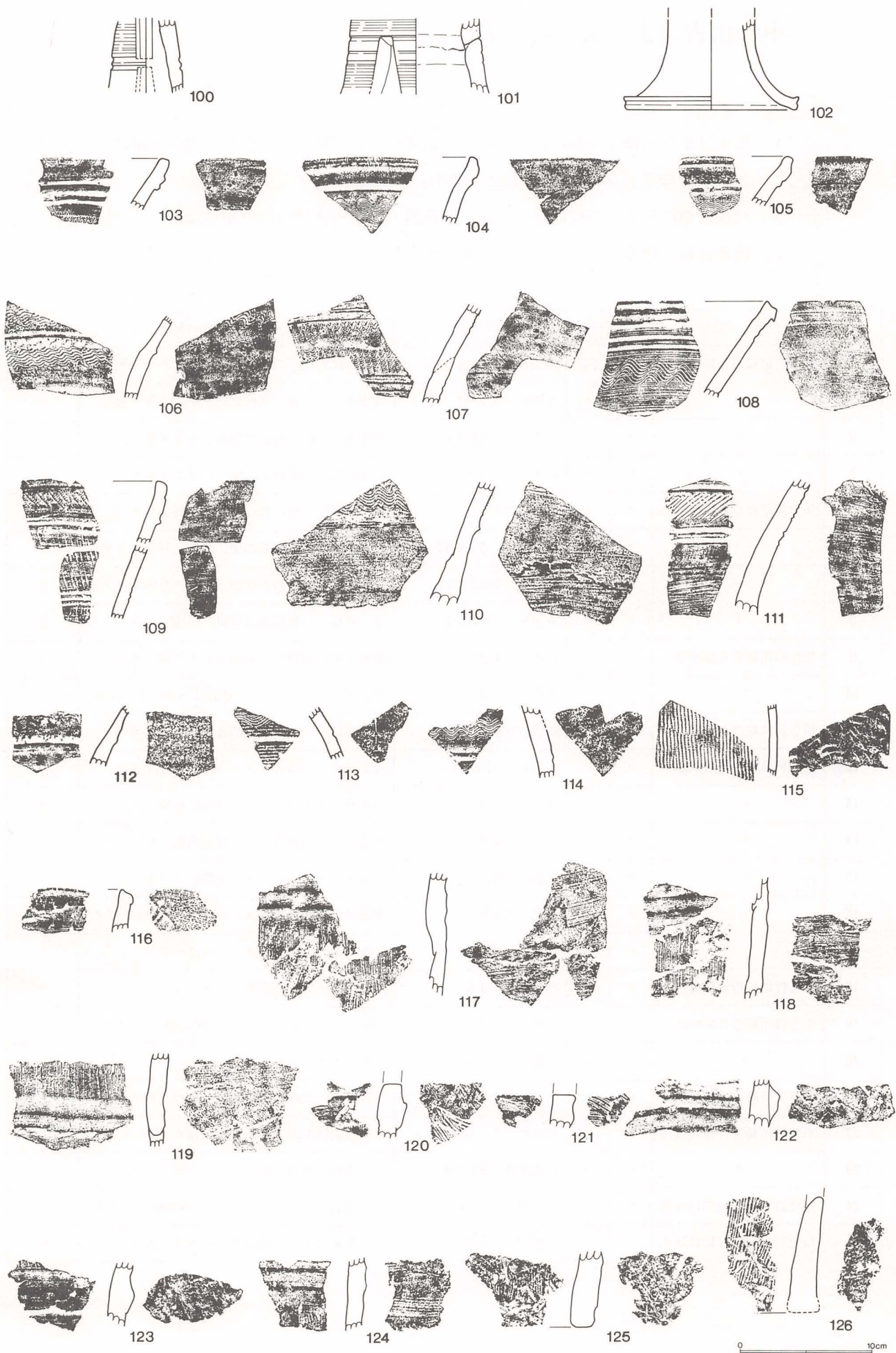
0 10cm

第63図 中の山古墳出土遺物13 (77~84: 須恵器大甕)



0 10cm

第64図 中の山古墳出土遺物14 (85~99: 須恵器甕・壺)



第65図 中の山古墳出土遺物15 (100~126: 須恵器・埴輪)

中の山古墳出土遺物観察表

凡 例

1. 胎土は精良・礫を多量に含む・礫を少量含むの3段階に分類した。礫を多量に含むは「礫多」、礫を少量含むは「礫少」と略称した。
2. 焼成は焼けしまりの程度から、軟質・普通・堅緻の3段階に分類した。
3. 色調は新版標準土色帖（小山・谷原、日本色研、昭和45年）によった。

番号	種 別	胎土	焼成	色 調	成形・調整その他の特徴	出土位置
1	須恵質埴輪壺B類口縁部	礫多	堅緻	黄灰色 (2.5Y4/1)	わずかに外反。口唇端面に凹線。カキメ無し。	1 T S A
2	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面タテハケ後、回転ヨコナデ。カキメ無し。	〃
3	〃	〃	〃	暗青灰色 (5B3/1)	外反強く、口唇端面に凹線。カキメ無し。	〃
4	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	頸部は細く、直線的に開く。タタキ成形。	〃
5	須恵質埴輪壺A類口縁部	〃	〃	灰色 (N6/)	強く外反し、他に比べ口径大。外面カキメ。	〃
6	〃	〃	〃	暗青灰色 (5B3/1)	わずかに外反。口唇端面に凹線。外面カキメ。	〃
7	〃	〃	〃	青黒色 (5B G2/1)	わずかに外反。口唇端面は平坦。外面カキメ。	〃
8	〃	〃	〃	青黒色 (5B G2/1)	強く外反。口唇端面は平坦。外面カキメ。	〃
9	須恵質埴輪壺A類胴部	〃	〃	灰色 (N4/0)	胴部中央に補修痕。外面タテナデ後カキメ。	〃
10	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面タテナデ後カキメ。肩部にへらによる沈線。	〃
11	須恵質埴輪壺A類	〃	〃	灰色 (N4/0)	口縁部はタテハケ、胴部はタテナデ後カキメ。	〃
12	須恵質埴輪壺A類胴部	〃	〃	青灰色 (5B6/1)	外面タテナデ後カキメ。一部にへラケズリ。	〃
13	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後カキメ。内面に輪積痕。	〃
14	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面タテナデ後カキメ。肩部内面に輪積痕。	〃
15	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面タテナデ後カキメ。肩部にタタキメ。	〃
16	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	胴部タテナデ後カキメ。頸部ナデ。口縁カキメ。	〃
17	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面タテナデ後カキメ。一部にケズリ。	〃
18	須恵質埴輪壺B類底部	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面タテナデ。基底部へラケズリ。	〃
19	須恵質埴輪壺A類底部	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面タテナデ後カキメ。基底部回転ヨコナデ。	〃
20	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面タテナデ後カキメ。	〃
21	須恵質埴輪壺B類口縁部	〃	〃	暗青灰色 (5B4/1)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後回転ヨコナデ。	〃
22	須恵質埴輪壺A類口縁部	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	口唇端面は平坦。外面タタキ後カキメ。	〃
23	〃	〃	〃	暗青灰色 (5P B4/1)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後カキメ。	〃
24	須恵質埴輪壺B類口縁部	〃	〃	青黒色 (5B2/1)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後回転ヨコナデ。	〃
25	須恵質埴輪壺B類口縁部	〃	〃	暗灰色 (N5/0)	口唇端面は平坦。外面タテハケ後カキメ。	〃

番号	種 別	胎土	焼成	色 調	成形・調整その他の特徴	出土位置
26	須恵質埴輪壺A類口縁部	礫多	堅緻	灰色 (N5/0)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後カキメ。	1 T S A
27	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	口唇端面に凹線。外面カキメ。	〃
28	〃	〃	〃	青黒色 (10B G2/1)	口唇部寄りの器肉は薄く、端面は狭い。	〃
29	〃	〃	〃	灰色 (N6/0)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後カキメ。	〃
30	〃	〃	〃	灰色 (N4/0)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後カキメ。	〃
31	〃	〃	〃	灰色 (N6/0)	外面タテハケ後カキメ。	〃
32	須恵質埴輪壺B類口縁部	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面ヨコナデ後カキメ。	〃
33	須恵質埴輪壺A類口縁部	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後回転ヨコナデ。	〃
34	須恵質埴輪壺A類頸部	〃	〃	灰色 (N4/0)	口縁部回転ヨコナデ後カキメ。胴部カキメ。	〃
35	須恵質埴輪壺A類胴部	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後カキメ。	〃
36	須恵質埴輪壺B類頸部	〃	〃	黒色 (N2/0)	口縁部回転ヨコナデ。胴部タテナデ後カキメ。	〃
37	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後回転ヨコナデ。カキメを施さず。	〃
38	須恵質埴輪壺A類胴部	〃	〃	灰色 (N4/0)	頸部回転ヨコナデ。胴部タテナデ後カキメ。	〃
39	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後カキメ。内面に輪積痕。	〃
40	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面タテナデ後カキメ。胴部に亀裂の補修痕。	〃
41	須恵質埴輪壺A類底部	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後カキメ。底部付近回転ヨコナデ。	〃
42	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タテナデ後底部付近回転ヨコナデ。	〃
43	須恵質埴輪壺B類	〃	〃	にぶい赤褐色(5Y R5/4)	口縁タテハケ後、胴部タテナデ後ヨコナデ。	〃
44	須恵質埴輪壺B類胴部	〃	〃	赤灰色 (10R4/2)	頸部タテハケ後、胴部ケズリ後回転ヨコナデ。	〃
45	〃	〃	〃	緑灰色 (10G Y6/1)	頸部タテハケ後回転ヨコナデ。胴部回転ヨコナデ。	〃
46	〃	〃	〃	灰白色 (5Y7/2)	外面タテナデ後、部分的に回転ヨコナデ。	〃
47	〃	〃	〃	灰白色 (5Y7/1)	外面タテナデ後、上半部に回転ヨコナデ。	〃
48	〃	〃	〃	橙色 (5Y R6/6)	外面タテナデ、底部付近ヨコケズリ後ナデ。	〃
49	須恵質埴輪壺B類口縁部	〃	〃	にぶい赤褐色(2.5Y R5/3)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後回転ヨコナデ。	〃
50	〃	〃	〃	褐灰色 (5Y R4/1)	口唇端面に凹線。外面タテハケ後回転ヨコナデ。	〃
51	須恵質埴輪壺B類頸部	〃	〃	にぶい赤褐色(5Y R5/4)	頸部胴部共外面回転ヨコナデ。	〃
52	須恵質埴輪壺B類底部	〃	〃	灰白色 (5Y7/2)	外面タテナデ。底部付近ヨコケズリ後ナデ。	〃
53	須恵質朝顔型円筒胴部	精良	〃	青灰色 (5B G6/1)	外面タテハケ後2条の平行沈線。径3.5cmの透孔。	〃
54	須恵質朝顔型円筒口縁部	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面回転ヨコナデ後、2条の平行凹線、波状文。	〃
55	〃	〃	〃	青黒色 (5B2/1)	外面回転ヨコナデ後、2条の平行凸帯、波状文。	〃
56	須恵質朝顔型円筒	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	口縁部に波状文と凹線、胴部に凹線と透孔。	〃
57	須恵質朝顔型円筒口縁部	〃	〃	青灰色 (5B5/1)	外面ヨコナデ後、波状文。内面にカキメ。	2 T S A
58	〃	〃	〃	暗青灰色 (5P B4/1)	外面ヨコナデ後波状文。内面にカキメ。	〃
59	〃	〃	〃	青黒色 (5P G2/1)	外面ヨコナデ後波状文。内面にカキメ。	〃
60	〃	〃	〃	灰赤色 (10R5/2)	外面ヨコナデ後波状文。内面にカキメ。	〃
61	須恵質朝顔形円筒頸部	〃	〃	青灰色 (5B G5/1)	擬口縁成形後口縁部を接合。外面にタタキメ。	〃

番号	種 別	胎土	焼成	色 調	成形・調整その他の特徴	出土位置
62	須恵質朝顔形円筒胴部	精良	堅緻	青灰色 (5B5/1)	擬口縁成形後口縁部を接合。胴部に透孔。	2 T S A
63	〃	〃	〃	橙色 (7.5Y R7/6)	外面にタタキメ。内面に対応する圧痕。透孔。	〃
64	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面にタタキメ。下半はタテハケ。	〃
65	〃	〃	〃	にぶい赤褐色(5Y R5/3)	外面にタタキメ。内面に輪積痕。	〃
66	〃	〃	〃	にぶい赤褐色(5Y R5/3)	外面タテハケ。白色針状物質を含む。	〃
67	形象埴輪	礫多	普通	明赤褐色 (2.5Y R5/8)	円筒本体に粘土を貼付。器財埴輪の類か。	〃
68	普通円筒埴輪	〃	堅緻	明赤褐色 (2.5Y R5/8)	外面タテハケ。内面ナナメハケ。凸帯は低平。	〃
69	須恵質朝顔形円筒胴部	精良	〃	青黒色 (5B2/1)	外面タテハケ。2条の平行凹線。内面に輪積痕。	〃
70	須恵質朝顔形円筒底部	〃	軟質	にぶい橙色(7.5Y R7/4)	外面タテハケ。基底部は肥厚し、底面は平坦。	〃
71	須恵器蓋坏	〃	堅緻	灰色 (N6/0)	外面回転ヨコナデ。下半部に自然釉。	〃
72	須恵器大甕頸部	礫多	〃	緑灰色 (10G Y6/1)	頸部に補強凸帯。外面ナデ。胴部内面に当具痕。	〃
73	土師器甕口縁部	〃	〃	橙色 (5Y R6/6)	内外面ともヨコナデ。布の条痕が認められる。	〃
74	須恵質朝顔形円筒頸部	精良	〃	灰色 (5Y4/1)	頸部成形ハケ調整後、外面に貼り足したテナデ。	〃
75	須恵器大甕胴部	礫少	〃	オリーブ灰色(5G Y6/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
76	〃	〃	〃	オリーブ灰色(5G Y6/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
77	須恵器大甕口縁部	礫多	〃	灰色 (7.5Y5/1)	口縁内側に凹面。外面に凸帯、波状文。	1 T S A
78	須恵器大甕口縁～頸部	礫少	〃	褐灰色 (10Y R6/1)	頸部に補強帯。外面に凸帯、波状文。	〃
79	須恵器大甕胴部	〃	〃	灰色 (7.5Y4/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
80	〃	〃	〃	灰色 (7.5Y4/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
81	〃	〃	〃	灰色 (7.5Y4/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
82	須恵器中型甕胴部	〃	〃	灰色 (N4/0)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
83	須恵器大甕胴部	〃	〃	褐灰色 (7.5Y R4/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
84	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
85	須恵器中型甕胴部	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面タタキ後カキメ。内面当具痕をヨコナデ。	〃
86	〃	礫多	〃	灰色 (N6/0)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕。	〃
87	〃	〃	〃	灰色 (N6/0)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕。	〃
88	〃	精良	〃	暗灰色 (N3/0)	外面に平行タタキメ、自然釉。内面に当具痕。	〃
89	〃	〃	〃	黒色 (N2/0)	外面に平行タタキメ。自然釉。内面に当具痕。	〃
90	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面に平行タタキメ、自然釉。内面に当具痕。	〃
91	〃	〃	〃	灰色 (N5/0)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
92	〃	礫少	〃	明青灰色 (5B7/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
93	〃	礫多	〃	暗灰色 (N3/0)	外面に平行タタキメ、自然釉、杯が溶着。	〃
94	須恵器大甕胴部	精良	〃	黒色 (N2/0)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕、一部ナデ。	〃
95	須恵器中型甕胴部	〃	〃	青灰色 (5B6/1)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕。	〃
96	〃	礫多	〃	灰色 (N6/0)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕、一部ナデ。	〃
97	〃	精良	〃	赤灰色 (2.5Y R5/1)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕。	〃

番号	種 別	胎土	焼成	色 調	成形・調整その他の特徴。	出土位置
98	須恵器中型甕胴部	精良	堅緻	灰色 (N6/0)	外面タタキ後カキメ。内面に当具痕。	1 T S A
99	須恵器壺底部付近	礫多	〃	緑黒色 (10G2/1)	内外面回転ヨコナデ。フラスコ形壺か。	〃
100	須恵器高杯脚部	〃	軟質	暗青灰色 (5B4/1)	長脚二段二方透。節帯外面カキメ。	〃
101	須恵器器台脚部	〃	堅緻	青灰色 (10B G6/1)	長方形三方透。外面カキメ、3条の沈線。	〃
102	須恵器高杯脚部	〃	〃	灰色 (N5/0)	基部端面に凹線。内外面回転ヨコナデ。	〃
103	須恵器甕口縁部	精良	〃	青灰色 (10B G5/1)	内外面回転ヨコナデ。外面に2条の凸帯、波状文。	〃
104	〃	礫多	〃	暗青灰色 (5P B4/1)	内外面回転ヨコナデ。外面に凹線、波状文。	〃
105	〃	〃	〃	灰色 (N6/0)	内外面回転ヨコナデ。外面に凹線、波状文。	〃
106	〃	〃	〃	青灰色 (B G6/1)	外面に凸帯、波状文。内面にも波状文。	〃
107	〃	精良	〃	暗青灰色 (5B4/1)	内外面回転ヨコナデ。外面に2条の凸帯、波状文。	〃
108	〃	〃	〃	暗灰色 (N3/0)	外面にカキメ、波状文。内面回転ヨコナデ。	〃
109	〃	精良	〃	緑灰色 (7.5G Y6/1)	外面に凸帯と櫛状工具による刺突文。	1TSA・SC
110	〃	礫多	〃	灰色 (10Y4/1)	外面に凸帯と波状文。内面に輪積痕。	1 T S A
111	〃	礫少	〃	灰白色 (N7/0)	外面に平行沈線、斜方向の平行タタキメ。	〃
112	〃	礫多	〃	青灰色 (5P B6/1)	外面に凸帯と波状文。凸帯は貼付けによる。	〃
113	須恵器甕胴部	礫少	〃	灰色 (10Y6/1)	外面にカキメ、沈線、波状文。	〃
114	〃	礫多	〃	青灰色 (5P B6/1)	外面回転ヨコナデ後、凸帯、波状文。	〃
115	〃	礫少	〃	青灰色 (5B5/1)	外面に平行タタキメ。内面に当具痕。	〃
116	普通円筒埴輪口縁部	礫多	〃	橙色 (2.5Y R6/6)	外面タテハケ。内面ヨコハケ。口唇内側が尖る。	〃
117	普通円筒埴輪胴部	〃	〃	橙色 (2.5Y R6/6)	外面タテハケ。内面ヨコハケ。凸帯は低いM字。	〃
118	〃	〃	〃	橙色 (2.5Y R6/6)	外面タテハケ。内面ヨコハケ。凸帯は低いM字。	〃
119	〃	〃	〃	橙色 (2.5Y R6/6)	外面タテハケ。内面ヨコハケ。凸帯は低いM字。	〃
120	〃	礫少	〃	赤色 (10R5/6)	外面タテハケ。内面ナナメハケ。透孔は直線的。	〃
121	普通円筒埴輪胴部	礫多	〃	橙色 (2.5Y R7/6)	凸帯部分ヨコナデ。内面ナナメハケ。透孔。	〃
122	〃	〃	〃	淡橙色 (5Y R8/4)	凸帯部分ヨコナデ。内面ナデ。白色針状物質。	〃
123	〃	礫少	普通	橙色 (2.5Y R6/8)	外面タテハケ。内面ヨコナデ。凸帯は三角形状。	〃
124	〃	礫多	堅緻	橙色 (2.5Y R6/6)	外面タテハケ。内面ヨコハケ。断面は低いM字。	〃
125	普通円筒埴輪底部	〃	〃	橙色 (2.5Y R6/8)	外面タテハケ。内面ナナメナデ。	〃
126	〃	〃	〃	にぶい橙色 (5Y R7/4)	外面タテハケ。内面ヨコナデ。白色針状物質。	〃

三 小 結

(一) 中の山古墳の墳丘と周堀について

中の山古墳の発掘調査は、面積が少なかったが、周堀の構造と形態及び墳丘の築造法について、いくつかの新しい事実が明らかになった。また、今回作成した空中写真による測量図で、細かな墳丘の形状が把握できた。ここでは、これらの点を中心に整理し、まとめて代えたい。

周堀の形態

中の山古墳は、二重の周堀がめぐり、中堤と外堤を備えていた。しかし、プランは稲荷山古墳の長方形とかなり異なっていた。

後円部後方の周堀は第66図に示したように、主軸に対して斜行する直線であった。平地に築かれた前方後円墳の周堀は主軸に対して左右対称形に造られるのが一般的であるから、中の山古墳の周堀は、主軸線で尖がり、いわゆる剣菱形の形態をとる可能性がある。

次に、墳丘の側面の周堀は、墳丘主軸に対して平行せず、くびれ部に向かって伸びていた。このラインを一直線に前方部へ延びていると仮定した場合、墳丘にぶつかってしまう。しかし、中堤外縁部が「く」の字になることから、くびれ部で再び前方部へ向かって直線的に開くと考えることができよう。埼玉古墳群では愛宕山古墳の南東側中堤と鉄砲山古墳の前方部西側中堤が、同様に屈曲するプランをとっており、中の山古墳の場合、これを踏襲した可能性がある。

次に、前方部の周堀形態について考えてみたい。埼玉古墳群の周堀は、稲

荷山古墳に代表されるように、前方部と後円部が同形態となる方形を基調としてめぐっていると考えれば、中の山古墳の場合も、前方部が後円部と同形態の剣菱形となる可能性も考えられる。

墳丘前方部が剣菱形となる代表的な古墳には、大阪府今城塚古墳や奈良県見瀬丸山古墳がある。前者は継体天皇陵、後者は欽明天皇陵の有力な候補で、六世紀中葉の早い時期から六世紀後半にかけて築かれたものである。周堀、墳丘とも剣菱形の例は、大阪府河内大塚山古墳がある。中の山古墳の周堀形態もこれら畿内大王陵の周堀や墳丘形態と共通する部分もあり、なんらかの関連がある可能性も考えられる。

墳丘の現状と復原

中の山古墳の墳丘主軸長は七九・二呎、後円部最高所の標高は二三・五三呎、前方部では二三・八一呎である。平均的な現地表面一八・四呎からの高さで、後円部高五・一三呎、前方部高五・四一呎となる。

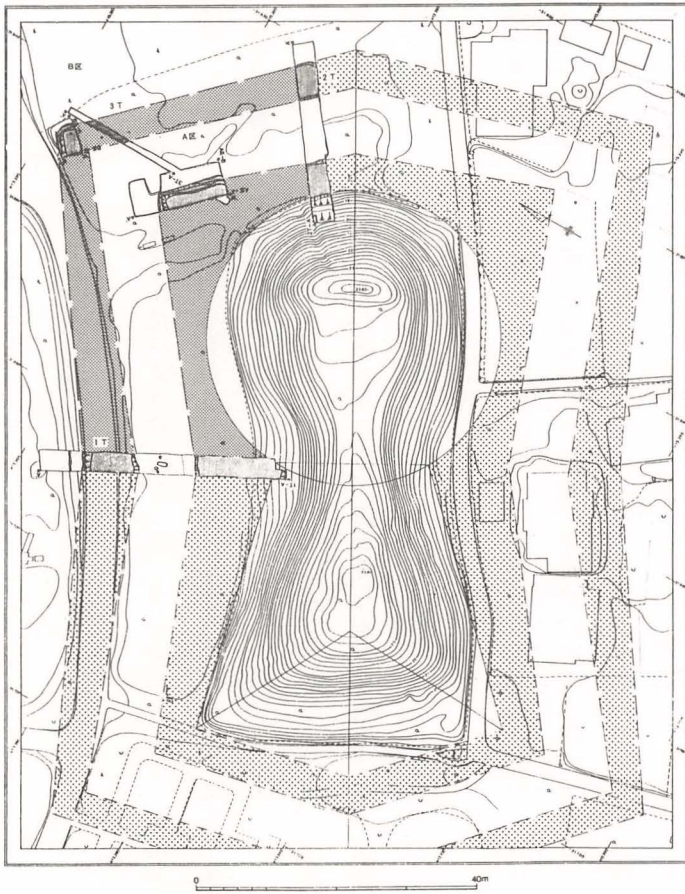
墳丘の遺存状態は前方部で良好なのに対して、後円部はかつて畑地となっていたため、細長く変形していた。また、後円部墳頂にも土取りの痕跡がある。中の山古墳には唐櫃山の別称があり、古く、石槨らしきものが出土したという伝承をもつことから、盗掘跡とみられる。横穴式石室を内包している可能性が考えられよう。

墳丘平面形の復原案は、第66図のように、前方部前端が剣菱形と想定した場合、後円部の直径と前方部の長さが等しくなる。次に、遺存状態のよい前方部西隅の稜線と主軸の交わる位置から、前方部前長と後長も等しくなる。

これは、上田宏範氏の六・三・三形に対応し、石部氏らの八区型に該当する。墳丘の盛土をどこから得たか

第2トレンチでは、墳丘盛土下に六世紀初頭の降下とされる榛名山二ツ岳噴出火山灰（FA）を含む旧表土が保存されており、墳丘下黒色土上層は当時の地表と考えられる。従来周囲の掘削土量を計算しても墳丘土量の二分の一にも満たず、不足分の採土場がどこなのか疑問であった。しかし、今回、当時の地表面の標高が現地表よりも高く、一八・六四呎であることが判明し、これを基準に掘削土量を求めることが可能になった。

古墳の築造過程では、いったん、中堤上面の標高一八・〇呎付近まで周囲を削平した後、内堀と外堀を標高一七・〇呎付近まで掘削しているものと見られる。この工程で得られる総土量を試算すると、約八四〇〇立方呎となり、



第66図 中の山古墳想定復原図

墳丘盛土量をまかないうるということが明らかになった。

このほか、墳裾テラス部の掘削と外堤部の成形で得られる土量によって、堀底の貼土と、中堤の盛土もまかなえるものと推定される。

中堤および外堤の階段状遺構について

第1トレンチの中堤内側肩部と外堤肩部、第2トレンチ外堤肩部、A区中堤内側肩部には、階段状に掘り込まれたフラットな面が検出された。このうち、第1トレンチ中堤内側肩部では、埋め戻しが行われており、外上がりの傾斜をもった版築層が観察された。他の部分では、恐らく、この埋め戻し土が崩壊したものと思われる。これらは、古墳築造過程で、土や石の搬入に必要な足場を埋め戻して成形した可能性がある。

最後になったが、今回提示した復原案は、一部の成果をもとに試みたもので、当然、修正されるべきものであることをおことわりしておきたい。将来の整備のためにも、今後の継続的な調査によるデータの集積が望まれる。

（若松 良一）

（註）

- 1 杉崎茂樹、他『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会 一九八五
- 2 杉崎茂樹、他『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会 一九八五
- 3 埼玉古墳群では、瓦塚古墳前方部の中堤が、前面で剣菱形となる可能性があり、中の山古墳にも、その設計型が採用されている蓋然性が高い。
- 4 石部正志・田中英夫・宮川徳一・堀田啓一「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『考古学研究』89 一九七九 の中で今城塚古墳と河内大塚山古墳の例を挙げ、「剣菱形前方部」を仮称として用いている。石部は、その後、見瀬丸山古墳も剣菱形に推定復原している。
- 5 『大阪府史』第1巻 一九七八 で森浩一は、後円部に巨石が露出していることから、横穴式石室をもつ六世紀中ごろから後半の古墳と推定している。また、規模や、埴輪を出土しない点で、見瀬丸山古墳との共通性を指摘している。
- 6 上田宏範『前方後円墳』第2版 一九七九
- 7 註4文献参照
- 8 墳丘の約一呎まで（墳裾テラス面からの計測）は削り出し成形ということになる。

(二) 中の山古墳の須恵質埴輪壺について

中の山古墳からは底部を焼成前に穿孔した須恵質の壺形土器と、朝顔形円筒埴輪に器形の類似する須恵質焼成品が多量に出土した。前者は最低二一〇個、後者は最低七個体が確認された。

これらは、墳丘や中堤から周堀内に転落した状態で出土しており、昭和六一年度に行田市教育委員会が墳丘東側の内堀部分を調査した際にも、同様のものがまとまって出土したことから、本来は円筒埴輪のように墳丘を囲繞し、また、中堤上に間隔をもって樹立されていたと推定される。

須恵質の底部穿孔壺は、古墳時代前期の埴輪壺や底部穿孔土師器とは時間的な隔たりが大きく、平底をもつことから別系統のものと推定される。また、製作技法については、第一次調整として、胴部にタテヘラナデ、口縁部にタテハケを用いる点に、やや特殊性があるものの、回転台を使用してカキメ調整を施す点や還元焼成から、須恵器工人が製作したと推定される。このような理由から、須恵器の技法によって製作され、埴輪的な性格をもった壺として、須恵質埴輪壺の名称を与えることにした。

一方、須恵質朝顔形円筒と呼称した遺物は、底面をもたず、外面にタテハケ調整が施され、胴部に円形透孔を穿つ点に朝顔形円筒埴輪との関連性が認められる。しかし、凸帯を備えておらず、それを意識した可能性のある凹線の胴部を一巡するだけで、頸部には認められない。また、円形透孔は、この胴部の凹線上に穿孔されるなど、円筒埴輪の約束事から逸脱している。

須恵質朝顔形円筒は、肩部に叩き整形が行われ、口縁部に波状文が施文される点や回転台の使用、高い還元焼成技術からみて、やはり須恵器工人の製

作と考えてよいだろう。^(註) これらの点で須恵質埴輪壺と須恵質朝顔形円筒は、須恵器技法を用いながら、円筒埴輪の特徴を、すべて備えた東海地方の須恵質埴輪とは異なっている。

これらは埼玉古墳群では初めての出土であり、現在のところ、他の地域でも類例が知られていない。しかし、その性格を考える上で、出雲地方の子持壺はいくつかの示唆を与えてくれる。

出雲の子持壺(第67図1・2)は、親壺の底部がなく、仮器としての性格が強い。初期のものは、脚台部がラッパ状に開く器形をもち、石室内や墳丘上に据え置かれたものだが、六世紀中葉以降は大型古墳の墳丘に、まとまって樹立されるようになり、岡田山一号墳など、埴輪と共存する例もある。^(註) 出雲地方の子持壺には、埴輪と同様の性格をもった仮器的須恵器の出現という意味で、中の山古墳の遺物との共通性を見出すことができる。

一方、須恵質埴輪壺の系譜を考える上では、百済系といわれる平底壺も、参考となろう。

百済系の平底壺(第67図3・10)は平底の安定した器形の壺で、胴部は丸味が強いものと、長胴のものがある。特に、後者の器形は、中の山古墳の須恵質埴輪壺に類似し、いずれも短かい口縁部が付く。これらは、西は九州から東は関東地方の広範囲に分布している。年代的にはTK208型式からTK217型式に及ぶことから、五世紀後半から七世紀前半の長い期間にわたって製作されたことが知られる。^(註)

百済系平底壺は、一部の例外を除けば、器高二〇〜三〇センチの小型品で、底部を穿孔するものや、墳丘に多数樹立した例は、今のところ知られていない。しかし、口縁端部には、陶質土器や赤焼土器と同様な凹線の巡る例(4

・9)があり、中の山古墳例との間に共通性が見出せる。^(註5)

以上の検討から、中の山古墳の須恵質埴輪壺は、百済系の平底壺を大型に製作し、底部を穿孔して仮器化したものという見方も可能であろう。今後、周辺の須恵器の系譜を検討してみる必要がある。

中の山古墳の須恵質埴輪壺と須恵質朝顔形円筒の編年の位置は、伴出の須恵器のなかに、立ち上がり部の短い蓋坏、長脚二段二方透高坏、頸部に補強凸帯をもつ大甕^(註6)があり、その特徴はTK43型式に類似するが、やや新しい要素が認められることから、六世紀末ないし七世紀初頭に比定されよう。

埼玉古墳群では、他の前方後円墳がいずれも円筒埴輪を備えている^(註7)ので、中の山古墳は、埴輪消滅後に築かれた最後の前方後円墳となる可能性がある。埴輪消滅後に、その代替品として、特殊な仮器を採用したとすれば、それは中の山古墳の被葬者の、異常なまでの埴輪祭祀の伝統への固執を示すものである。これらは、その性格からみて全国最後の埴輪の一つといえるかもしれない。
(若松 良一)

(註)

1 須恵質朝顔形円筒は、胎土が精良で白色針状物質を少量含む。須恵器甕の一部には、これと胎土・焼成の共通するものがある。一方、須恵質埴輪壺は白色針状物質を含まず、長石を多量に含んでいる。両者は生産地が異なる可能性がある。

2 昌子寛光「出雲の子持壺」『古文化談叢』第一八集 一九八七

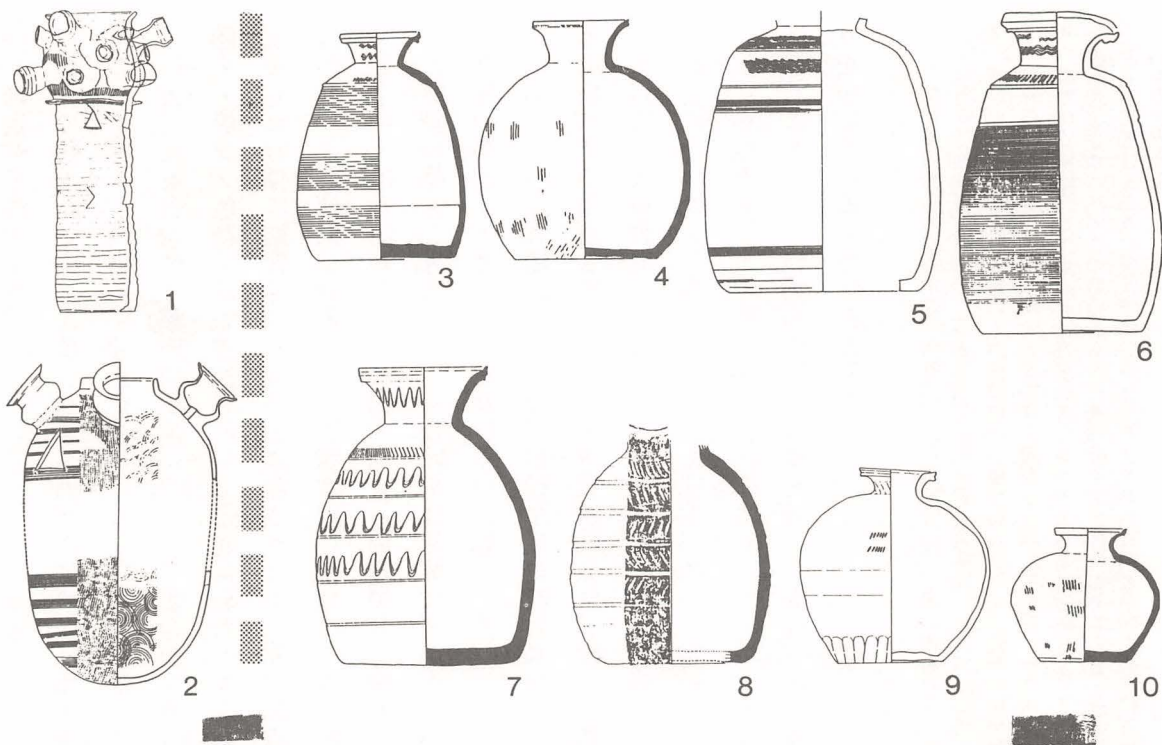
3 田口一郎「伊熊古墳」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第八回三県シンポジウム 一九八七

4 大阪府埋蔵文化財協会『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』一九八七

5 中の山古墳出土の高坏(102)の脚端部にも共通の特徴が認められる。

6 群馬県から埼玉県北部にかけての分布が知られ、埼玉鉄砲山古墳や菖蒲天王山塚古墳からも出土している。

7 中の山古墳からも円筒埴輪片が出土しているが、出土量が少量すぎることと、一部に台形状の凸帯や長方形と推定される透孔をもつものを含んでいることから、混入の可能性が高い。



第67図 出雲地方の子持壺と百済系平底壺(縮尺は1~2が $\frac{1}{8}$ 、3~10が $\frac{1}{4}$)

・出雲地方の子持壺 1. 上塩治築山古墳 2. 岡田山1号墳。百済系平底壺 3. 群馬県久保遺跡(TK10並行)
4. 奈良県新沢千塚第281号墳 5. 埼玉県広木大町第9号墳 6. 群馬県伊熊古墳(TK10並行) 7. 群馬県権現山
2号墳(MT15~TK10並行) 8. 群馬県恵下古墳(MT15並行) 9. 福岡県広石I-1号墳(TK43並行)
10. 奈良県石光山第43号墳(TK217並行)

VI ま と め

今回の報告は、奥の山古墳、瓦塚古墳、中の山古墳の三基の中型前方後円墳を対象とした。そこで、本章では、これらを包括する埼玉古墳群の中型前方後円墳の埴輪が提起する問題について、整理を行い、まとめにかえたい。

奥の山古墳からは弾琴像をはじめとする人物埴輪や、動物埴輪、器財形埴輪、家形埴輪が破片ながらも各種にわたって出土した。その種類構成及び製作技法は瓦塚古墳の場合と非常に共通性が高かった。このことは両古墳の間で埴輪祭祀の内容が踏襲されたことを示す一方、両者が極めて近接した時期の築造であることを示唆していよう。

奥の山古墳と瓦塚古墳の円筒埴輪は、それぞれA類とB類に分類されるが、A類とB類は、胎土・焼成・色調・調整技法・凸帯の形状が相違するので、別個の埴輪窯跡で製作されたと推測された。両古墳のA類は蛍光X線分析では、Feを多量に含む点などから、鴻巣市生出塚埴輪窯の製品と推定された。また、両古墳のB類は未知の窯の製品と推定された（自然科学分析編参照）が、いわゆる白色針状物質を含むことから、比企地方産の可能性が考えられた。特に円筒埴輪と胎土の共通する両古墳の形象埴輪の形態や製作技法の検討では、東松山市桜山埴輪窯の製品との類似性が高かった。^(註1)

このことから、奥の山古墳と瓦塚古墳では、二ヶ所の埴輪窯から埴輪の供給を受けたことになるが、A類とB類は、同時に供給されたとはいえない^(註2)。そこで、同類同志を比較した場合、奥の山古墳のB類は台形状で、調整の丁寧な凸帯を備えており、瓦塚古墳の低平なM字形凸帯を備えるB類より先行し、逆に瓦塚古墳のA類は同じ理由で奥の山古墳のA類より先行すると

いう推定が可能である。

以上の検討からは、A類とB類が同時に供給されたと考えたと矛盾を生じることになり、両者に時間差があることを間接的に示していよう。

一方、瓦塚古墳のA₂類円筒埴輪⁽¹⁶⁹⁾は、愛宕山古墳のB類円筒埴輪^(註3)と、胎土・焼成・色調・調整技法・凸帯の形状にわたって著しく類似しており、近接した時期に製作されたものと推測されたが、愛宕山古墳のB類には第一段が長くなる傾向が看取され、瓦塚古墳のA₂類より後出的といえる。

以上の比較検討から、奥の山古墳と瓦塚古墳及び愛宕山古墳は、共に近接した時期の築造と考えられ、その時期は瓦塚古墳出土の須恵器を参考にして、六世紀中葉としてさしつかえないものと思われる。

なお、中の山古墳については、埴輪生産が行われなくなった六世紀末から七世紀初頭の築造と推定され、須恵質埴輪壺は埴輪の代替品として、須恵器工人によって製作され、百済系平底壺と関連する可能性が考えられた。

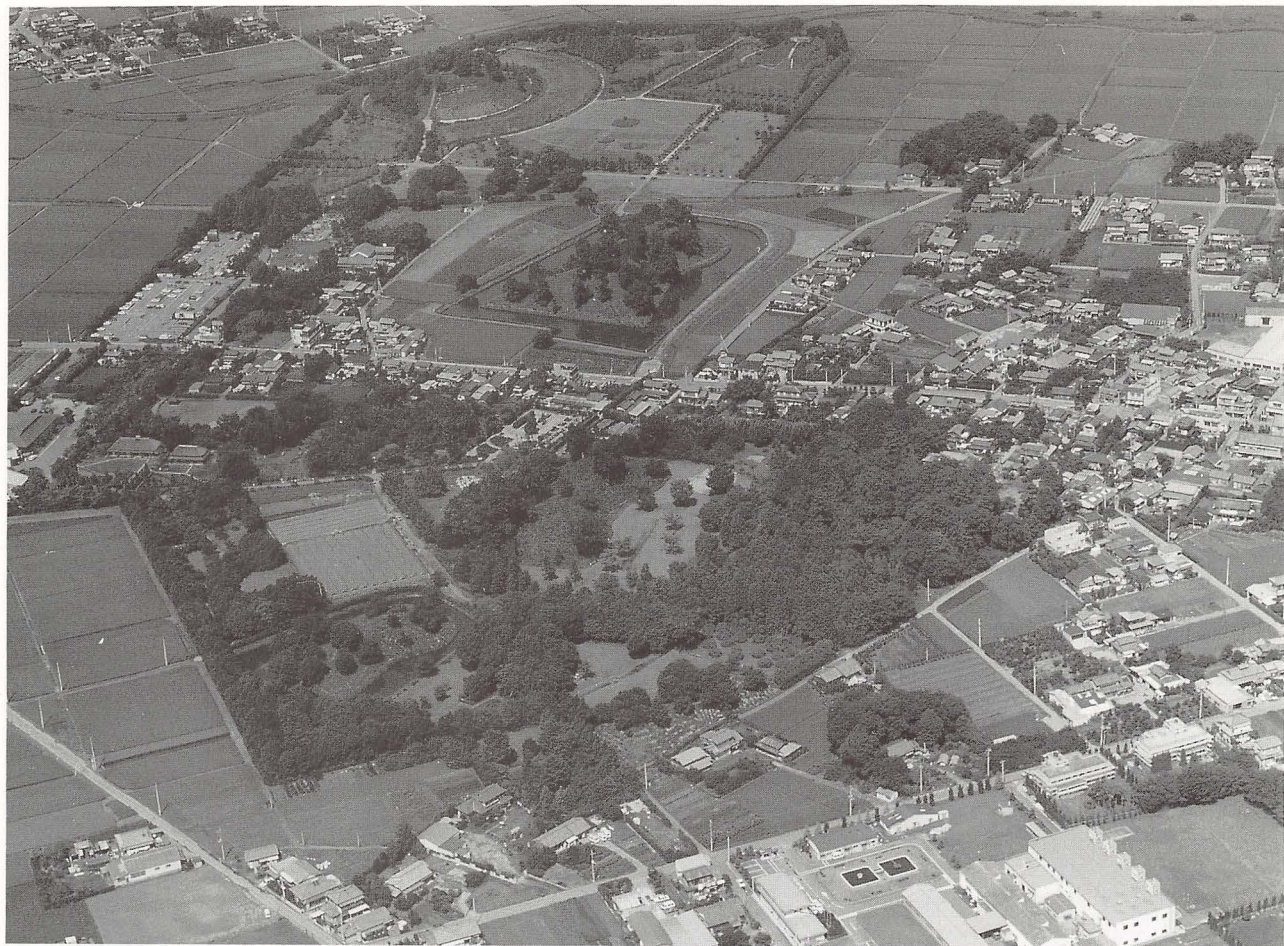
最後になったが、奥の山古墳と瓦塚古墳に、近隣の生出塚窯からだけでなく、比企地方からも埴輪の供給が推定されたことは、埴輪生産が地域首長の管掌下におかれ、貢納的性格をもつと考えた場合、埼玉政権の権力基盤の拡りを示している可能性があるであろう。^(若松 良一)

(註)

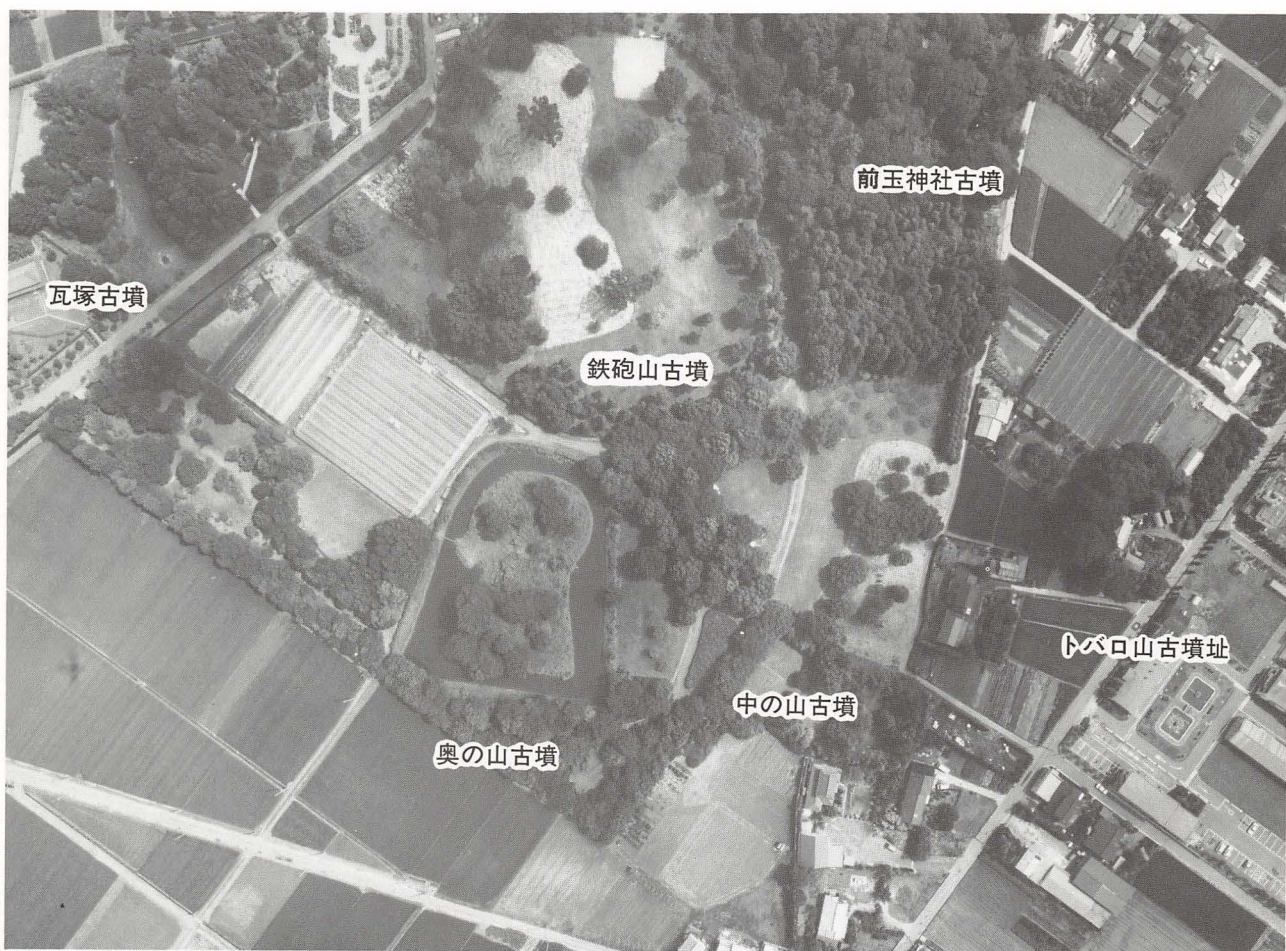
- 1 人物埴輪の腕における木芯中空技法、指の個別製作、下端に突起の付く特殊な美豆良の存在など。^(水村孝行他『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 一九八二参照)
- 2 若松良一「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第七集 一九八二
- 3 杉崎茂樹『愛宕山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第三集 一九八五
- 4 愛宕山古墳は、長方形透孔と台形凸帯をもつ円筒埴輪に依拠して二子山古墳と近接する時期の築造と推定されたが、この特徴をもつ円筒埴輪片は総体に占める割合が極めて低く、また小片のため、混入の可能性もあり、現状では、主体的存在であるA類とB類を基準に年代を推定した方が誤りなものと考える。

図

版



埼玉古墳群全景空中写真（斜め）



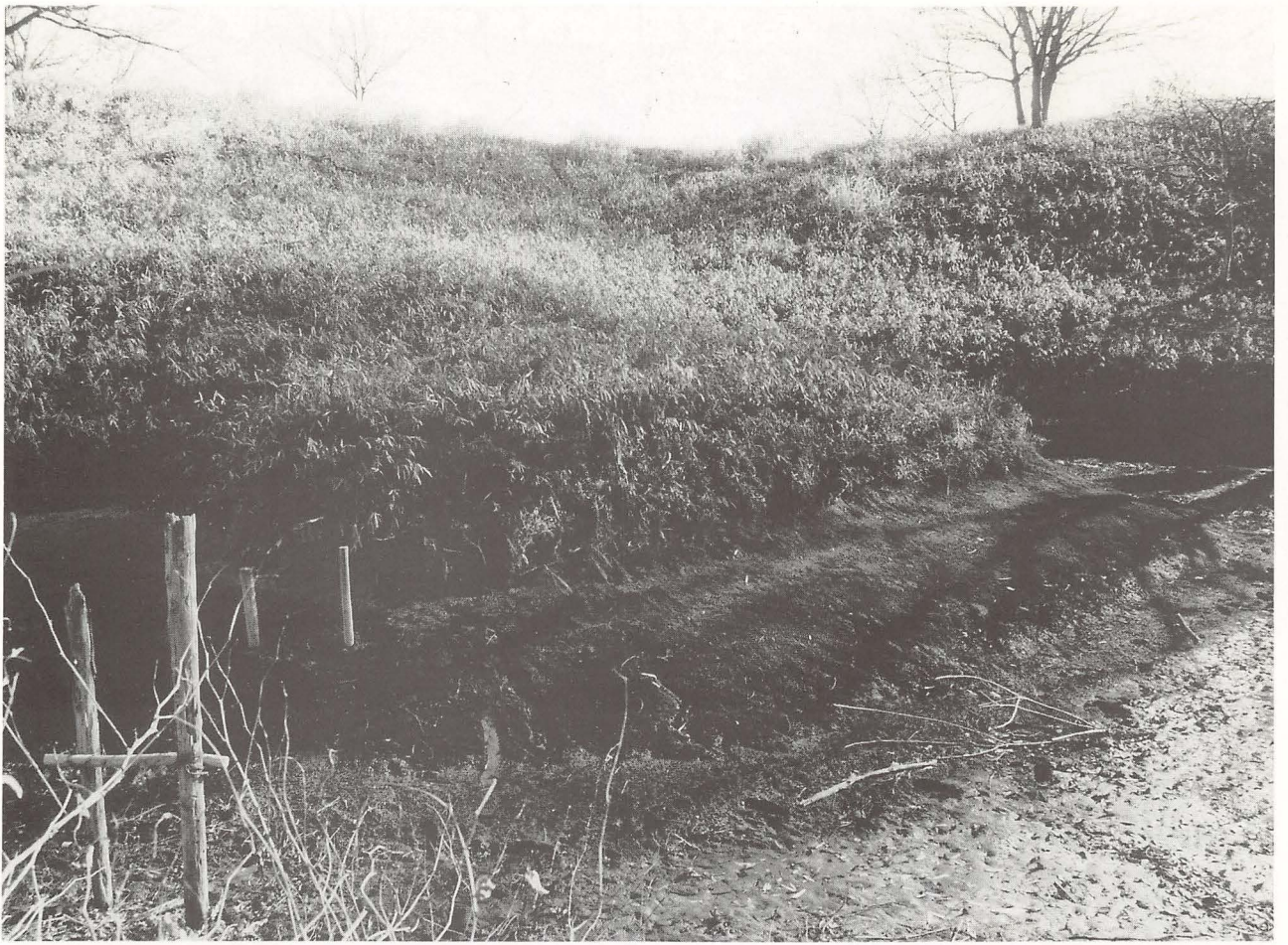
埼玉古墳群南群空中写真（垂直）



奥の山古墳 第1トレンチ（鉄砲山古墳を望む）



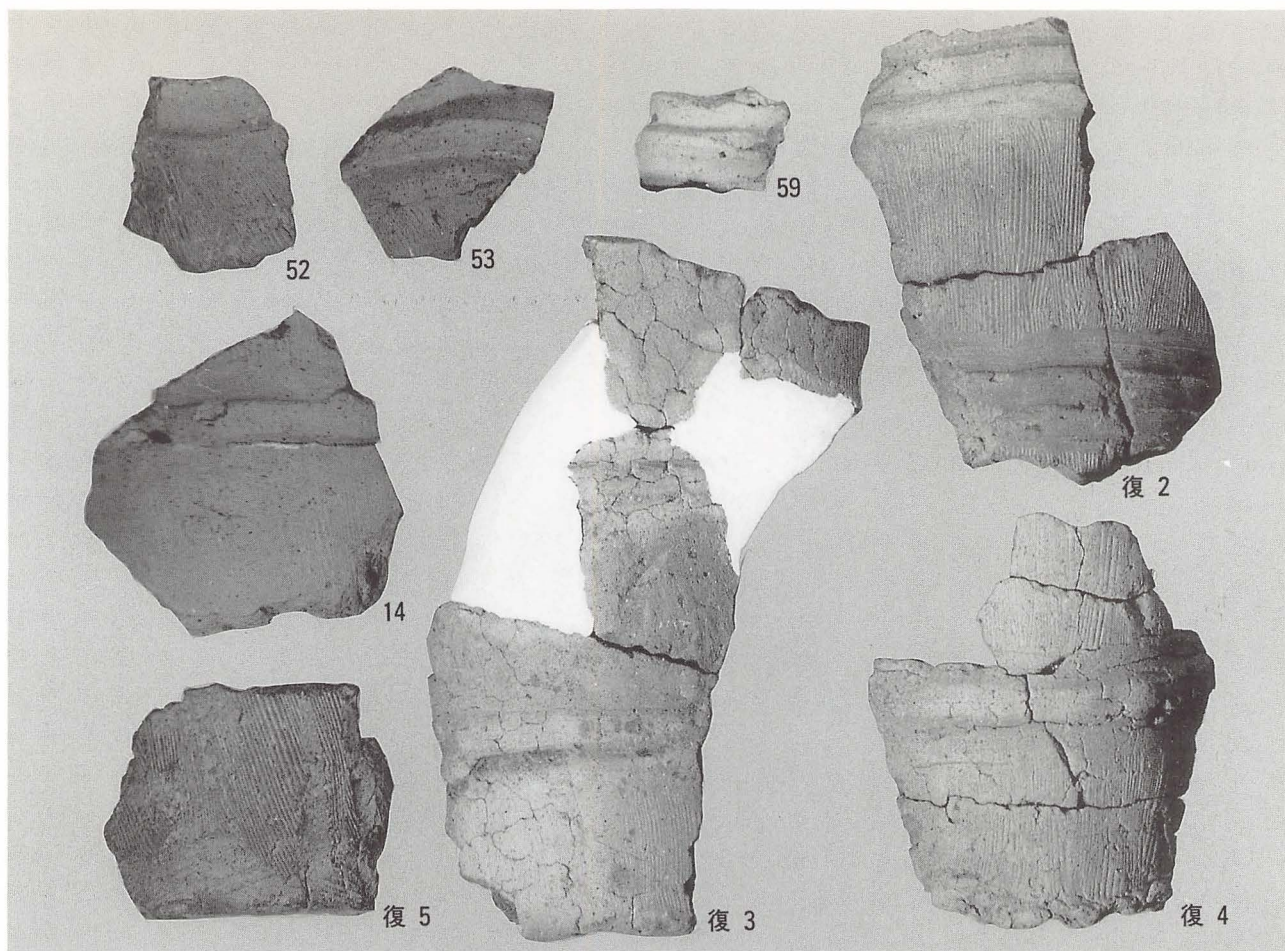
奥の山古墳全景（現状）



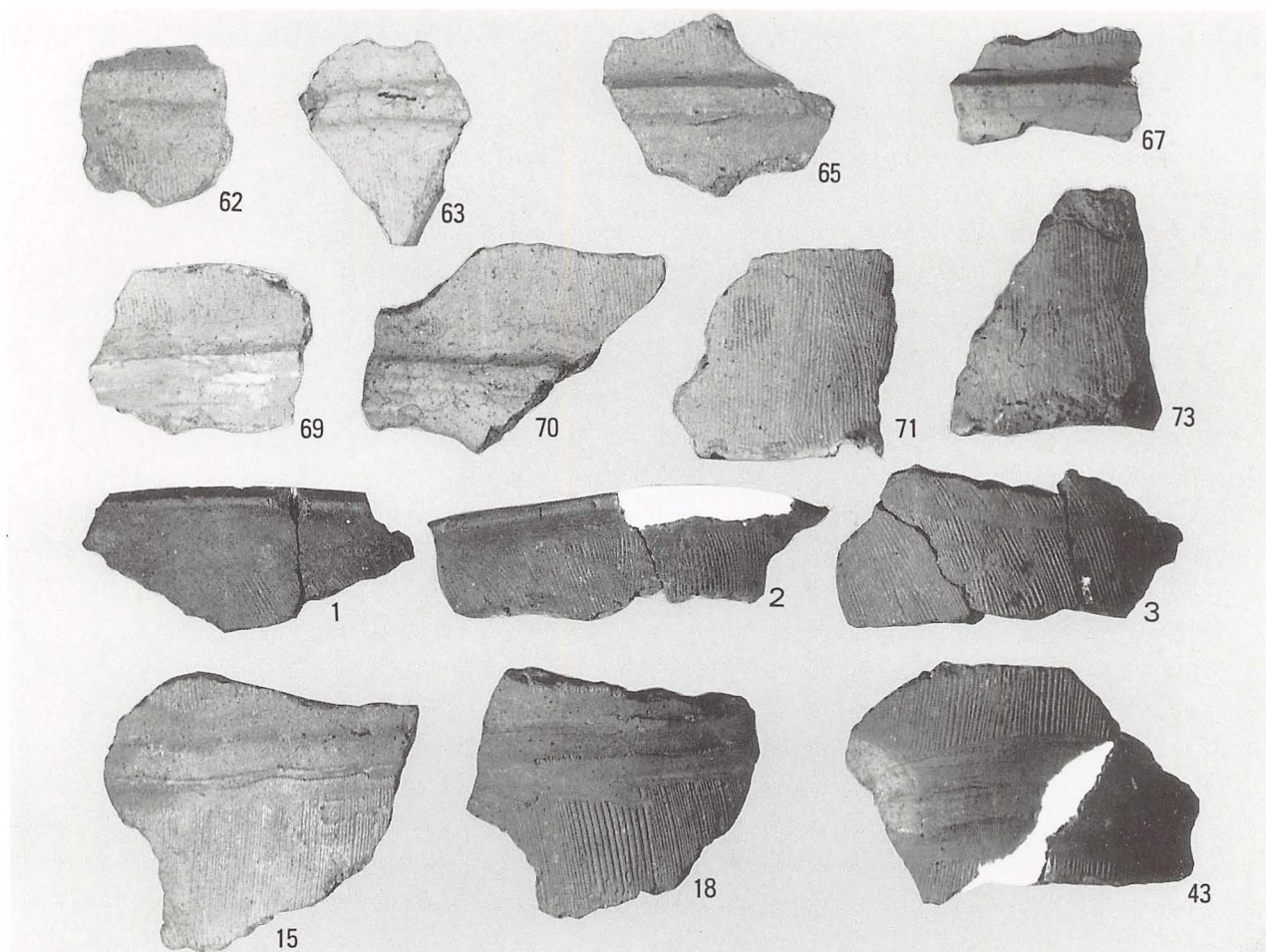
奥の山古墳 造り出し部



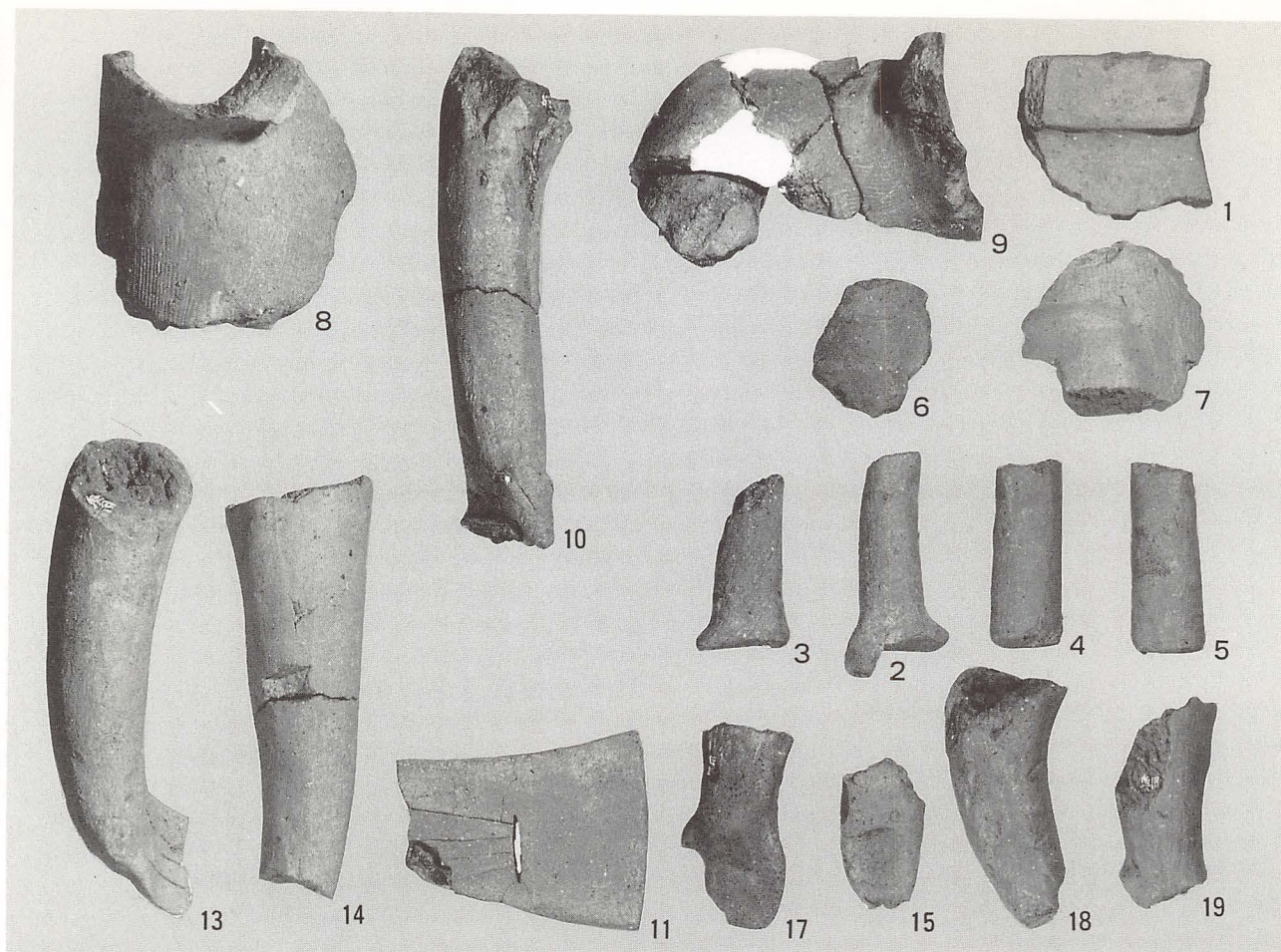
同 上 (墳丘上から)



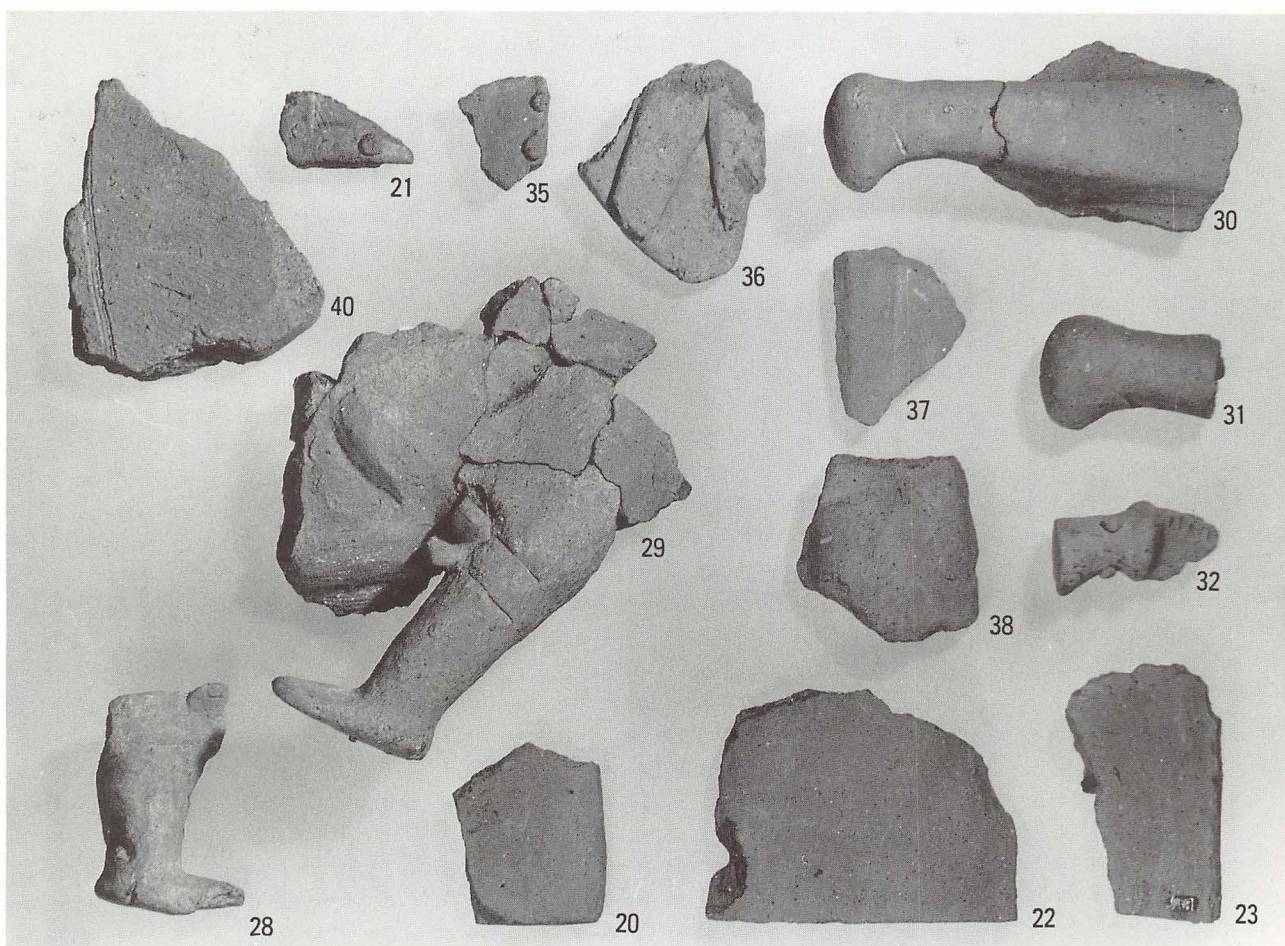
奥の山古墳出土遺物 1 (59はB類朝顔形円筒埴輪、他はA類円筒埴輪及び朝顔形円筒埴輪)



同 上 2 (上半部はB類円筒埴輪、下半部はA類円筒埴輪)



奥の山古墳出土遺物 3 (形象埴輪)



同 上 4 (形象埴輪)



瓦塚古墳空中写真（全景）



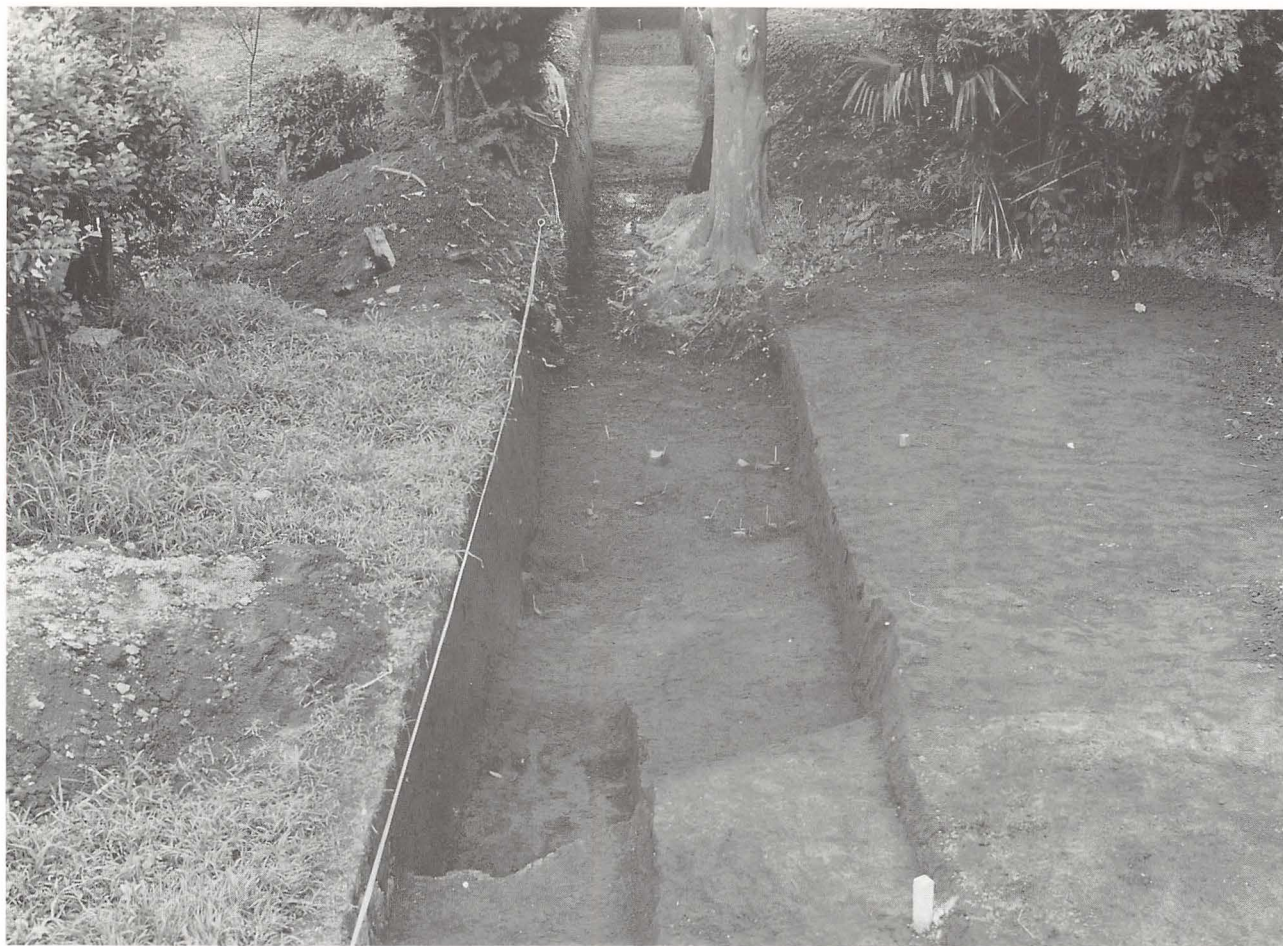
同上（調査区）



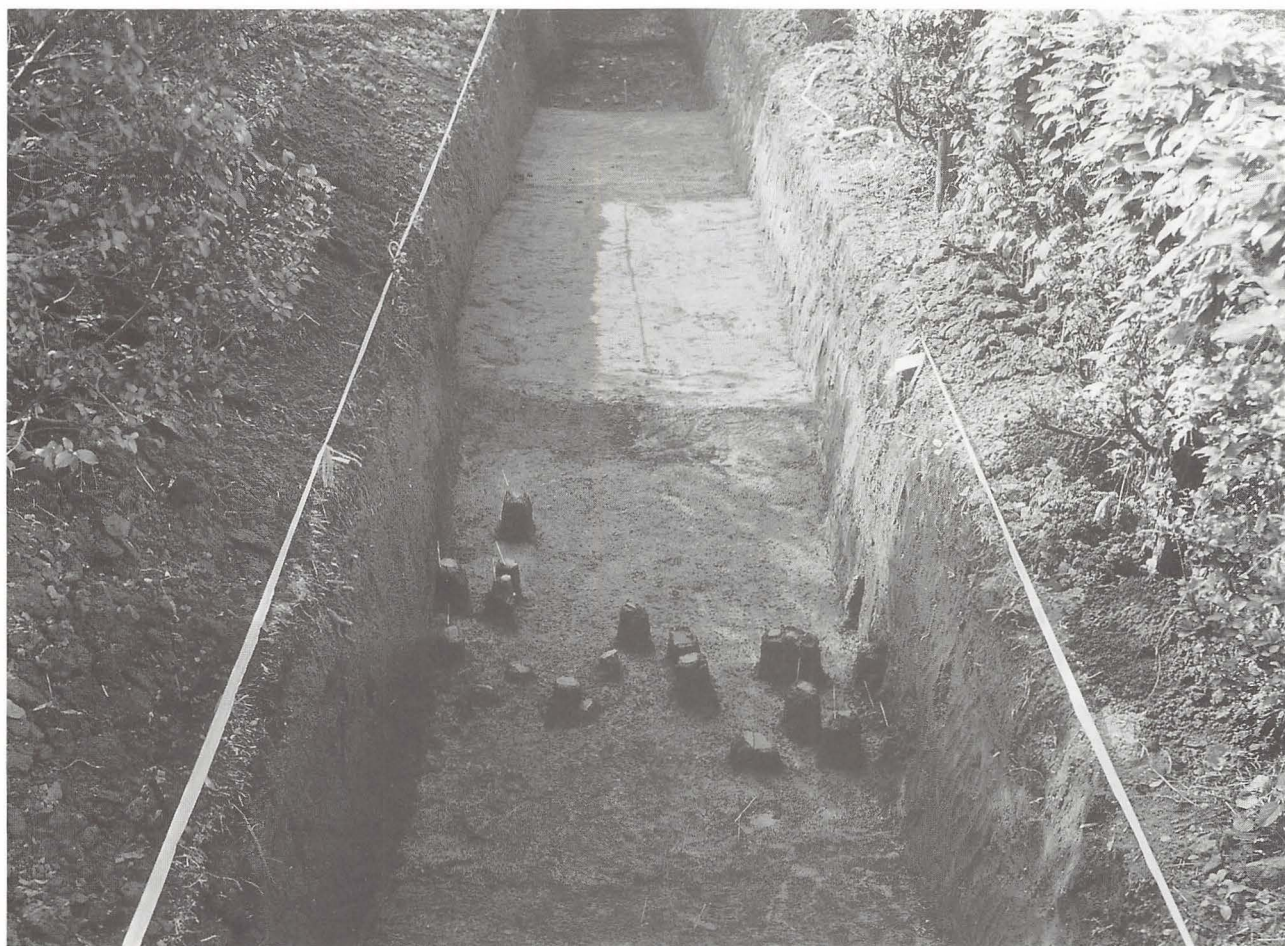
瓦塚古墳 くびれ部拡張区



同 上 遺物出土状況



瓦塚古墳 第1トレンチ全景（墳丘側から）



同 上 遺物出土状況（外堤側から）



瓦塚古墳 第2トレンチ土層（墳丘）

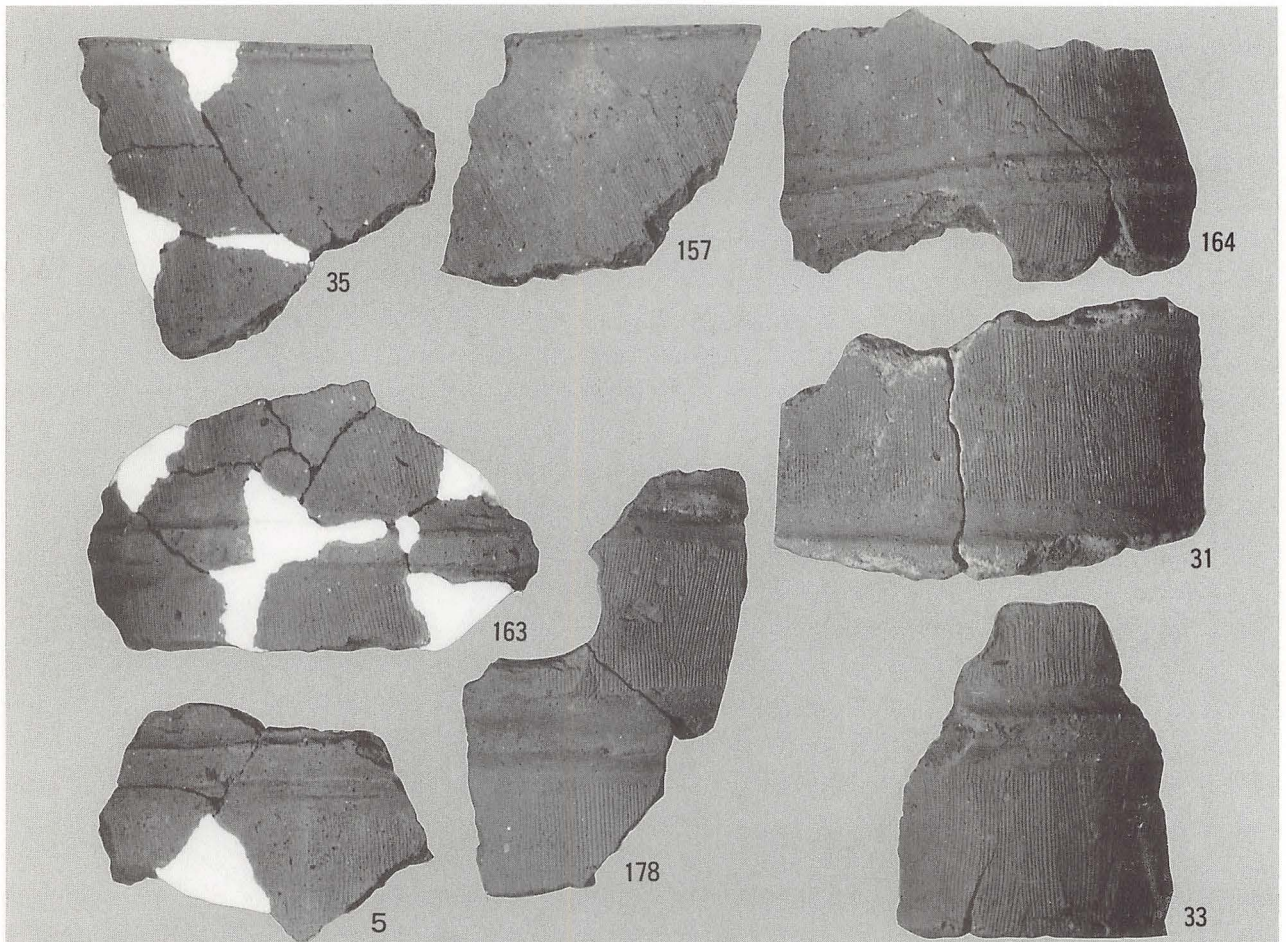


同 上 第3トレンチ周堀立ち上がり部

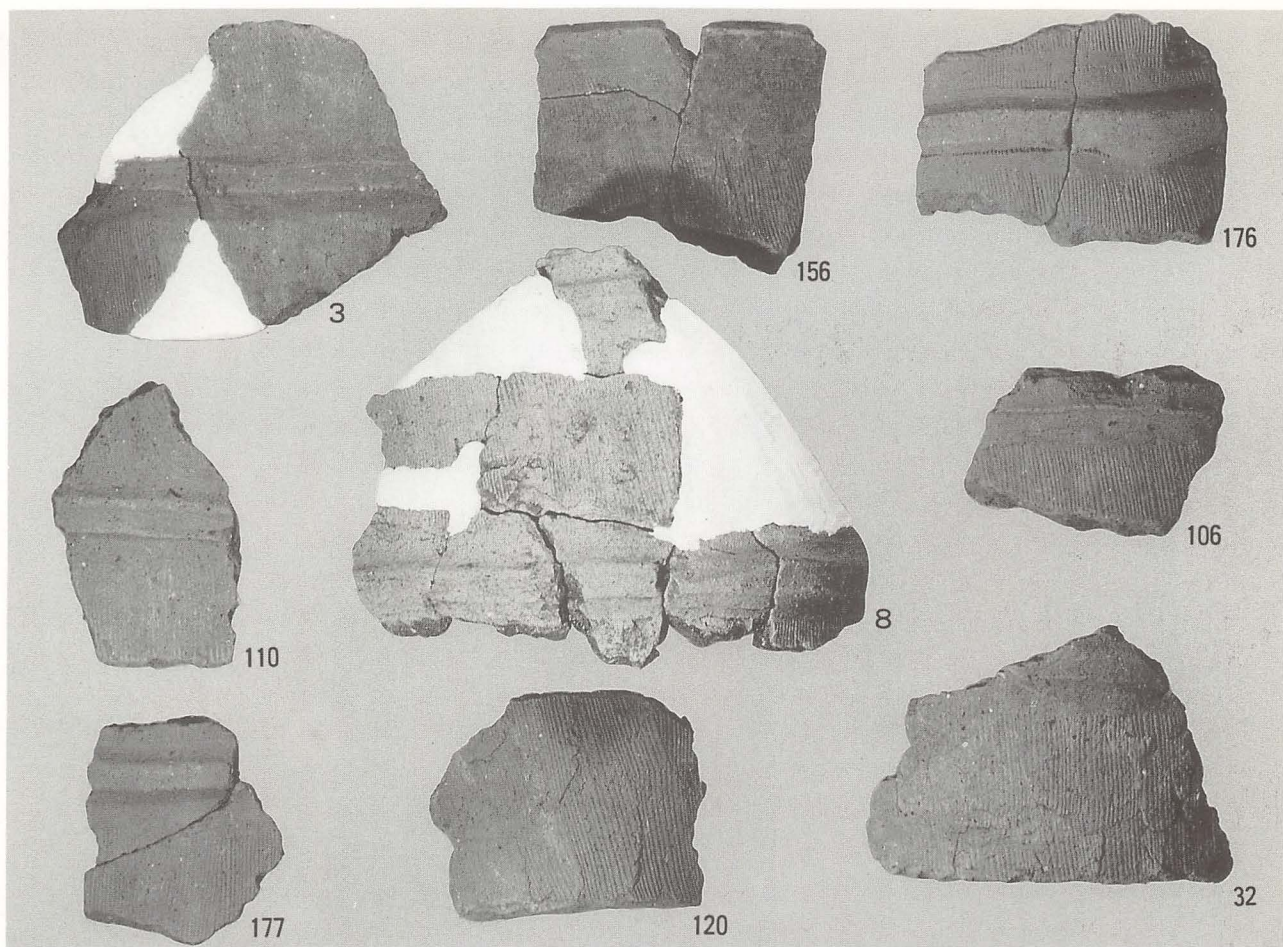


瓦塚古墳出土遺物 1 (円筒埴輪完形品：正面)

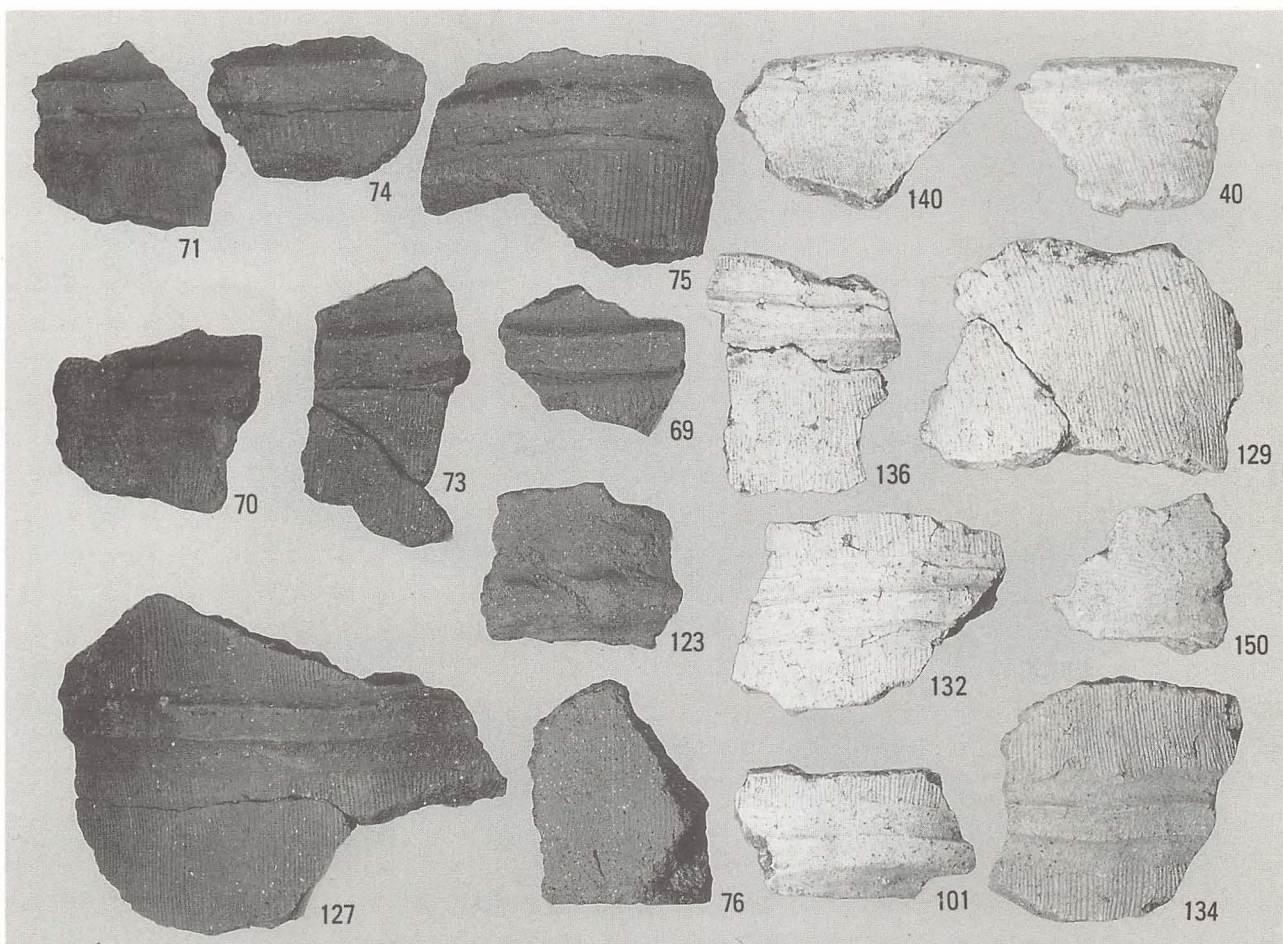
同 左 (左側面)



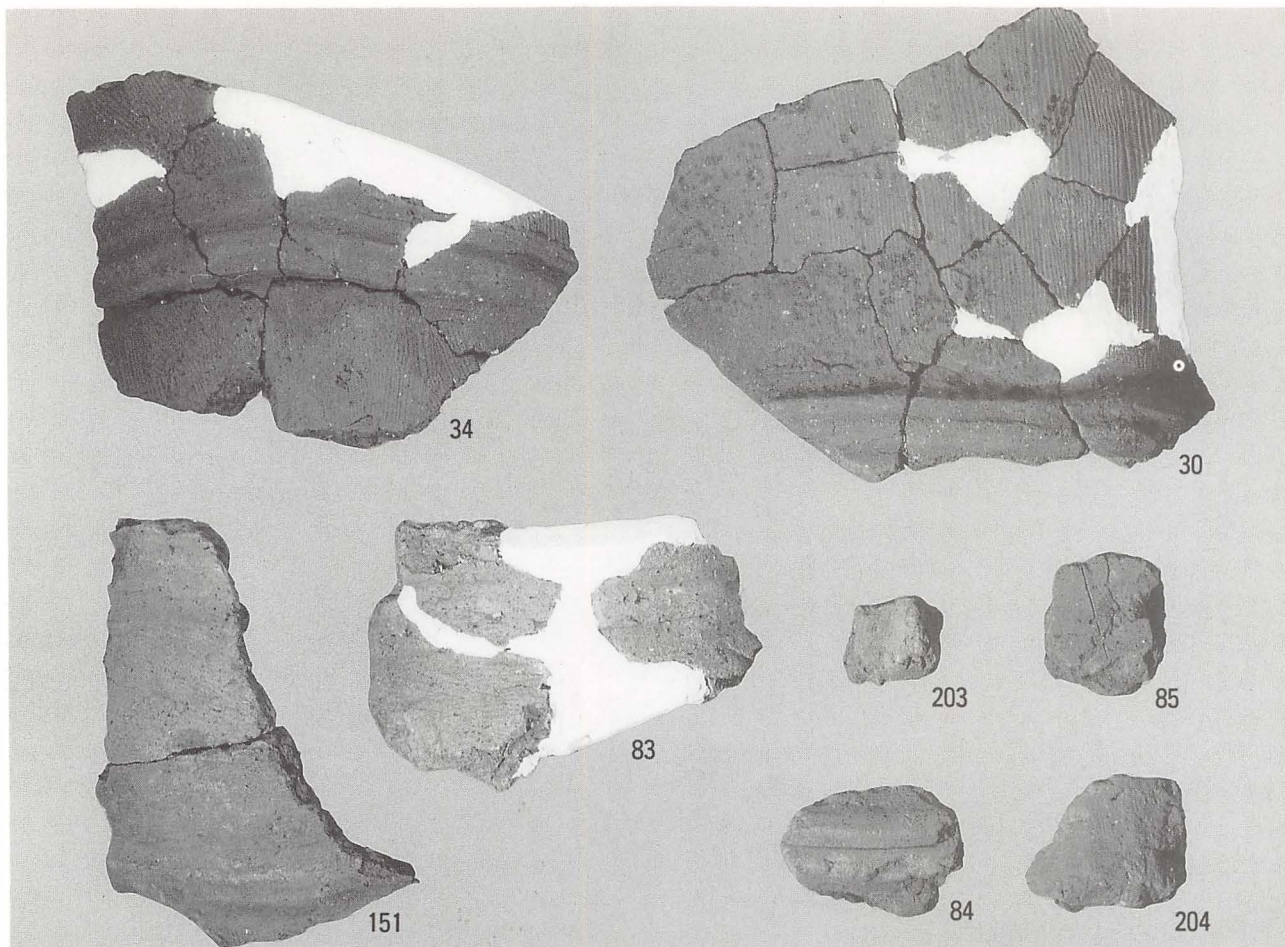
同 上 2 (円筒埴輪片)



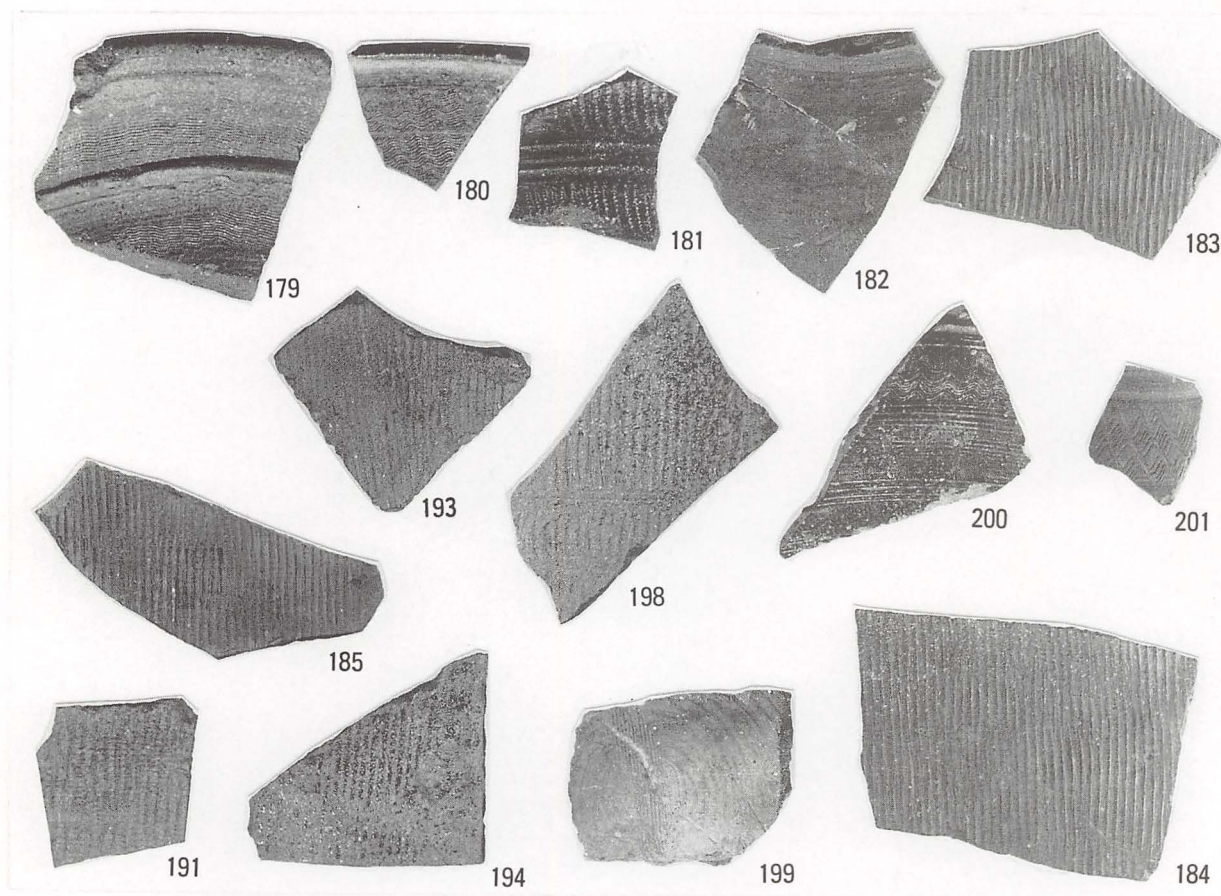
瓦塚古墳出土遺物 3 (円筒埴輪片)



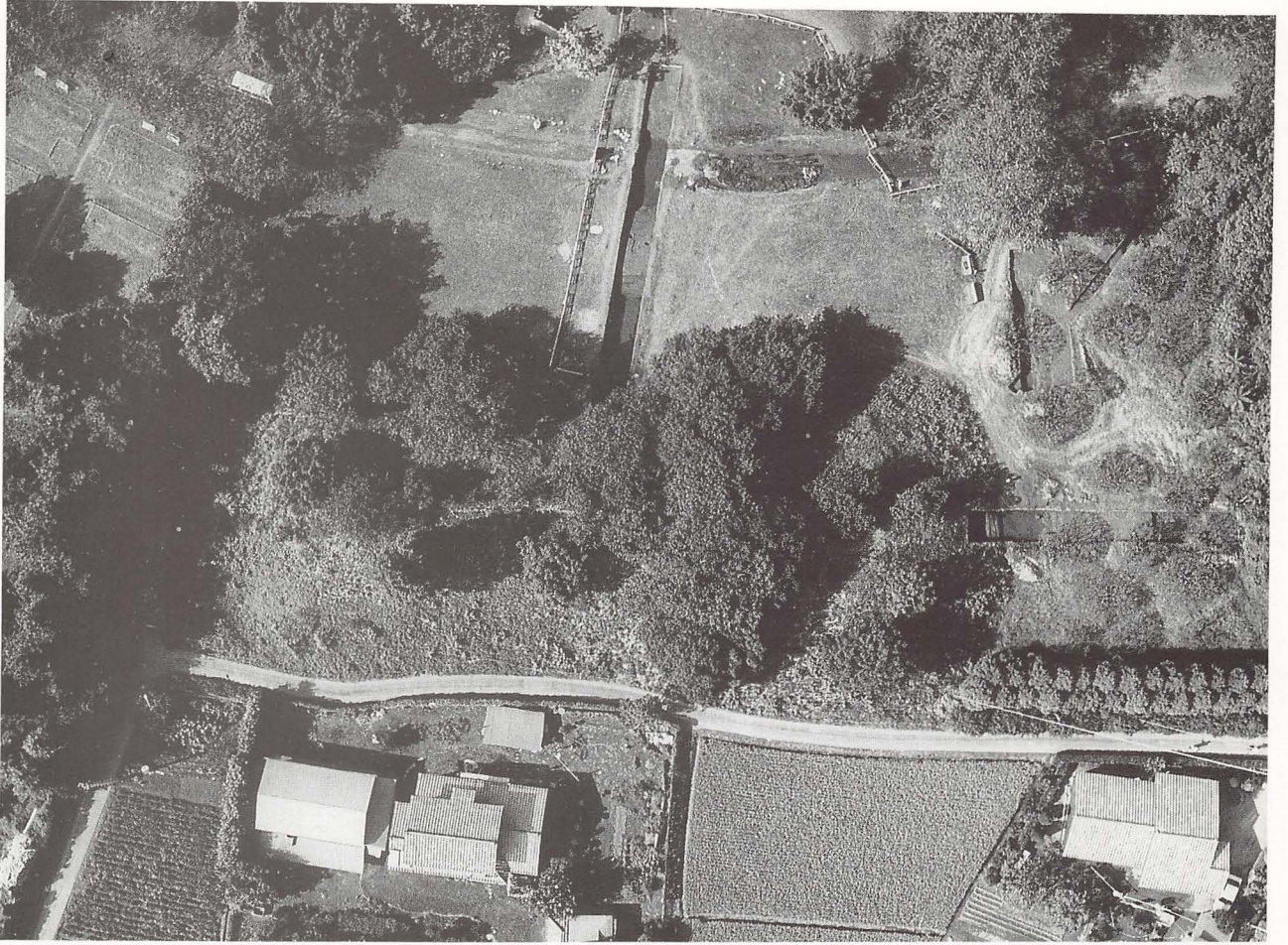
同上 4 (円筒埴輪片)



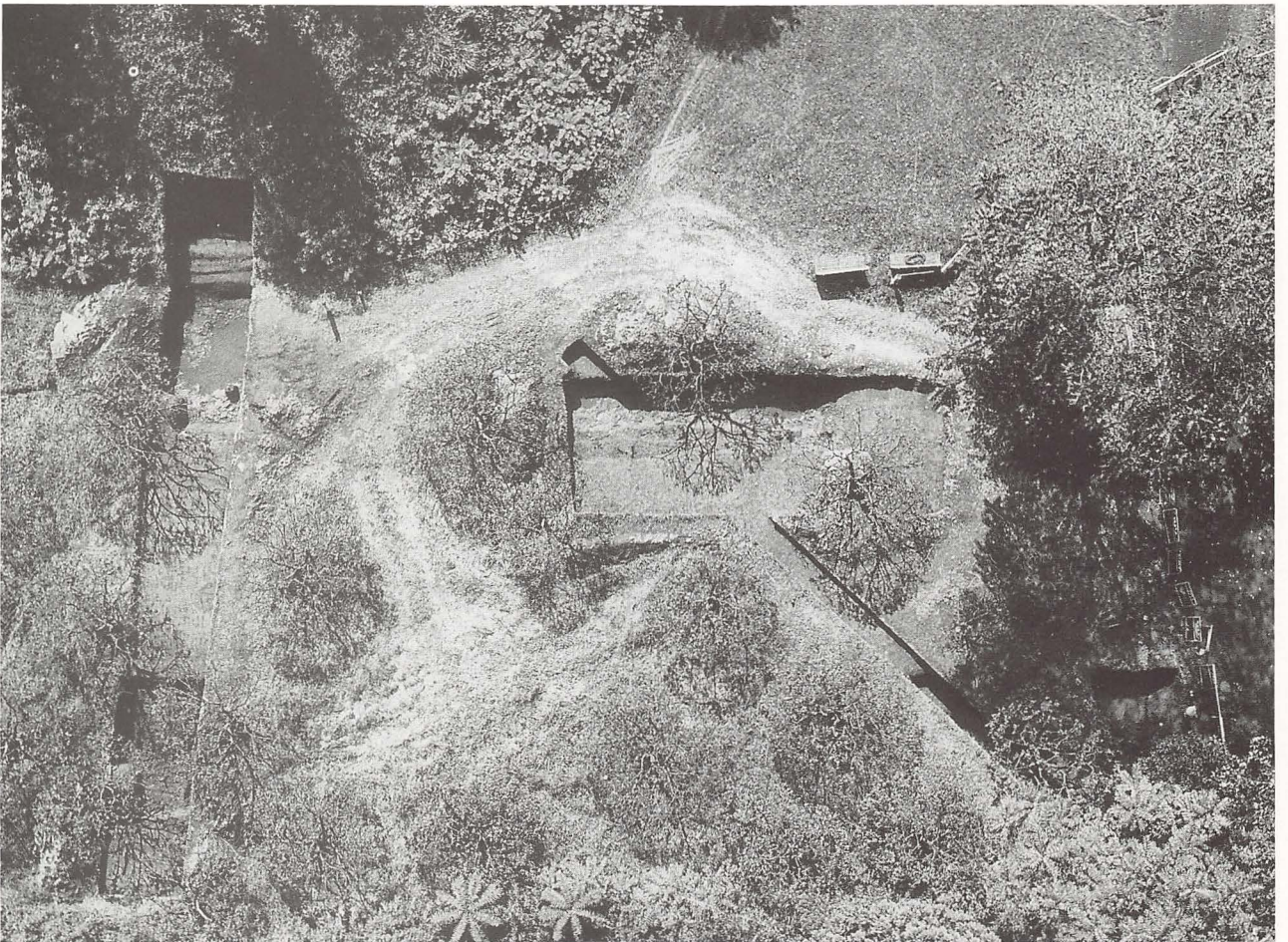
瓦塚古墳出土遺物 5 (円筒埴輪片・朝顔形円筒埴輪片・形象埴輪片)



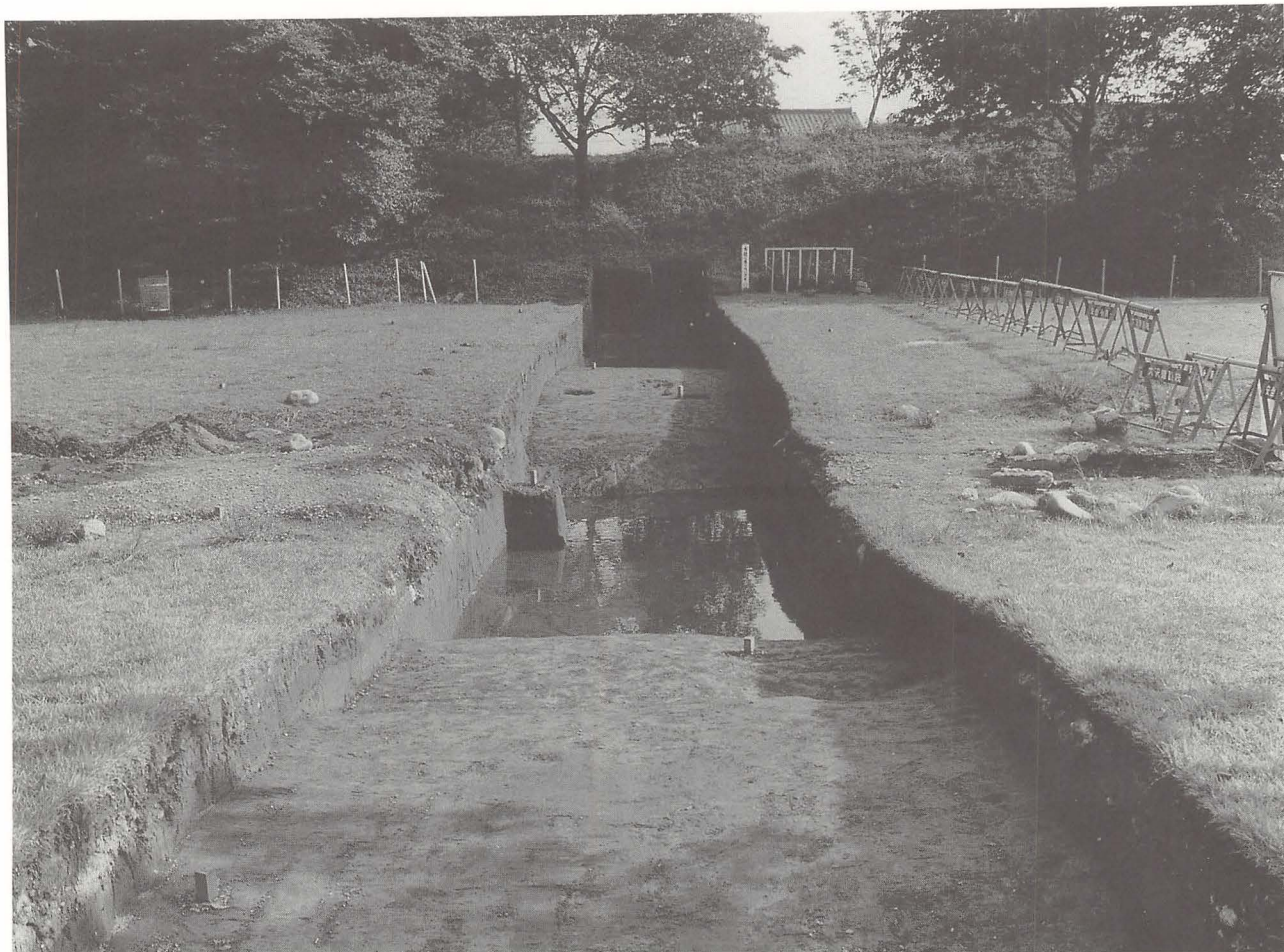
同上 6 (須恵器片)



中の山古墳空中写真（全景）



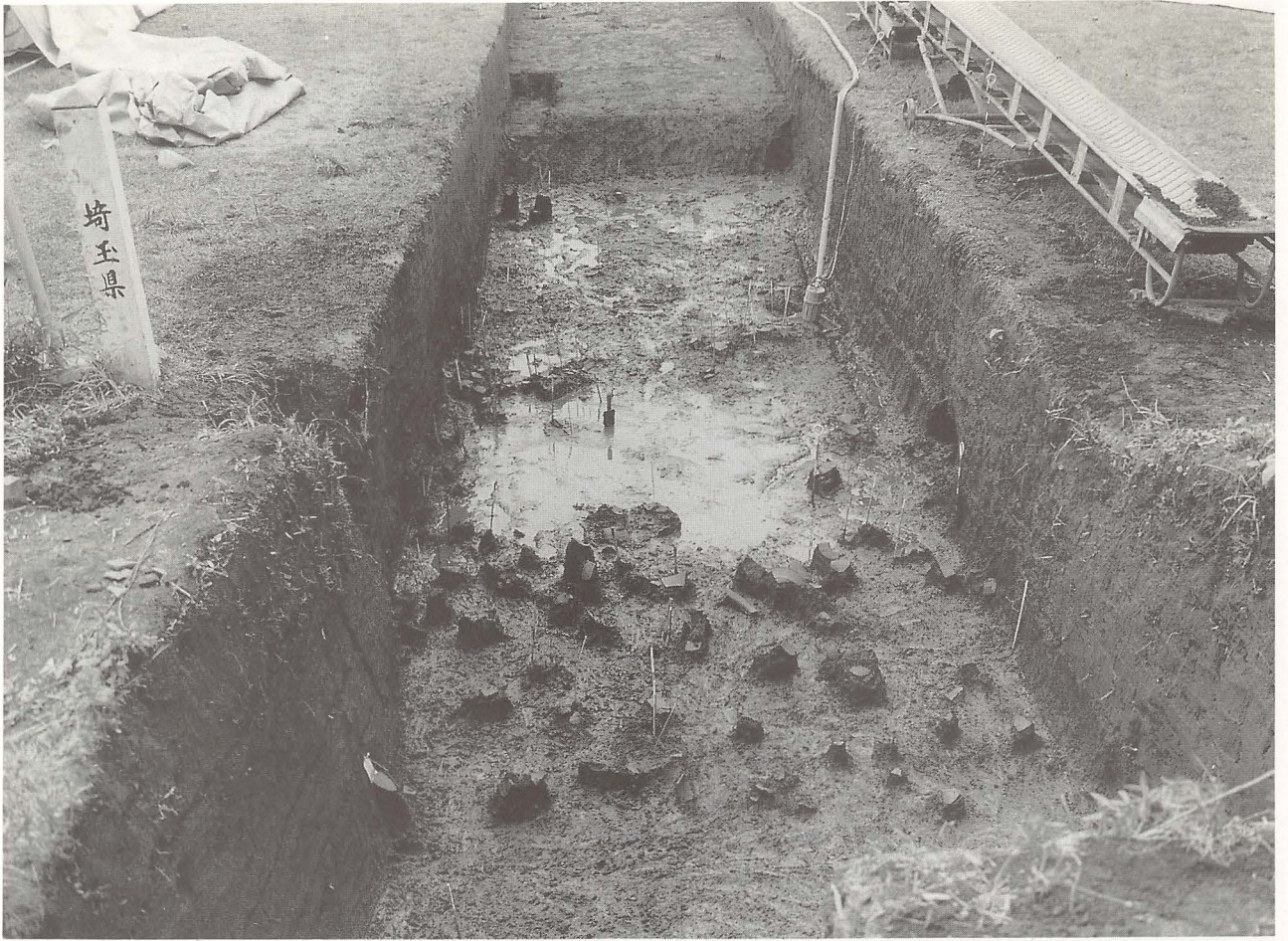
同上（第2トレンチ・第3トレンチ・A区・B区）



中の山古墳 第1トレンチ全景



同上(内堀)



中の山古墳 第1トレンチ内堀の遺物出土状況



同上 第2トレンチ（中堤から内堀と墳丘を望む）



中の山古墳 A区（内堀の外側隅角部）



同上 B区（外堀の外側隅角部）



12



11



13

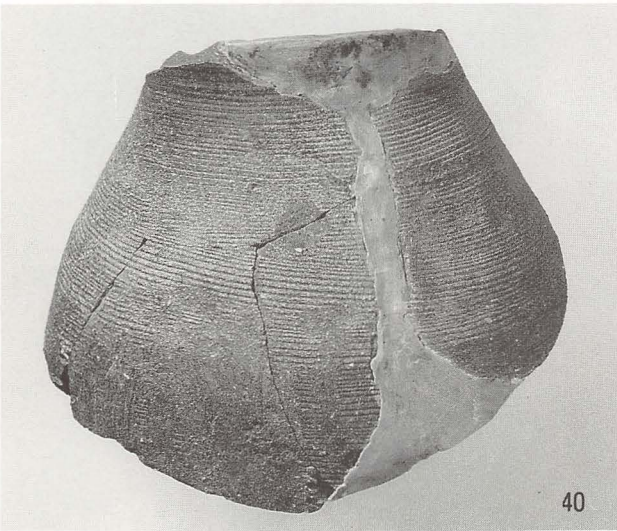


9

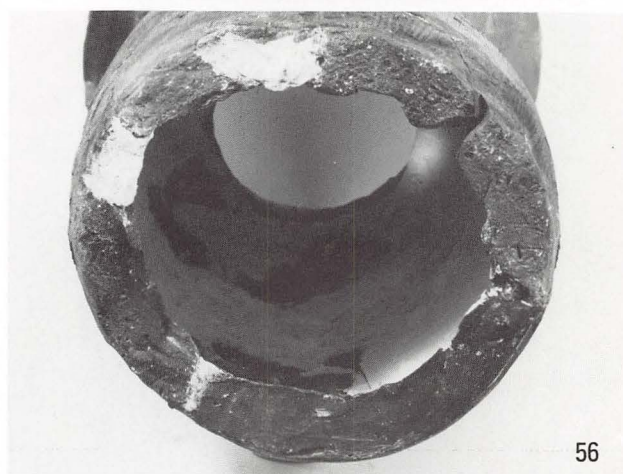
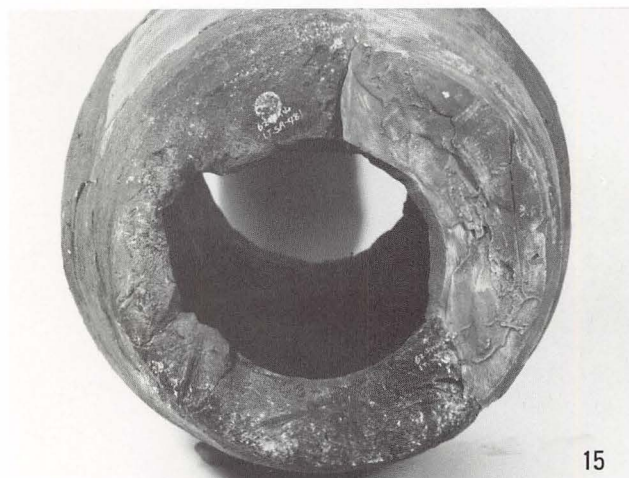
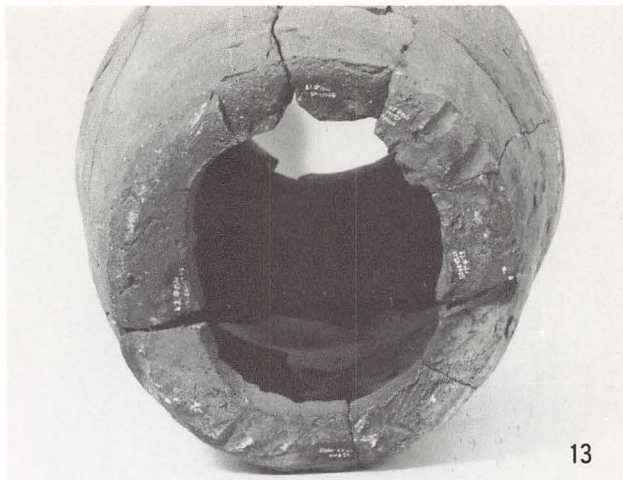
中の山古墳出土遺物 1 (須恵質埴輪壺 A類)



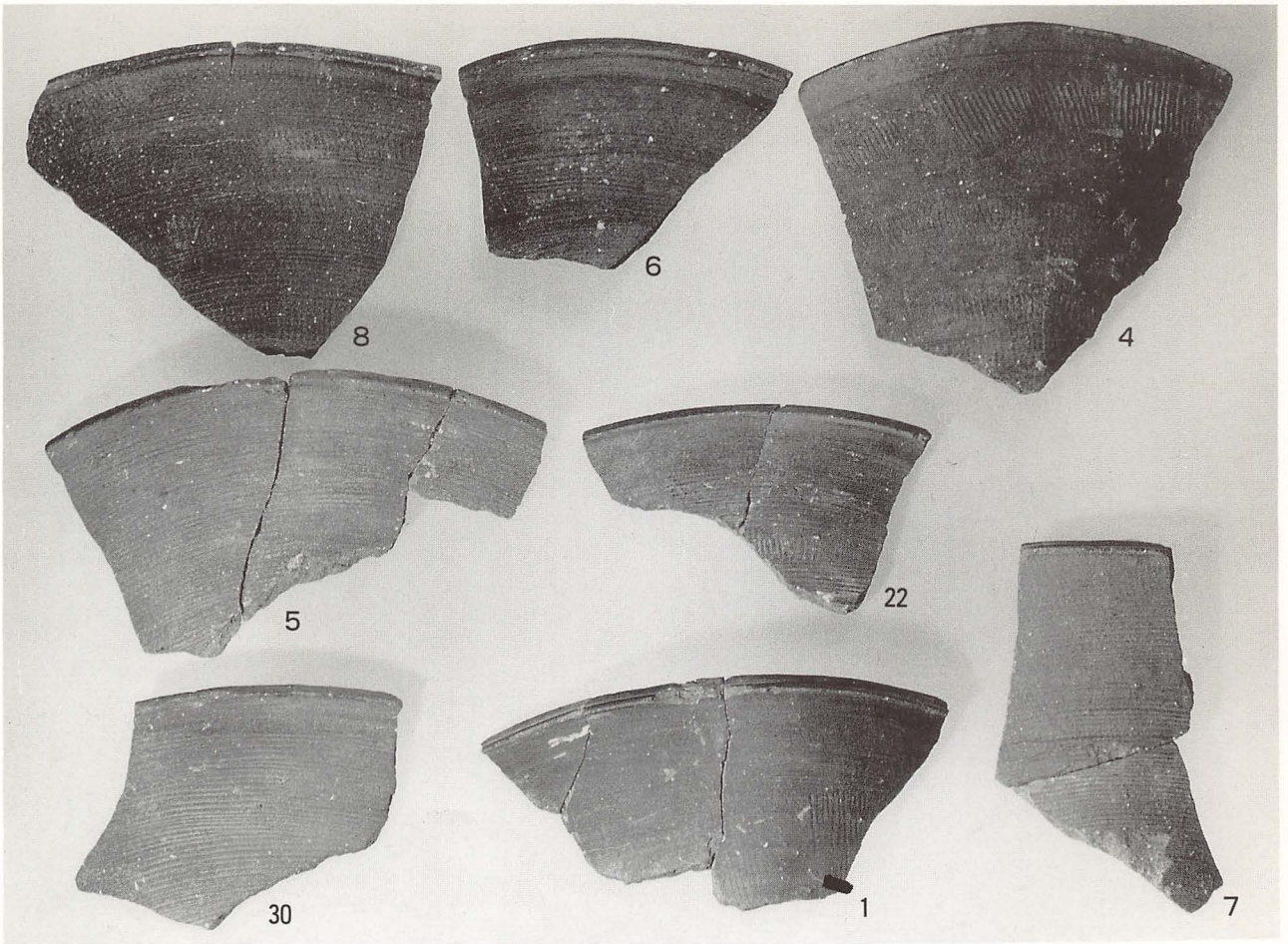
中の山古墳出土遺物 2 (43須恵質埴輪壺 B 類、56須恵質朝顔形円筒、14・15須恵質埴輪壺 A 類)



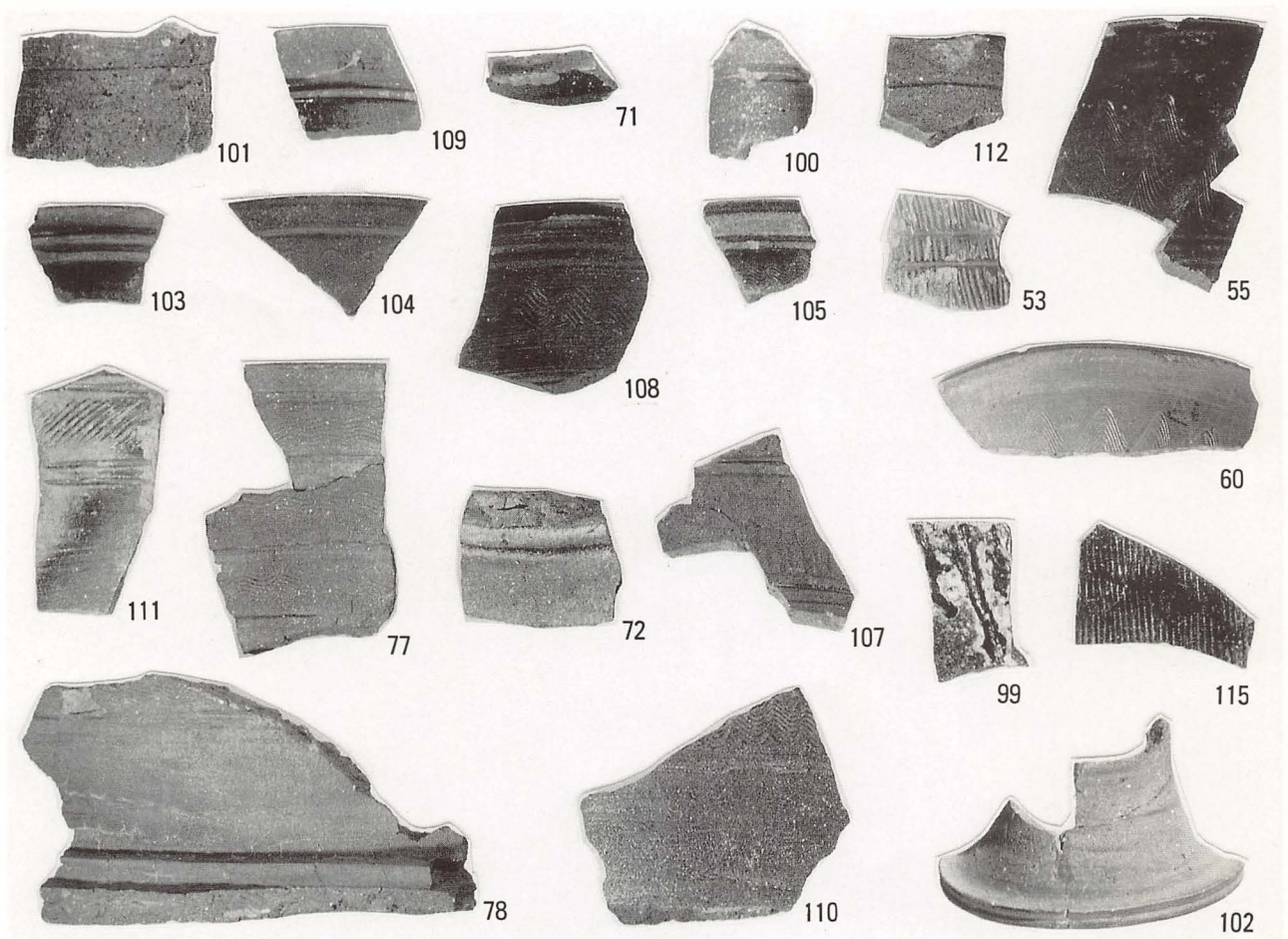
中の山古墳出土遺物3 (10・16・40は須恵質埴輪壺A類、44・46・47は須恵質埴輪壺B類)



中の山古墳出土遺物4 (底面集成)



中の山古墳出土遺物5 (須恵質埴輪壺口縁部片)



同上6 (須恵器片・須恵質朝顔形円筒片)

さきたま史跡の博物館蔵書

埼玉古墳群発掘調査報告書 第七集

奥の山古墳
瓦塚古墳
中山古墳

平成元年三月一七日 印刷
平成元年三月二四日 発行

編集 埼玉県立さきたま資料館
発行 埼玉県教育委員会
印刷 武州印刷株式会社